

「そりやよろしい。象棋盤を持つて来さして、卓子を押して下さい。」

妾は長椅子の傍に座りましたが胸が烈しく動悸打つてミハイルの顔を見る気には何うしてもなれませんでした……窓越しだったり、部屋の向ふだったりした時には自由に彼を見るのですが！

妾は駒を並べはじめました……指が振へました。

「勝負をしようと思つて斯んなことを云つたんぢやないのですよ、……ミハイルは駒を並べつゝ低い聲で云ひました、「あなたに傍に来て貰ひ度かつたからです。」

妾は返事もせず、何方から始めるかも知れないで駒を一つ動かしました……ミハイルは自分の番になつても動かさうともしません……妾は彼を見ました。彼は頭を少し前にのしかけて眞つ蒼になつて哀願するやうな眼附で妾の手を求めるやうな合圖をしました……

妾はその意を了解したのか何うか……それは覚えておませんが、それと同時に何物か頭を渦を巻いて……おづくしながら息もしないでナイトの駒を取つてすつと向ふに置きました。ミハイルは突噠に顔を俯向けて妾の指に唇を當て、盤の上に押つけるやうにして音も立てずに烈しくそれを接吻しました……妾は手を引かうともせねば、引く力もなく、片手で顔を隠したり、涙、今でも思ひ出しませんが、冷たい、けれども幸福な涙が……お、何と云ふ幸福な涙でしたらう……一つどつ盤の上落ち

ました。あゝ妾はその瞬間自分の手を握つてゐる人が何んな人であるかを心の底から知り、また感じました！ 彼は一時の衝動に捕はれた少年でもなければドン・ファンでもなく、女道楽をする軍人でもなく、たゞ最も高潔な、最も善良な人だったので……その人が妾を愛してゐる！

「お、私のスザンナ」と囁くミハイルの聲が聞こえました、「あなたにこの涙より他の涙を流させはしませんよ。」

彼の言葉は間違ひでした……彼は死にました。

けれども斯んな追懐を話して何になりませう……特に、特に、今になつて！

ミハイルと妾はお互のものになることを約束しました。彼はセミオン・マトウエイツチが、その結婚を許さぬ事を知つてはゐましたが、妾にそれを隠さうとはしませんでした。妾も彼の父が許すとは思つてはゐませんでした。そして妾は彼が妾を欺かうとしなかつた事よりも——彼はとても人を欺くことなんか出来ない人でした——彼が自分で自分を欺かうとしなかつたのを喜びました。妾の方では何の望みもなく、彼の望むを望むやうに行き氣でした。彼は云ひました、「あなたは私の妻になるんですが、私はアイワンホーちやありません。私はロウエナ夫人は幸福ではなかつたと思ひます。」

ミハイルは間もなく健康を恢復しました。最う前の様に彼に逢ひに行くことは出来ません、けれど

も萬事は二人で約束してありました。妾は早や末米のことばかり考へてゐました。丁度大きい静かな然し霧に包まれた烈しい河の流れに漂つてゐるやうに、自分の周囲の物には少しも目を呉れませんでした。その間にも胡散臭い眼で断へず見張られてゐました。養父の底氣味悪い眼を見たり、嫌らしい笑ひ聲を聞いたことも一二度ありました。……けれどもこの笑ひ聲、この眼つきも一瞬の間に霧の中に隠れてしまひ……身顫ひはしましたが、直ぐ忘れてしまひ、また噴大な、速い河の流れに身を任せるのでした……

ミハイルが出發する前の日——彼が途中から後返りして妾を連れに歸る約束だったので——妾は彼が信用してゐる召使から彼の手紙を受取りました。それには大きい家から庭に突き出た球突場の低くて廣い室に、九時半に逢ひに来てくれと書いてありました。どうしても逢つていろんな事を定めなければならぬと書いてあるのです。その前に二度も球突場でミハイルに逢つたことがありますので外の扉の鍵は持つてゐました。九時半になるに温かい肩押をすつぱり肩からかぶつて、窃と家を抜け出して、積つた雪を踏み碎きながら球突場に行きました。もやに包まれた月は朧ろに屋根の上から覗き込んで、吹き捲る風は壁の角に當つて、ひゆく物凄いな音を立て、思はずぞつと胸顫ひするのです。妾は鍵で扉を開けて部屋に這入つて元の通りに扉を締めました……と、向ふの壁にぼんやり黒く見え

た影がのこくと二三歩近づいて立ち止まりました……

「ミハイル」と妾が小聲で囁きました。

「ミハイルは最う出られない様にしてあるんだ。私だ！」この聲を聞くと胸が、どきッとなりました。

眼の前に立つてゐるのはセミオン・マトウエイッチです！

逸早く逃出さうとする途端に彼が妾の腕を、ぎゆうと掴みました。

「何處に行く、この、あまつちよめ？ お前はあの馬鹿と密會したも同様だからそのつもりで懲してやる。」

妾は恐怖に麻痺しながらも、なほ戸口の方に逃れやうと奮起しました……が駄目です！ セミオン・マトウエイッチは鐵の鉤のやうな指でしつかり妾を掴まへてゐるのですもの。

「放して下さい、放して下さい、」と哀願しました。

「凝としてゐるんだ！」

セミオン・マトウエイッチは無理に妾を座らせました。ほの暗い闇につままれた、彼の顔は解りません。それに妾は彼に顔を素向けてゐました。けれども彼の烈しい息づかひと齒ぎしりの音だけはよく聞えました。妾は恐怖も失望も感ぜず、たゞ一種の麻痺したやうな驚愕を感ずるのみでした……恐ら

く高の爪に捕へられた、小鳥はこんな麻痺を経験するでせう……セミオン・マトウエイツチの手は相變らずしつかり妾を掴へてゐて、猙獰な野獸のやうな爪で握り締めてゐます……

「あゝ」彼が云ひました、「あゝ」斯んな事をしてゐたのか……、とうとう斯んな事になつたのか……あゝ、待て！」

立上らうとすると狂暴に妾を握り締めるので痛さに思はず聲を立てかけました。それから罵言と悪口と威嚇が一時に降つて來ました……

「ミハイル！ ミハイル！ 何處にゐらつしやるの？ 助けて下さいな、と妾が叫びました。

セミオン・ミハイリツチはまた烈しく妾を揺すりました、……今度は最うたまりません……妾は叫びました。

すると彼も氣が附いたのか多少穏やかになつて妾の腕を放してくれました。でも相變らず妾から二三歩の處に扉を後ろにして立つてゐます。

「二三分が立ちました……妾は身動きさへしません。彼は矢張り烈しい息づかひさへしてゐます。

繼て彼は口を開いて、「凝と座つたまゝ返答しろ。私はお前の行ひがまだ墮落してしまつてゐないか何うか、まだ道理を聞き分ける身を持つてゐるか何うか？ 知り度いのだ。一時の馬鹿げた出來心は大

目に見てやるが、しぶとく剛情はると勘辨しないぞ！ 悴の……」「こゝで息をついで、「ミハイル・セミオンツチはお前と結婚する約束でもしたのか？ しなかつたのか？ 返事をするんだ！ 約束したのか、え？」

妾は無論返事はしませんでした。

セミオン・マトウエイツチはまた烈しい憤怒に驅られました。

「お前が黙つてゐるのは約束した證據だと認める、と暫らくして云ひました、「そうしてお前は私の娘にならうとたくらんでゐるのだな？ うまい考へだ！ 然し、お前も四つや五つの子供ぢやあるまいし、あの間抜けは目的を果すために何んな馬鹿げな約束でもするかも知れない位なことはお前にも解るはずだ。またそれだけぢやないお前は私の私が……この古い家柄のセミオン・マトウエイツチ・コル・トフスキーガ、そんな結婚に同意すると思つてゐるのか？……それともまた親の恩恵を蒙るつもりだつたのか？……墮落ちでもして、こつそり結婚して歸つて來て、ちよつとした芝居をして、私の足元に跪いて涙もろい年寄りの情に縋るつもりだつたのか？……返事をしろ、馬鹿！」

妾はたゞ頭を垂れただけでした。妾を殺すことは出来るかも知れません。けれども妾に言葉を云はすことは——それは彼に出來ないです。

彼は暫く部屋の中を彼方此方歩いて稍々聲を穏やかにして、

「まあお聞き、お前はかう考へちやいかん……お前はかう思つちやいかん……お前にはこんな云ひ方ぢやいかんだ……お聞き、お前の氣も解らないことはない。お前は吃驚して氣が轉倒してゐるのだ……氣を引き締めるのだ！ 今は私が悪魔……亂暴者の様に見えるかも知らんが、私の事も考へてみるがよい、終るのも當り前なんだ。こんなに云ふのも當り前なんだ、また私が悪魔や亂暴でないことは是れ迄の爲たことを見ても解るはずだ。私が此處に来て以來どんなにお前を待遇したか考へてみるがい……其後ミハイルが病氣になつてからの待遇など考へてみるがい。斯んな事を云つて何も思を着せるつもりぢやない、たゞ……これに對してお前が感謝の念を持つてゐるなら、其の感謝の念に對しても足を踏みかけた危ない路から後返りをしてくれるのが本當だと思ふだけなのだ！」

セミオン・マトウエイツチはまたぶら／＼歩いて、それから立止まつて軽く妾の腕を叩きました、それが丁度先程烈しく握られて痛んでゐた處で、其の跡は長い間青く朽ちてゐました。

「實際、」と彼は言葉を續けました、「私たちは頑固だ……すこし頑固だ！ 私たちは自分の利益が何んなものか、何處に在るか、こんな問題はちつとも考へてみようと思ふ。お前が利益は何處にあるかと訊ねたとする、さうすると探し廻る必要はないのだ……お前の直ぐ傍にあるのだ……私が此處に

る。父としては、家の主人としては難かしい事は云はねばならぬ……それは私の義務だからね。けれども私はそれと同時に一個の人間であることはお前にもよく解るだらうと思ふ。無論私は實際的の男で感傷的な無駄言なんか嫌ひな方だが、萬事と相容れないやうな期待はお前も自分の心から棄てなくちやならない、そんなものは無意味だから。——そんな行ひの不道德なことは、云ふまでもないことだ。こんな事はお前が少し考へて見ればよく解るだらう。で、簡單にまつ直ぐに云つてしまふが、私はお前に對する待遇を今まで通り以上にしたいのだ。私はお前の幸福を、しつかりした基礎の上に置き、安全な地位の保證をしてやらうと思つて何時も氣に懸けてゐたし、今も氣に懸けてゐるのだ。何故と云ふに私はお前の價値を認めてゐる、お前の才能や賢さを認めてゐる、それにまた……（この時セミオン・マトウエイツチは妾の方に少し身を屈めました……お前はこんな眼をしてゐて白狀するが……私のやうな年の寄つた者でも、それを見れば……何うしても心が動くのだ、何うしても動くのだ。」

この言葉を聞いて妾は、ぞつとしました。自分の耳を信ずることが出来ませんでした。妾は最初はセミオン・マトウエイツチが妾と、ミハイルの仲を割くために賄賂を使つて、つまり「賠償金」を遣らうと云ふのかと思つてゐました……それがまあ何を云ふのでせう？ 段々眼が闇に馴れるに従つて、

セミオン・マトウエイツチの顔がはつきり解るやうになりました。笑つてゐるのです。焦々氣忙しさうにの妾前を小刻みに歩きながら、あの老人の顔が笑つてゐるのです……

「ねえ、何うだ、私の申し出を何う思ふね？」

「申し出？」……と妾は思はず繰返しました……意味が少しも解りませんでした。

セミオン・マトウエイツチは笑ひました……實際あの嫌らしい薄笑ひをしました。

「そりやさうだ、お前たちのやうな若い女は」——と云ひかけて云ひ直し——「若い婦人とは……若い婦人は……皆んな同じことだ。……他の事は何も考へようとしな……たゞ若い男でありさへすればいいのだ。お前たちは戀なしには生きて行かれないのだ！ 何うしても生きて行かれないのだ。そりやさうだ！ 若い男はいゝに違ひない！ だが愛することが出来るのは若い男に限つてゐるとお思ひかへ……温い心を持つた年寄りもあるよ……そして一度年寄りがある女を思つたら——最うそりや岩のやうなものだ！ 何時までたつても心が變らないし！ そこは顔の、のつべりした輕薄な若い體のろとは違つたものだ！ さうともく年寄を馬鹿にしたものぢやないよ！ 年寄は何でも出来るのだ！ たゞ常り前に取扱ひさへすればいいのだ！ いゝか……いゝか！ それから接吻だつて、年寄もその位のことには心得てゐらあ、ひッひッひッ……」セミオン・マトウエイツチはまた笑ひました。

「さあ！ ね……お前の可愛い手を……證據として……それだけいゝのだ……」

妾は椅子から飛上つて力一杯彼の胸を突いてやりました。彼はよろめきながらとぼけた様な、吃驚した様な聲を立てて危く轉びかけました。其の時彼が何んなに嫌らしく、何んなに氣味が悪るかつたかは、とても人間の言葉では云ひ表はせないほどです。妾は怖ろしさも忘れてしまひました。

「彼方に行つて下さい、嫌やなお爺さん、彼方に行つて下さい。古い家柄の旦那！ 妾もあなたの血、コルトフスキーの血を受けてゐるんです。そして妾は自分がこの古い家柄に生れて來た日と時を呪つてゐるんです！」

「なに！……なんだと！……なに！」とセミオン・マトウエイツチが息をはづませて云ひました、「お前は……ミハイルに逢ひに來て……私に掴まへられてゐながら……そんな事を云ふのか……え？ え？」

それでも妾は黙つてゐられませんでした……何うにもかうにもならないものが胸の底から込み上げて來るのです。

「まああなたが、あなたが、あなたの兄の弟のあなたが……そんな失敬なことを……妾を何と思つてゐらつしやるのです？ すつと前から妾があなたを嫌つてゐるのがお解りにならなかつたのですか？」

……申し出とは何です？……直ぐ妾を此處から出して下さい！」
妾は扉の方に近よりました。

「あゝ、さうか！ あゝ、あゝ！ そんな事を云ふのか！」セミオン・マトウエイツチは忿怒に任じて鋭い聲で云ひましたが、思ひ切つて、妾の方に近よらうともしません……「ちよつと待て、ラツチ・イワン・デミアニツチ、出て来るんだ！」

妾の傍の扉とは反対の向ふの扉がぱつと開いて、両手に火の點つた燭臺を持った養父が現れました。兩方から灯に照らされた彼の赤い圓い顔は痛快さうな復讐の満足と、大事な仕事の役をはたすスラッ人の奉仕の悦びに輝いておりました。……おゝ、その嫌らしい白い眼！ 何時になつたら妾はこの眼を見ないで済むやうになるでせう？

「濟まないが直ぐこの子を連れて行つてくれないか、」とセミオン・マトウエイツチは養父に向いて頼める手で横柄に妾を指差しました。「お前の家に連れて歸つて錠を叩して……指一本動かさないやうに……蠅一疋這入れないやうにして置いて呉れ給へ！ 何とか後から私が知らせるまでね！ 窓も締切つて置いて下さい！ 萬一盲くやつてくれたまへ！」

ラツチは燭臺を球突臺の上に置いて、セミオン・マトウエイツチに丁寧に頭を下げて、それから意地

悪るさうな微笑を浮べて、傲然と妾の方に近づきました。逃げられぬ鼠に近づく猫が丁度こんなだらうと思ひます。妾は急に力を落してしまひました。妾はこの人は自分を叩くかもしれないと思ひました。ぶる／＼體が顫えて來ました。さうです、あゝ、恥辱！ あゝ、不目！ 妾は顫へました。

「さあお嬢様、何うぞ此方へ」とラツチが云ひました。

彼は悠々と落着いて妾の肘の上の處を握りました……彼は妾が暴れないのを知りました。妾は自分から進んで扉の方に歩いたのですが、其の時の妾の心は、たゞ最う一時も早くセミオン・マトウエイツチの處から逃れたいと云ふ希望で一杯だつたのです。

けれども嫌な老人は後から連いて來て、ラツチも妾をその主人の方に向き返らせました。

「あゝ！」と老人が拳を振りつゝ云ひます、「あゝ！ 私を……私の兄の弟だと云つたな？ 血が續いてると云つたな、え？ ぢやお前は従兄弟と結婚するつもりか？ そんな事が出来るか？ え？ 連れて行つてくれ！」と養父の方に向直りました。「そしてよく見張つてゐるのだよ！ ちよつとでもあれと示し合せをしたら……酷い目に合はしてやれ……連れて行つてくれ！」

ラツチは妾の部屋の方に連れて行きましたがその途々何も云はずに一人忍び笑ひをしてゐました。窓を締め切つて扉を締めて出かけようとした時、彼は先刻、セミオン・マトウエイツチにしたやうに頭

を丁寧に垂れてお辞儀をして氣味が好まざるに大きな聲を上げて笑ひました！

「お休みなさい、殿下、」と彼は息をはずませながら云ひました、「王子様に逢ひ損なつてお氣の毒さま！ これも悪くはないでせう！ あんな示し合せなんかしないやうに、これもこれからのいゝ見せしめだ！ はッはッはッ！ だが本當に盲く行つたもんだなあ！」立去つたかと思つたらまた扉から顔覗けて、「ねえ、何時か『覺へてゐろ』と云つて置いただらう？ どうだ？ 私の云つた通りだらう？ はッはッ！」體が錠の中で軋る音がしました。妾はほつとしました。最つとのことで手まで縛られてしまふかと心配してゐたのですが……まあ手だけは助かつて自分のものにはなりました！ 妾は直ぐさま着物の絹の紐を引つち切つて保蹄を拵へて頭に立てかけました妾！ 直ぐまたそれを投げ棄てました。「彼奴等を喜ばしてなるものか！」と獨言を云ひました、「本當に氣遣ひだ！ ミハイルに任してある生命を自分の勝手にすることが何で出来るものか！ 出来るものか！ 酷い悪黨奴！ できるものか！ まだお前さんたちの手には乗らないつもりだよ！ あの人があの地獄から引き出して下さるから、あの人が……妾のミハイルが！」

かうは云つたものゝ妾は直ぐ彼も同様に閉じ込められてゐることに氣が附いて、寢臺の上に顔を押めて「はさめん」と泣きました……泣きました……そしてたゞ若しかしたら扉の外の敵が氣味よさ

うに聞き耳を立てゝゐるかも知れないと云ふ心配が妾の涙を飲み込ませるのでした……

最う疲れました。妾は今朝から書き續けてゐるのですが早や夕方になりました。若し一度でもこの紙から妾の身を離せば、最う二度とペンを執る氣にはなれないでせう……急ぎませう、急いで書きてしまひませう！ あの怖ろしい日から後の事はとして考へてはゐられませんから！

二十四時間の後には、妾は締め切つた馬車に載せられて、離れた小屋に移されましたが、その小屋の周圍には、澤山の百姓たちがゐて、妾を見張つてゐました。かうして、六週間の間閉じ込められてゐました！ ちよつとの間だつて、妾一人の時はありませんでした……、後で知つたことですが、養父はミハイルが歸つて来た時から、始終ミハイルと、妾に犬をつけてゐたさうです。ミハイルから妾に手紙を持つて来た召使にも、金を掴ましてあつたさうです。それからまた、あの翌日の朝父と子の間に、胸が割けるやうな場面があつて……父は彼を呪つたさうです。ミハイルは決して二度と父の家に足は踏まないと云つてペテルブルグに立ちました。養父が妾に加へようとした打撃は彼の頭に剣ね返つて来ました。セミオン・マトウエイツチが、彼に最う此處にゐて領地の世話をして貰ひ度くないと告げたのです。拙い奉仕が許しがたい筈になつたのです。誰かこの騒動の矢面に立たねばならなかつたのでした。けれどもセミオン・マトウエイツチは、ラッチを厚くねぎらつて彼が莫斯科に行つて仕

事を始めるに十分な金を與へてやりました。莫斯科に立つ前には妾も家に歸されましたが監視の厳しいことは相變らずです。「温かい小さな位置」を「妾のお蔭」で奪はれた養父は其の恨みがましい態度を一層増しました。

「何うしてお前あんな騒ぎをやつたんだ？」と彼が荒々しい鼻息をしながら云ひました。「實際あの爺さんがあんまりのぼせて急ぎ過ぎたものだから、それであんな拙い事になつてしまつたんだ。然し無論あの人も虚榮心を傷つけられたから最う今更ら元の通りに戻ることは出来ないだらう！ 若しお前が最う一日か二日辛抱してゐれば萬事三本脚のやうに旨く行つたのだ。お前も乾いた麵麩ばかり食はなくてもいゝやうになるし、私だつて元の通りに暮せるところだつたのだ！ あゝ、女の髪は長いが……智慧は短かいものだ！ がまあ心配するな、まだ私がお前の味方になつてやるし、あの若い綺麗な旦那だつて賢いからね！」

云ふまでもなく妾はこんな侮辱を黙つて忍んでゐました。セミオン・マトウエイツチには、二度と逢ひませんでした。彼に取つても自分の息子と別れるのは少々こたへたのでせう。彼が自分でした事を後悔したのか、それとも永遠に妾を妾の家に縛つて置くつもりだつたのか——多分この方が本當らしいのですが——兎に角彼は妾に扶助料を約束して、妾が結婚する日まで養父にそれを渡してくれること

になりました。……妾は今でもこの恥かしい施物、この扶助料を受けてゐるのです……つまりラツチが妾の代りに受取つてゐるのです……

妾たちは莫斯科に移りました。妾は憐れな母の記憶に對して、も、莫斯科に着いたら養父とは二時間と一緒にゐまい、二時間と一緒にゐまい……何處と云つて目當ては無いが、何處かに飛び出さう……警察に行くか、知事の足元に跪くか、長老議員の足元に跪くか、何とかしようと思つてゐました。そして田舎を出發する間際に若し妾方の小間使がミハイルの手紙を竊と妾に渡してくれなかつたら、何んな事をしたか知れないのです。おゝ、その手紙！ 妾は幾度その手紙を繰返し／＼讀んだでせう！ 幾度その手紙に唇を押當て、接吻したでせう！ ミハイルは決して氣を取り落すな、自分の變りない愛を信じてくれ、自分は何んな事があつても他の女に氣を移しはしないと書き、妾を妻と呼び、何んな障礙にも打勝つてみせると書き、未來の計畫を書き、それからたゞ一つ忍耐だけは何うしても守つてくれ、暫らくの辛抱だけは何うしてもしてくれと書いてゐました……

それで妾は忍耐して辛抱することに決めました。あゝ、彼の云ふことなら何んな事でも聞いたでせう、何んな辛抱でもしたでせう！ 妾はこの手紙を自分のお守り、自分を導く星、自分の錨のやうに思ひました。妾は養父に烈しく叱られたり罵られたりする時にはよく胸に手をそつと入れては（ミハ

イルの手紙を護身符の中に縫ひ込んでみました。こゝに微笑するのです。ラッチが酷く叱れば叱るほど、妾の心は一層穏やかに、軽く、楽しくなりました。……終ひには母が氣でも違ふのぢやないかと、内々心配してゐる様子が彼の眼に讀めるやうになりました。妾はこの手紙を受取つてから間もなく最つと喜しい第二の手紙を受取りました。……間もなく二人は逢へるのです。

あゝ逢へる日の代りに或る朝が來ました。……妾はラッチが這入つて來るのを見ました。……また例の氣味の悪い勝ち誇つたやうな顔。……手には「傷病者」の一頁を持つて居ましたが、それには近衛大尉——ミハイル・コルトフスキーの死が報じてありました。

最うこの上に何の云ふ事がありませう？ 妾は生き残つてラッチの家で暮しました。彼は前より一層妾を憎むやうになりました。最う彼の腹の黒いことはまるで妾に見抜かれてしまつたので、そのため益々妾を憎むのです。けれども最うそんな事は妾に取つては何でもないのです。謂はゞ無感覺になつたやうなもので、自分で自分の運命に興味を持たなくなつたのです。あの人の事を思ふこと！ あの人を思ふこと！ これより他には何の楽しみもなければ、何の興味をひくこともないのです。

可愛さうなミハイルは妾の名を呼びつゝ死んでしまひました。……彼が田舎に來た時つれてゐた忠實な召使が妾にさう云つて聞かしてくれました。その同じ年に養父は、エレオノーラ・カルポーウナと結

婚しました。セミオン・マトウエイツチは、間もなく死にました。遺言によつて妾の扶助料は増されました。……妾が死んだらラッチの手に入ることになつてゐます。

二年……三年経ちました。……六年、七年……生命は流れて次第に退潮になつて行きます。……だのに妾はたゞ其の退ひて行く潮をぼんやり眺めてゐるだけです。たとへて見れば丁度子供が河端で小さい池を掘つて、土手を作つて一生懸命に其の内の水を出すまいとしてゐるやうなものです。終ひに其の水が出だすと、今までの骨折を忘れてしまひ、今まで守つてゐた水が一滴も残らず退いて行くのを喜しさうに眺めてゐるやうなものです……

斯うして妾は生きて來ました。斯うして妾は生活して來ました。さうして遂に一つの新しい思ひがけない暖い光……」

手記はこの言葉の處で切れてゐる。次の頁は引裂かれ、結末の數行は線を引いて消してあつた。

十八

あまりに意外なこの手記を讀んだため、スザンナの來訪から受けた印象があまりに深かつたため、私は一晩睡ることが出来なかつたが、夜が明けると直ぐファストフに大急ぎの使ひを遣つて、手紙で一刻

も早く莫斯科に歸らぬと飛んだ事になると知らせ、スザンナに逢つて手記を受取つたことも書いて置いた。手紙を持たして遣つた後で私は一日家に止つてゐて、今頃ラッチの家では何んな事が起つてゐるのだらうと、そんな事ばかり考へてゐた。と云つて自分で彼の家に出掛けてみる氣にもなれなかつた。けれども伯母が頻りに焦々してゐたのは私にも氣が附いた。伯母は始終香錠を焚かせて、あの誰も成功しないと云ふ「旅人」の骨牌遊びをしてゐた。見知らぬ女が而も夜遅く來訪したと云ふことは伯母の耳に入らずには置かなかつた。彼女は直ぐ大きな口を開けた深淵のそばに危く突立つてゐる私を想像して、「Extraits de Lecture」と題する小さい寫本の中にある佛蘭西語の文句を口ずさんだり、溜息をついたり、唸つたりしてゐた。夜になると、私は寢床のそばの小さい卓子の上に、ド・ジランドの論文の「熱情の悪影響に就いて」といふ章が開いたまゝ置いてあるのを見出した。この本は無論伯母の指圖で伯母の友達の年を取つた方の女が私の室に持つて來たものであるが、この女が私方でアミューシユカと呼ばれてゐる譯は同名の小さい杉犬に顔がそっくりだからで、最う可なりな年の老嬢なのだ。が頗るセンチメタルでロマンチックな人であつた。其の翌日の私は終日氣を揉みながら今にもフストフが遣つて來るか、手紙が舞ひ込むか、ラッチの家から何かのたよりがあるかと待つてゐた……ラッチの家から私方にたよりのする筈はないのだが。事によればスザンナの方で私を待つてゐるかも知

れない……が私には何しても先づフストフに逢つた上でなければ彼女を訪ふ勇氣はなかつた。私はフストフに送つた自分の手紙の文句を一々思ひ出して味はつてみた……が矢つ張りそれは充分力のある文句に違ひなかつた。夜遅く、とうとう彼がひよつこり遣つて來た。

十九

彼は何時もの速くはあるが落着いた足どりで私の部屋に這入つた。私は彼の顔の蒼白いのに打たれた。旅行の爲に面寒れはしてゐたが、彼には滅多に見られない影愕と、好奇心と、不満足の表情が表はれてゐた。私は直ぐさま断け寄つて彼を抱き締め、私の言葉に従つた事を懇ろに謝し、スザンナと取交した對話のあらましを語つて聞かした後で例の手記を渡した。彼は實際、二日前にスザンナが座つた窓際に行つて、私には何とも言はずにそれを讀みはじめた。私も部屋の片隅に退いて外見をつくらふために書物を取り上げはしたものの、白狀するが私の眼は書物の上を越して、そつとフストフの方ばかり眺めてゐた。彼は始めの中は落着き拂つた左の手で唇の上に生へた生毛をひねくりながら讀んでゐたが、身動さへしなくなつた。彼の眼は行を追つて走り、口は微かに開いてゐた。隨てそれを讀み終ると彼は頁を返して、あたりを見廻し、ちよつと考へに沈んだ後また始めから終ひまで繰返

して讀んだ。それから立上つて手記をポケットに突込んで扉の方に行きかけたが、ふと立止まつて部屋のまん中に佇んだ。

「何う思ひます君は？」と私は彼が口を切るのを待たないで訊ねた。

「あの女に對して濟まない事をしました、あんまりそゝつかしい……酷い……惨酷な事をしました。ついウイクトルを信用したものだから——」

「え！ 君があんなに輕蔑してゐたウイクトルあの人が何んな事を云つたのです？」

フストフは腕を拱いて斜に私の方に向いた。彼が心に恥じてゐるのは私にも解つた。

「君も覚えてゐるでせう、と彼は口こもりながら云つた、「あのう……ウイクトルが……扶助料のことを話してゐたのを。私はあの言葉が氣になつたのです。あれが元になつたのです。それからウイクトルにいろ／＼訊ねて……左様したらあの男が——」

「あの男が何う言つたんです？」

「あの男が、考人……何と云ふ名前でしたつけ？……さう／＼コルトフスキーだ、コルトフスキーがスザンナに扶助料を與へてゐるのは……其の譯は……つまり……その……損害賠償の意味だと云ふのです。」

私は両手を振り上げて、

「で君はそれを本當にしたのですか？」と訊ねた。

フストフはうなづきながら、

「え！ 本當にしたんです……それからまたあの男は、若い方の人とも……實際私が悪かつた。」

「そして君は何もかも棄て、しまふつもりで飛び出したのですか？」

「はあ、こうなつちや……他に方法がないと思つたものですからね。あんまり野蠻でした、あんまり野蠻でした。」

私たちは二人とも黙つてゐた。二人とも相手の方が恥ぢてゐると感じてゐた。けれども私の方が心が安らかで、私は自分を恥ぢてはゐなかつた。

二十一

「自分の間違ひだことが解らないかぎり、あのウイクトルの骨を片つ端から折つてしまつてやる。最う彼奴等の計畫がすっかり解つてしまつた。スザンナが結婚すれば扶助料が貰へなくなるからだ……馬鹿野郎！」かう云ひながらフストフは齒きしりをした。

私は彼の手を握つて、

「アレキサンドル、あの女に逢つた、ですか？」

「いゝえ、着くとすぐ此處に來たんです。明日行きませう……明日の朝早く。このまゝぢや放つて置かれない。何うしても放つて置かれない！」

「ですが君は……あの女を愛してゐるのですか、アレキサンドル？」

「フストフは少し氣を悪くした。」

「そりや愛してゐますよ。深くあの女の事を思つてゐます。」

「立派な、眞實な心を持った女ですよ！」と私が叫んだ。

「フストフは焦れつたさうに足を踏み鳴らして、

「君は何を考へてゐるのです？ 私はあの女と結婚しようと思つてゐるのですよ——あの女は洗禮を受けてゐます——今でも私は結婚する氣です。私は始終左様思つてゐたのです。向ふの方が私より年が上なんですけれども。」

忽ち私は窓際に兩肘ついて座つた蒼白い女の幻を見た。蠟燭の火は燃え落ちて、部屋の中は暗かつた。ぞつと顫ひして窓際をよく見たが、無論其處には何もある筈はない。けれども私は恐怖と、苦

悶と、憐憫のまじつた不思議な感覺に襲はれざるを得なかつた。

「アレキサンドル！」と私は興奮して云つた。「頼みますから、お願いしますから、これから直ぐにもラッチの家に行つて下さい、明日まで延ばさないでね！ 君は今日中にスザンナの家に行つた方がいゝです、さう蟲が知らせるやうな氣がして仕様がななんです！」

フストフは肩を揺すつて、

「何を云ふんです本當に！ 最う十一時ですよ、最う皆んな寝てゐますよ。」

「構ふもんですか……お行きなさい、お願いですから行つて下さい！ 何うも蟲が知らせるやうな氣がするんです……何うぞ私の云ふ通りにして下さい！ 直ぐ行つて下さい、轎に乗つて……」

「そんな事が出来るもんですか！」とフストフは冷やかに答へた。「今頃何うして行けます？ 明日の朝行けば萬事がはつきり解るのです。」

「だつてアレキサンドル、あの人は、死ぬると云つてゐましたよ、最う逢ふまいと云つてゐましたよ……それに君が逢へたら！ まあ考へてごらん……さい、私に逢ひに来るまでの、決心をした其の心を……何んなにそれが辛らかつたか……」

「あの女は少し大袈裟な方ですからね、」とすつかり落着いたフストフが云つた。「大抵の女が始めはあ

「たんですよ。また云ひますが明日になれば萬事綺麗に片づきますよ。最う失敬ませう。私は疲れ
てゐるしあなたも眠いでせうから。」

彼は帽子を取つて部屋を出かけた。

「然し直ぐ私方に来て萬事お話しして下さいを約束してくれますか？」と私が後ろから訊ねた。
「約束します……左様なら！」

私は寢床にもぐり込んだものゝ、心の中は氣懸りでならず、頻りに友を齒痒く思つた。私は遅く眠
入つてスザンナと地の底の濕つぽい道をさ迷つてゐるやうな夢を見た。細い急な階段を上らうとあせ
るのだがあせれば、あせるほど次第に深く落ちて行つた。其の間にて誰か頻りに單調を悲しさうな
聲で私たちを叫んでゐた。

二十一

誰か私の肩に手をかけて五六度揺すつた……眼を開けてみれば一本の蠟燭のはの暗い光に照らされ
て眼の前にフストフが佇んでゐる。力なく佇んで彼の顔は殆ど髪と同じやうな黄色になり、唇は垂れ、
ぼんやりした眼で無感覺に向ふを見詰めてゐた。あの何時も變りのない愛嬌のいゝ、同情に富んだ表

情は何處に行つたのだらう？

私の従兄弟に癲癩から白痴になつた男がゐた……此の時のフストフは

丁度その男に似てゐた。

私は直ぐ跳ね起きた。

「何うしたんです？ 一體何うしたんです？」

彼は返事をしない。

「何んな事になつたのです？ フストフ！ 閉かして下さい！ スザンナは……！」

フストフはぎよつとして、

「あの女は……」とかすれた聲で云ひかけたが言葉は途切れた。

「あの女は何うしたんです？ 逢ひましたか？」

彼は私を見入つた。

「あの女は最うゐなくなりました。」

「最うゐなくなりました？」

「えゝ、死んだのです。」

私は寢床から飛び出した。

「死んだ？ スザンナが？ 死んだ！」

フストフはまた眼を素向けた。

「え、死にました、夜中に死にました。」

私は心で「この人は讒語を云つてゐるのだ」と思った。

「夜中に！ ちや今何時ですか？」

「今は朝の八時です。あの家から私方に知らせが来ました。明日埋めるさうです。」

私は彼の手を握り締めた。

「アレキサンドル、夢を見てゐるんぢやないのですか？ 正氣なんですか？」

「正氣です、知らせがあると直ぐ此處まで来たところなんです。」

私は取り返しをつかぬ不幸に逢つた時、何時も感ずる胸が麻痺するやうな苦しさを覺えた。

「おや〜！ 死んだ！ 何うしてそんなに早く？ 多分自分で死んだのでせう？」

「そんな事は何も知りません。たゞ夜中に死んだ事と明日埋めることだけ聞いたのです。」

私は思った、「夜中に、ちや昨夜あの女が窓際にゐるやうに思つた時には、急いで逢ひに行つてくれと頼んだ時にはあの女はまだ生きてゐたのだ……」

「君がイワン・デミアニッチの家に行けと云つてくれた時はまだ生きてゐたのです。」とフストフは私の腹の中を察して云つた。

私はまた思つた、「この人はちつとあの女を知らなかつたのだ！ 私たちは二人ともあの女を知らなかつたのだ！『大袈裟』だと云つた、『大抵の女があゝだ』と云つた……丁度この人がそんな事を云つてゐる時に恐らくあの女は『愛してゐながら斯んな大きな間違ひをすることがあるものだらうか？』と云つてゐただらう。」

フストフは私の寢床の前に両手を垂れて、罪人の様に悄然と佇んでゐた。

二十二

私は急いで着物を着て、

「これから君は何うするつもりです、アレキサンドル？」と訊ねた。

彼は私の質問の、不合理なのに驚いたやうにまじ〜私を見入つた。また實際何うする事が出来よう？

「然し行つてみることは行つてみなくちやなりませんよ、と私が云つた、「罪悪は隠れてゐるかも知れ

「ませんから、出来事を一度確かめて見る必要はありますよ。あんな人たちは何をするか知れたものぢやありませんからね、……充分検査してみなくちゃなりません。手記に書いてあつたぢやありませんか、あの女が結婚すると扶助料が止みますが、死んだ場合にはそれがラッチの手に移るのです。どちらにしても兎に角あの女に最後の義務を果たし、あの女の遺物に手向けをする必要はありますよ！」

私はフストフに向つて教師のやうに、兄のやうに口を利いた。この恐怖、この悲哀、この困惑の中に在つて、私は無意識ではあるがフストフに對して或る一種の優越を感じた無茶苦茶になつた過失の意識に取亂してゐる彼を見た爲か、それとも人間の上に降りかゝる不幸と云ふものが其の人をみじめにし、恥かしめ、他人から見下されるやうにして、「其處から起き上るだけの知慧がないならお前は駄目だ！」と感じさせる爲か、兎に角フストフは私の眼に子供の如く見える様になり、私は彼を不憫に思ひ、手酷く出る必要を感じた。私は助ける様に手を差し伸べて彼のの上にのしかゝつた。こんな場合見下げる氣の混らないのは女の同情だけである。

けれどもフストフは相變らず荒々しい間の抜けた眼差で私を見入つてゐた——私の權威を含めた聲の調子も何の利き目もなかつたのだ。そして私の「あの家に行くでせうね」と云ふ第二の質問に對して彼は、

「いえ、行きません」と答へた。

「何うして君はそんな事を云ふんです？ 君自身で出かけて事情をよく調べてみる氣にはならぬものですか？ 手紙が残してあるかも知れませんが……記録か何か……」

フストフは頭を振つて、

「私は行きません、だから君の家に来たのです、君に行つて貰はうと思つて……私の代りに……私は行きません……行きません」

フストフは唐突に卓子の前に腰かけて両手に頭を埋めて歎歎とした。

「あゝ！ あゝ！ あゝ！ 可哀さうな女だ！ 可哀さうな女だ！……私は愛して……愛してゐたのに……あゝ！」と彼は涙ながらに口惜しがつた。

私は彼の傍に立つた。けれども白狀するが私はこの疑ふ餘地もない誠實な歎歎に對して少しの同情も起らなかつた。私はたゞフストフが斯んなに泣くのを不思議がるより他なかつた。そして今こそ彼が如何に小さい人間であるかを知つたやうな氣がした。そして自分だつてこんな振舞ひはしないだらうと思つた。では何うすればいいか？ 若しフストフが心を動かさずに落着き拂つてゐたとすれば、私は彼を憎み、彼を嫌がりはしても、彼を尊敬しなくなりはしなかつたらう……彼は彼の威嚴を保

つた。らう。ドン・ファンは飽くまでドン・ファンとして通つたであらう！ 人が友人の過失や弱點を見た時、自分自身の徳と力を弱かに喜ぶやうなことをしないで、自分の心を貧しくして、罪の必然にして殆ど避くべからざることを思ひながら其の人に同情したり、其の人を救つたりするのは、人が餘程年を取つていろ／＼な經驗をした後でなければ出来るものではない。

二十三

私はフストフをラッチの家に遣らうとする時には頗る大膽で思ひ切つたところがあつたが、さて十二時になつて自分が出かけてみて、(フストフも一緒に連れて行かうとしたのだが彼は歸つて詳しい話を聞かしてくれと云つたのみで何うしても連れて來なかつた) 街の角を廻つて向ふに家の窓から棺に供へた蠟燭の火が朦朧と黄色に光つてゐるのを見た時には、云はれぬ恐怖に襲はれて思はず息をこらして後退りをしようとした……けれども氣を取直して廊下に這入つた。香と蠟の匂ひが鼻を打つた。片隅には壁に立てかけた銀のレースで縁を取つた棺の覆布が見えた。隣の食堂では坊主の單調な讀經が蜂の唸り聲のやうに聞えてゐた。客室から睡むさうな顔をした女中がのこ／＼出て來て「死んだ人に禮拜しようと思つてゐらしたの？」と訊ねて食堂の扉を指差した。私は内に這入つた棺は扉を頭

にて横たはつてゐたので何よりも先づ白い花輪と一緒にレースの棺に載つてゐるスザンナの黒い髪が眼についた。私は傍によつて十字を切り、跪いて禮拜して彼女を見た……あゝ！ 何と云ふ苦しきやうな顔だらう！ 不幸な女！ 死さへこの女を憐むのを拒んだのだ。死さへ——美は少ないにせよ——死人の顔によく見られるあの優しい印象深い平和を與へるのを拒んだのだ。スザンナの小さい、暗い、殆ど青色をした顔は古い古い聖畫の肖像を思ひ出させた。そしてその顔の表情！ まるで今にも絶望の叫び聲を上げやうとして——而も何の昔もなく死んだものゝやうだ。……眉と眉の間の線も消してなければ、手の指も握り締めたまゝである。私は思はず顔を素向けたが、暫くしてまた氣を取り直して、長い間眼を据えて彼女を見た。私の心は憐憫の情に満たされた。憐憫の情ばかりではない、私は心に叫んだ、「この女が暴力で死んだのは疑ひのないことだ」と。私が傍に立つて死んだ女をしげ／＼眺めてゐると、先つき私が這入つた時に聲を高くして纏りのないことをいれ／＼に言つた僧侶は、また睡むさうな聲になつて欠伸を二度ばかりした。私はまた跪いて禮拜をして、それから廊下に出た。客室の入口には灰色の寛衣を着たラッチが私を待受けてゐた。彼は私に手を振つて見せて彼の居間と云ふよりは寧ろ彼の巢に連れて行つた。暗くてむさくるしくて、腐つた煙草の酸っぱいやうな匂ひの籠つたその部屋は何うしても狼か狐の巢を思はせるのであつた。

「破裂なんですよ！ 心臓の外の皮……外の皮……御存知でせう……包みが破裂したんです！」とラッチは扉を締めるとすぐ云つた。「ほんとに不幸なことだ！ たつ……昨日までは何の變も無かつたのです。それが急に、ちよつとの間に斯んなことになつてしまつたんです！……*heart, magnificent*とはよく云つたものですね。ですから私も左様思つてゐました。カムボフの聯隊の軍醫の、ウイケンタイー？ カシミロウイツチ・ガリンボフスキー……あなたもあの人は御存知でせう……一流の専門の醫者ですが——」

「そんな名を聞いたのは初めてです」と私が口を入れた。

「まあ兎に角、その人が何時も、」とラッチは始めは低い聲だつたが次第に聲を高くして終ひは不思議にも獨逸風の調子さへ混へて話を續けた。「その人が何時も云つてゐました「おい、イワン・デミアヌッチー！ 用心しないとお前の養女は心臓肥大病だよ！ ちよつとの油断で大變なことになるよ！ 何よりも感情をたかぶらせるのが悪いのだ……よく道理を論じてやり給へ」と云つてゐました……だつて實際若い女に……道理なんか論せるものですかねえ？ ハツハツ……」

ラッチは何時もの習慣で大笑ひしかけたか、ふと氣がついて笑ひを咳きに紛らしてしまつた。

そしてこれがラッチの云つたことであつた！ ラッチが云つた總てであつた……けれども私は醫者を叫んだが何か訊ねてみるのが自分の義務のやうな氣がした。

ラッチは實際空中を飛び上つた。

「呼びましたとも……二人呼びましたかね、最う濟んだ後ですよ——*be enacht!* そしてまあ考へてごらんをさい、二人とも申し合はせるやうに（ラッチは申し合はしたやうにと云ふつもりだつたのだらう）破裂だ！ 心臓の破裂だ！ と同じことを云つたのです。醫者は死體を解剖したいと云ひました……あなたにもお解りでせうが私はそんなことは断つてしまひました。」

「え、明日です、明日あの子を埋めることにしました！ 家を出るのが、きつちり朝の十一時……それから「鶏の足」の聖ニコラスのお寺に参ります……あなたのお國の露西亞では寺に妙な名前をつけるものですね！ それから最後の安息の場處たる母の土地に埋めます。あなたも來て下さい！ あなたは古いお馴染ぢやありませんが、打明けて云ひますが、あなたの性質の優しいことや、感情の高潔なことは……」

私は急いで頷いて見せた。

「本當です。」とラッチは潮息をつけた。「實際晴れた空から雷が落ちたやうなものです!」
 aus 'ei' erem Himmel!」

「でスザンナ・イワノフナは死なれる前に何も仰つしやりませんでしたか、何も遺したものはありませんでしたか?」

「何もありません! 紙の端切れ一つありません! 考へて御覽なさい、皆さんが私を起こしに來た時には早や固くなつてゐたのですからね? 何しろ、がっかりしましたよ。皆さん悲しがりました!アレキサンドルと、ダウデウイッチも聞いたなら嘸お嘆きになるでせう……何でも莫斯科にはゐらつしやらないそうですね。」

「あの人は二三日前に田舎に行きました……」と私が云ひかけると、

「ウイクトル・イワニッチが襦の用意に暇が掛ると云つて怒つてゐらつしやいますよ、」と女中が這入つて遮つた——先つき廊下で逢つた女中だ。この女は相變らず睡むさうな顔はしてゐたが、今度は無遠慮な傲慢な頼附をしてゐるのに驚いた。この顔付は主人が自分の勢力の中にあつて、難かしい小言は云はないと知つてゐる時によく見せる頼附である。

「直ぐだ、直ぐだ、」とイワン・デミアニッチが神經質らしい聲で答へた。「エレオノーラ・カルボウナ! レオノーラ! レンヘン! ちよつとおいで!」

扉の外で何か重いものゝ動く響がしたかと思ふとウイクトルの威丈高な聲が聞こえた。「何うして皆んな馬を付けてくれないのです? 警察まで歩いちゃいけませんよ!」

「直ぐだよ、直ぐだよ、」とイワン・デミアニッチがまた答へた。「エレオノーラ・カルボウナ、ちよつとおいで!」

「だつてイワン・デミアニッチ、Ich habe keine Toilette gemacht!」
 「Macl't nichts Komm herein!」

エレオノーラ・カルボウナが頭根に巻きかけた頭巾を、本の指でつまんだまゝ出て來た。彼女は銅もはめず朝の巻衣を引つけて、髪もまた手を入れてゐない。イワン・デミアニッチは、彼女の方に進み出た。

「ウイクトルが馬を呼んでゐるぢやないか、」と云ひながら氣忙しさうに始めは扉、次に窓の方を指差した。「早く出来るやうにしてやつておくれ!」
 Der kerl schreibt so!」
 Venianitch, Sie wissen wohl, それに妾も奴者に云ひ附けといたんですが、奴者はそれを馬に燕麥を食はせることだと早合點しました

んです。まあ思ひ懸けないことになりましたね。」と今度は私の方に向いて、「スザンナ・イワノフナが斯んなことにならうとは誰だつて思つたこともありませんでしたわ。」

「私は前から斯うなるだらうと思つてゐた、前から！」かう云ひながらラッチは腕を振り上げた。寛衣が前にはぐれて、帯革の締金と共に嫌な羚羊の皮の股引が見へた、「心臓の破裂なんだ！ 外皮の破裂！ 肥大症なんだ！」

「ほんとうに左様ですわ、肥……肥大……でしたはね。けれども何度も云ひますがたゞ妾は悲しくつて……」かう云ひながら彼女は粗末な顔の形を少し變へて、眉毛を三角形に釣り上げて人形の頬のやうに光る圓々とした頬に小さい涙を一滴流した。「これからいろ／＼の楽しみのあるあんな若い女が……こんなに急に無くなつたのかと思ふと妾は悲しくつてなりません！」

「Nai gut, gut……geh, ah!」とラッチは遮つた。

「Geh' s h. n. gut' sah n.」と低い聲でエレオノーラ・カルボウナが呟いた。そして頭巾を指に支へて涙を流しながら出て行つた。

私も彼女の後に従つて部屋を出た。廊下にはフラッシュユカを小意氣に横丁に冠つた海狸の毛革の襟のついた學生服を着たウイクトルが立つてゐた。彼は肩越しにちよつと私を見たなり、襟を揺すり上げ

て私にうなづきもしなかつたが、それは私にも丁度有難かつた。

私はフストフの家に足を向けた。

二十五

私が這入ると彼は自分の部屋の片隅に座つて俯向いて腕組みをしてゐた。彼は殆ど神経が麻痺して深い眠りから今覺めたばかりの人のやうに靜かな怪訝げな目差で周圍を見廻してゐた。私はラッチの家を訪ねた時のことを何もかも語つて聞かせた。あの老兵や妻君の言葉や、彼等から受けた印象やすつかり話した。そしてあの不幸な女は自殺したに違ひないと云つて聞かせた……顔の表情を少しも變へないで耳を傾けてゐたフストフは相變らず當惑したやうな眼付で周圍を見廻した。

「あの女を見たのですか？」と暫くして彼が訊ねた。

「見ました。」

「棺の中に這入つてゐたのを？」

「フストフはまだスザンナが本當に死んだのか何うか疑つてゐるらしかつた。」

「え、棺の中に這つてゐたのを。」

フストフはちよつと顔を引き釣らせ、それから眼を伏せて手をこすつた。

「寒いのですか？」と私が訊ねると、

「ええ、寒いんです。」とためらいながら答へて彼は間の抜けた頭の振り方をした。

私はスザンナは自分で毒を仰いだのか、でなければ毒を飲まされたのか、何方かに違ひないと思ふ理由を説明して、このまゝに棄て、置くべきものではないと云つて聞かせた……

フストフは私を見詰めた。

「だつて、それぢや何うするんです？」と云つて彼は靜かに眼を大きく見開いてまた靜かに閉じた。

「若しそんな事が解つたら……難かしくなるだけです。あの女を埋めはしませんよ。だから私たちは抛つて置くのです。」

簡單なことだがこの考へは私の頭に浮ばなかつた。私の友の實際的の考へはまだ彼を見捨てなかつたのだ。

「葬式は……何時です？」と彼は言葉を續けた。

「明日です。」

「君行きますか？」

「はあ。」

「家に、それとも直ぐに寺に？」

「家にも寺にも、それから墓地にも行きます。」

「だが私は行かない——私は行かない、私は行かない！」かう呟きながらフストフは泣き出した。今朝泣き出したのも矢張りこれと同じことを云つた時であつた。私は泣く時にはよく斯んなことがあるものだと思つてゐる。丁度人間にはある特別の言葉、その言葉には別に大した意味はないのだが、他の言葉でなく、其の言葉に限つて、その人の涙の泉を開き、その人を悲しませ、その人に自分や、他人を憐れむ、感情を起こさせることを許されてゐるやうに思はれる。私は曾てある自忘性の老婆が私の前で自分の娘の死んだ話をしてゐるのを聞いたことがあるが、その老婆は、「私は娘を『フォークラ』と呼びました、さうしますとね、娘が云ひました、『お母さん、鹽は何處に置いてあるの……鹽……鹽？』」こゝまで來ると、老婆は最う氣を失なつてしまつて話を續けることが出来なかつたのだ。「塩」と云ふ言葉に壓倒されてしまつたのだ。

けれども私は今度も今朝の時と同じやうにフストフの涙にあまり心を動かされなかつた。私はスザンナが彼に何か残しはしなかつたか、それを私に訊ねない彼の心が何うしても腑に落ちなかつた。彼

等二人が相互に對する愛は私にとつて全々迷であつた。そして今でも迷として残つてゐる。十分ばかり泣いた後でフストフは起上つた長椅子の上に横になり、顔を壁の方に素向けて身動きもしなくなつた。私は暫く待つてゐたが身動もせず、物を訊ねても答へもしなかつたからもうく歸ることにした。これは恐らく私が悪かつたであらう。けれども私には彼が眠てゐるとしか思はれなかつたのだ。これが何も彼が悲しみを感しなかつたといふ證據になりはしないのだが……たゞ彼の性格が苦しい情緒を餘り長く支へることが出来ないやうに出来てゐるだけなのだ。……彼の性格は何處までも調和が取れてゐるのだ。

二十六

翌日の丁度十一時に私はラッチの家に行つた。低く垂れた空からは、小さい雲が降つて薄い霜を結び、早や雪溶けの期節も近いと云ふに中空には身を切るやうな不愉快な風が飛んでゐる……全く四角祭頃の風を引きさうな天氣だ。私は家の人口に立つてゐるラッチを見た。黒のフロックコートに喪章を附け、頭には帽子も冠らないで忙しさに兩腕を上げたり、自分の腿を叩いたり、家の方に向いて喚いたり、早や二臺の貸馬車と共に立つて白い籠のある葬儀車の方に向いた喚いたりしてゐる。其の

傍には喪の肩掛の古い服に喪の帽子を目深に冠つた四人の儀仗兵が、目を細くして悲しさに、火の黙いてゐない炬火の長い柄で雪を拂つてゐる。ラッチは赤い顔をして灰色の頭髪をピンと立て、厚かましい調子外れの、龜裂破れた聲で奴鳴つてゐた。「松の枝は何處だ？ 松の枝！ 此方だ！ 松の枝！」と奴鳴つたり、「直ぐ棺が出るよ！ 松！ この松を渡すのだ！ しつかりしろ！」と叱つたりして、家の中に駆け込んだ。私は時間通りに來たのだが少し遅れてゐた、多分ラッチが萬事を早めに急いだのだらう。家の中の式は早や済んでゐた。一人は僧帽を冠り、一人は若くて綺麗に油が髪を分けた二人の僧が供の者を連れて階段に姿を現した。間もなく馭者と二人の門番と一人の水運びとに支へられて棺が運び出された。その後からラッチが棺の蓋に指を當て、「静かに！」と云ひながら連いて出た。彼の後ろからこれもまた喪章をつけて黒装束でエレオノイラ・カールボウナが、家族の者と一續に小刻みに歩いて出た。一番後から新しい制服で、劍の把に喪章をつけたウイクトルが現れた。棺を擔ぐ人たちは何やらぶつ／＼言つたり罵り合つたりしながら柩車に棺載せた。儀仗兵が炬火に火をつける、ぶす／＼音がして煙が出た。何處からともなく、一行に紛れ込んだ一人の老婆は聲を上げて泣きだした。僧侶たちが歌ひ、すと雪が一層烈しくなつて「白い蠅」のやうに渦を卷いた。さあ、出發しませう！」と云ふラッチの聲と共に一行は動き出した。柩車の傍にはラッチの家族の他に五人

ゐた。色の褪めたスタニスラス勲章の綬を——多分借りたのだらう——、頸にかけた見事ばらしい退職の道路官吏と、優しい顔に欲深かさうな眼つきをした小男の警部補と、綾織の襦衣を着た小さい老人と、ぶん／＼魚の匂ひのする青いジャケツを着た、馬鹿に肥えた肴屋と、それから私、この主人であつた。女性の會葬者のゐないことは(エレオノラ・カルボウナの二人の伯母の賜語屋の姉妹と、青い鼻に青い眼鏡をかけた駝背の老嬢などは、誰でも女性に敵へようとはしない)若い女の友達や知合ひのゐないことはちよつと私を驚かせたけれども、よく考へてみて、スザンナの様な性格と教育と思ひ出を持つた者にとりて今彼女が屬してゐる階級の人に友達を作るのは難かしいことだと気がついた。寺には澤山の人が集つてゐたが顔附きを見ても解るやうに知合ひよりも見物人の方が多かつた。式は長くかゝらなかつた。私が驚いたのはラッチがまるで正教徒のやうに頷る眞面目に十字を切り、その上文句でなく聲ばかりではあつたが役僧の讀誦に調子を合してゐたことである。愈々死者に別れを告げる時が来ると私は接吻はしなかつたが低く頭を下げた。ところがラッチは至極落着きはらつてこの怖ろしい仕事を遣つてのけ、それから慇懃にスタニスラスの綬をつけた官吏をまるで響應でもするやうに棺の傍に招いた。そして、順々に下を抱へて死者を覗かしてやつた。エレオノラ・カルボウナはスザンナに別れを告げて行くも不意に寺中に響くやうな大きな聲を上げて、わつと泣き出した、けれども

間もなく宥められて今度は頻りに、「だが妾の手提袋は何うしたかしら？」と小聲で啼いてゐた。ウイクトルは一人睡れてゐた。そして如何にも斯んな習慣には同情しないが、唯社會上の義務として此處まで来たのだと云はぬばかりの態度を見せてゐた。一番深い同情を示したのは、十五年前にタムボフ縣で土地測量をしてゐたが、それ以來ラッチに會はないでゐた襦衣を着た小さい老人であつた。この男はスザンナをちよつとも知らないのだが、出る前に戸棚の前で、酒を二杯ばかり呷つて来たのだ。私の伯母と寺に来てゐた。伯母は何處から聞いたのか死んだ女と先日家に来た女と同じ人だことを知つて非常に心配してゐた。彼女は私が不始末な事をすると思ふ氣にもなれないのだが、それかと云つて斯んな不思議な事情のつながりを感じることも出来ないのだ……多分スザンナが私に戀をして、其の爲めに自殺したの位に思つたのかも知れない。黒い喪服をつけて痛ましげに涙を流しつゝ跪いて無くなつた人の魂の平安を祈り、「悲哀の慰め」と云ふ繪の前に一留の蠟燭を一本立てた。……「アミーシユカ」も伯母と一緒に来て祈禱をしたが頻りに私の方を眺めて驚いたやうな顔をしてゐた……この未婚の老婆も、おや／＼私を何とか思つて見てゐるのだ。寺を出る時に、伯母は十留以上の持つてゐた金を皆んな貧乏人に分けて遣つた。

とう／＼告げが済んだ。聽て彼等は棺の蓋をしはじめた。式の間私は何うしても女の引き釣つた顔

を正視するに耐えなかつたが、ちらとそれに眼が走る毎に——「あの人は来て下さらなかつた、あの人は来て下さらなかつた」と云ひ度げな顔をしてゐるやうに思はれた。皆んなが眼の蓋を卸しはじめた。私は自分を制しきれなくなつてまた死んだ女にちらと素早く眼を呉れた。「あなたは何うして斯んな事をなさつたのです？」と私は無意識に訊ねてゐた。……「あの人は来て下さらなかつた！」とまた最後に聞くやうな氣がした。……聽て槌が釘を打ち出だした、最う何もかもおしまひだ。

二十七

私たちは柩車に従つて墓地に行つた。一行は五十人ばかりであつたが、いろいろの状態の下に集まつたいろいろの種類の人で、實は怠けた群衆に過ぎなかつた。懶い歩行は一時間以上も續いたらう。天氣はひとしほ悪くなつて來た。ウイクトルは途中で馬車に乗つてしまつたが、ラッチは元氣よく汚れた雪の上を進んだ、彼が會てセミオン・マトウエイッチとあの運命を定める面會をした後で、やがては自分が永遠にその生命を破壊すべき娘を連れて勝ち誇りながら雪の上を家に歸つた時にも、度こな歩き方をしたであらう。「老兵」は髪や眉毛を雪で白くして、始終大きな聲で叫び廻つては、元氣よく息を一杯吸ひ込んで圓い鼻の赤な頬をふくらしてゐた。……人が見たら笑つてゐるとしか思はれなかつた。

つた。「妾が死んだら扶助料はラッチの手に入ることになつてゐます、」スザンナの手記の中のこの言葉がまた私の心に甦つて來た。聽て私たちは墓地に着いて新しく掘つた墓穴の傍に寄り集つた。其處で最後の式が手早く行はれた。皆んな凍えてゐた、皆んな急いでゐた。綱を滑つて棺が口を開けた穴の中に這入ると皆んな其の上に土を掛けだした。ラッチは今度もまた元氣を見せて、片足をしつかり前に踏み出して勇ましさうな姿勢で力を込めて棺の上に土を投げた。……彼の最も苦い敵に對して石を投げる時でもこんな元氣は見せないであらう。ウイクトルは相變らず一人離れて外套にくるまつたまゝ襟の毛革で顔を擦つてゐた。ラッチは子供たちは本氣になつて父の間似をしてゐた。砂や土塊を投げるのは彼等の大好きなことでもあり、またそれは叱られることでもなかつたのである。穴であつた處が山の様に少し高くなりかけた時私たちが解散しかけたら、ラッチが軍隊式に左に向き直つて、ばんと股を一つ叩いて、私たち「紳士諸君」及び「尊敬すべき坊様」を一葬式の饗宴に招待すると云ひ、その會場は墓地から餘り遠くない頗る立派な料理屋の廣間で、「我が名譽ある友人シギスムンド・シギスムンドウイツチの親切な韓族によりて、準備が出来てゐると云ひながら警部補を指した。そしてまた自分即ちイワン・デミアニッチ・ラッチは悲しんでゐて、またルーテル派の信仰を持つてはゐるが純粹の露西亞人として何よりも先づ露西亞風の云ひ方をすると云つた後でかう呼んだ、「私の妻は他の婦

人方と一緒に家に歸つてよろしい。私たち男子は「主の逝ける下僕」の靈魂を記念するために、謹んで食事を共にしようではありませんか！—このラッチの提言は混りけのない同情を以つて迎へられ、「尊敬すべき坊様たちは互に意味ありげに眼を見交し、道路官吏はイワン・デミアニッチの肩を叩いた、彼を愛國者だ、一同の魂だと褒めた。

私たちは揃つて料理屋に行つた。料理屋の一階の長いガランとした廣間の中央には椅子に圍まれて二つの食卓があつて、其の上に酒だの御馳走だのいろ／＼のものが一杯並べてあつた。白い塗料の匂ひは酒やサラダの油の香と混つて息がつまるやうであつた。この饗宴の轉旋者たる警部補は上席に僧侶を座らせ、其の前に四旬祭の皿を見事に並べ、僧侶の次に他の客を座らせ、それから饗宴が始まつた。私は好んでお祭らしい饗宴と云ふ字を用ひる譯ではないのだが、この事實を現す言葉としてはこの他にないのだ。始めのうちは、皆んな至極穩かで寧ろ打沈んだ氣味で、むしろ／＼忙しげに食べたり、杯を飲みほしたり、溜息も度々聞かれたが、これは食べる時の溜息でもあれば、感情の溜息でもあつたらう。死に関する話や、人生の短かいこと、地上の希望の果敢ないことなどの話が出た。道路官吏は軍隊の話だがそれでも面白い逸話を話した。僧帽を冠つた僧も同意するやうな意を仄めかして自分も聖イワン武者の傳記の中の興味ある話を持ち出した。綺麗に髪を分けた僧は食べることに夢中

になりながらも、貞操を褒める話に二口三口に相槌を打つたけれども段々様子が變つて、人々の顔が次第に赤くなり、聲が高くなつた頃には笑ひ聲がひとりで現れて來た。思ひがけない呼び聲や、馴れ／＼しく呼ぶ聲が其處此處で聞こえた。「可愛いお前さん」だの、「生きた可愛い人だの」、「いゝ鶏」だの、甚しきは「豚のやうな」だの、——兎に角露西亞人が謂はゆる「釘をはづして」來た時によく出る總ての馴れ／＼しい呼び方が聞かれた。内國製の三鞭酒がボン／＼抜かれる頃には、食卓が頗る騒がしいものとなり、或る人は實際鶏の鳴き間似をし、或る人は自分が今飲んだばかりの杯を他人に叩へさして飲ました。最う赤いのを通り越して紫になつてゐるラッチは今までは高笑ひをしてゐたが此の時突然立上つて演説をさしてくれと云つた。「何うぞお願ひします、と皆んなが喚いた。襦袢の老人は「ブライヴォー」と叫びながら拍手したくらひだ……彼は早や床の上に座つてゐた。ラッチは頭の邊まで杯をさ／＼けて、それから簡単な、けれども「明瞭な」言葉で此の世を去つた尊い靈魂の性質について一口話し度いと云ひ、其の靈魂は「この地上の穀 (die irdische Hülle) を脱ぎ棄てて天に昇り、そして彼女の親切な家族の者を、皆んな取り返しのつかぬ、悲哀の中に投げ込みました……」と云ひかけてラッチは言葉を訂正して、「跳ねとばしました、……」また訂正して、「投げ込みました……」

「お坊様！ お坊様！」と低い熱心な聲が聞こえた。あなたは馬鹿にいゝ聲を持つてゐらつしやるといふ評判ですよ。一つ歌つて下さいませんか、「我れらは野に住む！」

「しッ！ しッ！……静かに！」と皆んなが制した。

「家族の者を皆んな、」とラツチは音楽を愛する人の方に鋭い眼を呉れながら續けた、「取り返しのかね悲哀の中に投げ込みました！ 左様です！ 露西亞の諺にもありますが、「運命は鞭を遠慮せぬ」とはよくつ云たものです……」

「待つて下さい！ 皆さん！」と食卓の一番端に腰かけてゐた男が腹聲を……して喚いた、「私は財布を取られてしまつた！」

「あゝ、この騙見奴！」と他の聲が叫んだと思ふとポカンと耳の上を撲る音がした。

實にそれからの騒ぎ！ さながら今まで私たちの中に微かに動き呻いてゐた野獸が急に鎖を切つて猛然怖ろしい勢を以つて怒りだしたやうなものだ。恰も總ての人が饗宴の自然の結果として、心竊かに「騒動」を待ちうけてゐたやうに、皆んながそれを歓迎し、それに加はらうとした……皿や杯が八釜しい音を立て轉ぶやら、椅子が引つくり返るやら、聲になるやうな物音がするやら、手が空中に振り上るやら、上着の裾が飛ぶやら、喧嘩は一層烈しくなつて來た。

「遣つけろ！ 遣つけろ！」と今までは私の隣に座つて一番おとなしくしてゐた肴屋が此の時急に狂人のやうに奴鳴りだした。尤もこの男が先程から黙つて頼りに一人酒を呷つてゐたのは事實である。「引つばたいやれ……」

誰を引つばたくのか、何故引つばたくのか、そんな事は彼も考へちやゐない。唯猛烈に奴鳴つてみただけなのだ。

警部補や、道路官吏や、自分の雄辯がこんなに早く終らうとは思はなかつたラツチが一同を鎮めようとした……然も其の努力は無駄であつた。私の隣の肴屋は今度はラツチに喰つてかゝつた。

「彼奴はあの若い女を殺したんだ。嫌やな獨逸人だ、」と拳を振り廻しつゝ肴屋が彼に向いて叫んだ、「巡查を買収してゐながら、此處で大きなことを云つてゐやがる！」

丁度この時給仕が駈けつけた……それから何うなつたか私は知らない。私は大急ぎで帽子を取りたくなつて一生懸命に走つて歸つた！ たゞ覚えてゐるのは怖ろしい物音、それから襯衣の老人の頭髮の上に載つてゐる鱈の食ひかす、部屋の内を飛んだ坊主の帽子、隅の方に小さくなつたウイクトルの蒼ざめた顔、遅ましい手に握られた赤い髯……これが私が持つて歸つた最後の印象である、憐れなるスヂンナの爲にシギスムンド・シギスムンドウイッチが斡旋した一記念の饗宴から持つて歸つた最後

の印象である。

暫く休んだ後、私はフストフを訪ねて其の日見たことをまるで話した。彼は身動きもせず頭を垂れたまゝ、兩手を足の下に入れて聞いてみたが、また「あゝ！ 可哀さうな女だ、可哀さうな女だ！」と呟いて、また長椅子に横になつて私の方に背を向けた。

一週間の後には彼はすっかり氣を取り直して以前の様な生活を續けてゐた。私がスザンナの手記を記念にするから呉れと云つたら彼は何の苦情も云はずに直ぐにそれを私に呉れた。

二十八

それから幾年かたつた。私の伯母は死んだ。私は莫斯科を立つてペテルブルグに移つた。フストフもペテルブルグに來た。彼は大蔵省に這入つたが、二人は滅多に逢ひもしなければ彼の様子を知ることとも出来なかつた。彼はたゞ普通の世間並の官吏に過ぎなかつた！ 若し彼は今でも生きてゐて結婚しないとすれば、恐らくは彼は今も相變らず彫刻もすれば大工もし、啞鈴も振ひ、相變らず女殺しで、女の友達のアルバムに青い服のナポレオンなど描いて遣つてゐることであらう。私は用事が出來たので莫斯科に行つたことがある。莫斯科で昔の知合ひのラッチの運が悪い方に傾いたと聞いて少なから

ず驚いた。彼の妻は双生兒を生んで露西亞流にプリアチエスラフとウイアチエスラフと云ふ名を付けさせたさうだが、火事で家が焼けてしまつた上に彼は役を止めさせられ、なほ悪いことには長男のウイクトルが始終金貸に責められてゐるさうな。莫斯科に逗留してゐる時には友人同志集まつた席で私は偶然スザンナを輕蔑した侮辱的な惡口を耳にした！ 私は運命が亡却の慈悲をさへ拒んだこの不幸な女の記憶を保護するために出來るだけ辯護を試みたが、私の議論は一同に深い印象を與へなかつた。たゞ其の中の一人の若い學生は私の言葉に少々感動してゐた。彼は其の翌日私に詩を寄越して來た。其の詩は忘れてしまつたが、次の四行で結んであつた。

「墓は荒れて冷たく殘れども、

死さへ優しい靈の思ひ出を、

つらい世のそしりから救ひ得ず、

花は洞む寂しき墓の上。」

私はこの數行を読んで知らず／＼冥想に沈んだ。忽ちスザンナの顔が私の目の前に現はれた。私は

自分の部屋の凍つた窓をふたゝび見た。あの物凄く雪と暴風の吹き捲くる夜と、あの言葉と、あの離
 散を思ひ出した……私には何う考へてみてもスザンナのフストフに對する愛が腑に落ちなかつた、彼
 に見棄てられたと知るや否や何故あんなに早く、あんなに急に絶望してしまつたのか何うしても飲み
 込めなかつた。何故彼女は最う暫く待つて彼に手紙を出して辛い眞實を直接愛する人の唇から聞かう
 とはしなかつたのだらう？ 何故突差に身を踊らして深淵に飛び込んでしまつたのだらう？ 或は彼
 女が熱烈にフストフを愛してゐたから、自分に對する彼の奉仕と尊敬に少しでも疑問のあることが許
 せなかつたのかも知れない。或はまた彼女は決してフストフを熱烈に愛してゐたのではなく、たゞ彼
 に自分の最後の望をつないでゐただけで、それは自分もよく知つてゐたのだが、其の彼でさへ自分の
 悪口を聞くと直ぐ自分を輕蔑して見棄てたのかと思へばそれが堪えられなかつたのかも知れない。彼
 女を殺したのは果して何物であるか、傷つけられた自負心か、頼りなき境遇のみじめさか、それとも
 彼女がまだ早い日の朝に自分も喜んで心を捧げ、彼も深く信じ尊敬してゐた、あの最初の氣高い眞實
 な心を持つた人の記憶か、それを誰が云ひ得よう？ 私が彼女の唇が、「あの人は來て下さらなかつ
 た！」と呟いてゐると思つてゐた時に、彼女の靈はミハイルの傍に行つて喜んでゐたかも知れないと
 云ふことを誰が知つてゐよう？ 人生の秘密は偉大である。偉大な秘密の中でもことに戀は最も

かゞひ知るを得ないものである。——それは兎に角私は今でもあのスザンナの面影を憶ひ浮べると、
 何時でも彼女が可哀さうで堪まらなくなり、運命を恨みながら私の唇はひとりでに呟く、「不幸な女！
 不幸な女！」

——(終り)——

曠野のリア

妹尾詔夫 譯

或る冬の晩に私たち三人の者は古い大學時代の友の家が集まつた。話はシエクスピーアに移つて、彼が描いた型や、それがまた如何に深刻に、如何に眞實に、人間の心から直接に取られてゐるかと思ふ事などを話した。そして描いた人生が眞に迫つてゐる點を殊に賞揚した。私たちはハムレットや、オセロや、フォルスタッフや、それからリチャード三世やマクベスのことまで話した——最後の二人は原形を比較する爲だけであつたが——話が發展するまゝに。

「で私は、諸君、中年は充分に過ぎたこの家の主人が云つた、「リア王を知つてゐたよ！」

「何うして？」私たちが訊ねた。

「何うだ、其の人の話を始めようか？」

「どうぞ。」

斯うして私たちの友は早速その物語を始めました。

「私が十五になるまでの小年時代は、と彼は話しました、」又縣の田舎の豊かな私の母の所有地で過した。随分昔のことなのだが、今でもはつきり覚えてゐるのは私の家に一番近かつたマルチン・ペトロ・ウイッチ・ハルロフの姿だ。まあ君すばらしい大きな男だと思ひたまへ。其の偉大な圖體の上に、やゝ斜に頸は少しも見えないで大きい顔が置つてゐるのだ。乾草塚の様な縫れた黄色が、つた灰色の髪がふさふさ、と大きい眉の邊まで隠してゐる。皮を剥がれでもしたやうな紫色の廣い顔の中央に握拳の様な頑丈な鼻があつて、小さい青い眼は高慢げに覗いて、これもまた小さくはあるが曲つて裂けて顔と同じ色をした口がぼかんと開いてゐた。此の口から出る聲はしはがれてはゐるが馬鹿が強くてよく響いたものだ……まあ一寸、でこぼこ路を行く車に載せた澤山の鐵の棒が響く様なものだつた、だからハルロフが話す時は、風の吹く時に谷の向ふから誰かど喚いてゐるやうだつた。ハルロフの顔が何んなに見えたかは、あまりに大きいので一口には云へぬ……誰でも一目その顔を見たゞけでは解るまい。けれども不愉快な顔ではなかつた——或る莊嚴な感じさへ與へるのだが、たゞ不思議に常の顔と違つてゐるのだ。それから彼の手——まるで布團クッションの様な！それから指と手！今でも覚えてゐる

が、私はマルチン・ペトローウイチの廣い背や、磨石の様な肩を一種の畏敬の念を持たずには見詰めることが出来なかつたものだ。けれども一番私を驚かせたのは耳だつた！ その耳は横じ曲げた巻麵麩の様に頬の兩側に支へられてゐた。マルチン・ペトローウイチは——冬も夏も同じ様に——綠色のコサツクの着物を着て、小さいチエルケズの紐を締めて、タールを塗つた長靴を穿いてゐた。私は彼が頸布をしてゐたのを見た事がない。また彼の頸に何うして頸布などが巻けよう？ 彼は牡牛のやうにゆるく深く息をして、音もなく靜に歩いた。室には入ると物をひつくりかへしたり倒したりしはせぬかと何時も用心して、慥深くこつそりと、大抵は斜に歩いてゐるやうに思はれた。實際彼はヘルクレスのやうな力を持つてゐたので其の地方の褒め者だつた。今でも其の邊の人々は此の大男に對する尊敬の念を忘れないでゐるほどだ。彼に就いてはいろいろな噂がある。或る日は森の中で熊に出會つてその熊に勝つたとの、蜜蜂の小屋で泥棒を捕へて、泥棒やその馬や車をまるで籠の向ふに投出したとのといろ／＼な噂をした。ハルロフ自身では少しも自分の力を自慢にしなかつた。彼はよく云つたものだ、「若し私の右手が強いとすればそれは神様のお蔭です。力自慢はしなかつたが、自分の家柄や血統や、自分の常識は自慢にしてゐた。

「私の家は瑞典のハルルスから降つたので、黒いイワン・ワシリエウイチの御代に（大昔の事だ！）

露西亞に來ましたが、瑞典のハルルスはフィンランドの伯爵になり度くなかつた——露西亞の貴族になりたかつた。それで金色の帳簿に記入されたのです。ハルロフの一族はこの人から出たのです！……ですからハルロフの一族の者は誰でも亞麻色の髪をして優しい目をして綺麗な顔をして生れるのです、私たちは雪の子ですからね！」

「併しマルチン・ペトローウイチ」と或時私が反對した、「黒いイワン・ワシリエウイチと云ふ者はおまへさんよ。恐ろしいイワン・イシリエウイチでせう。黒いと云ふのはワシリ・ワシリエウイチに付けられた名前です。」

「次には何んな馬鹿な事を云ふんです！」ハルロフは靜かに答へた、「私が左様だと云へば左様なんです！」

或日私の母が彼の物堅いのを面と向つて褒めると、

「あゝ、ナターリア・ニコラエフナ！」彼は殆ど怒つた様になつて、「何うして私をお褒めになるんです！ 身分のある者はこれが當り前な人です。でないとお卑しい低い生れの者に悪く思はれます！」

私はハルロフ家の者ですからね、私の一家は、——此處で天井の高い處を指さして——「から來たのです。だのに私が不正直！ 何うしてそんな事ができませう？」

また或る時、その地方に来て母の家にゐた高官の人がマルチン・ペトロウイッチを擲擲つてやらうとした。彼は例の如く露西亞に來た瑞典のハルルスを引き出出した……

「ソロモンの王様の時代に？」と其の官吏が口を入れると、

「いえ、ソロモンの王様の時代じゃありません、黒いイワン・ワシリエウイッチの時代です。」

「併し私は考へるね、」お前の一族はそれよりもつと／＼古くて、マストドンや、メガシリウムが住んでゐた洪水以前から續いてゐるかもしれないと。」

斯んな科學的な名前は彼には解らないのだが、擲擲はれてゐるのだと云ふ事には氣が附いた。

「左様かも知れませんが、」と唸る様な大聲で、「私の一家は確に古いです。私の祖先がモスコにゐた時は、閣下の様な大馬鹿がまだ其處に生きてゐたさうですからね。また其んな馬鹿は千年の中に二度と見られなかつたと云ひますからね。」

狂忿した高音を残して、ハルロフは反りかへつて顔を突出して、鼻で笑ひながら姿を消した。二日たつて彼がまた來た。母は彼を叱つた。すると彼は、「奥さん、あの男の藥になりますよ。對士が何者かと云ふ事を知る前に自分が何うかと云ふ事に氣が付かないで立たしてはいけません。あの男はまだ若いから、教へて遣らなくちやなりません。」その高官はハルロフと殆ど同年輩だつたのだが、この巨

人は何時も他の人をまだ成長し切らぬ者と考へてゐたのだ。彼は自分と云ふものを信じ切つて、誰をも絶対に恐れなかつた。「己れに何か仕ることが出来るのか？世の中にそれが出来る人があるのか？」かう云つて彼は出抜けに短かい耳を聳する様な苦笑をするのが常だつた。

二

私の母は知己の選擇には頗る矢蓋しい方だつたが、ハルロコに對しては特別の厚意と信用を見せて、いろ／＼な特權を許してゐた。二十五年前には高い斷崖の際で、馬だけは轉げ落ちたのに車だけは波が支へて母を助けた事があつた。馬具の紐などは切れてしまつたのにマルチン・ペトロウイッチは爪の根から血のにじむ手でしつかりと車輪を支へて放さなかつた。母は彼に嫁を見立てゝやつた。母が見立てたのは十七歳の孤兒で母の家で育つた女だつた。彼は最うその四十を越してゐた。マルチン・ペトロウイッチの妻は弱々しい女だつた——評判によれば彼は自分の手の平に乗せて女を自分の家に連れて歸つたさうだ——そして彼と共に暮したも長い間ではなかつた。けれどもその女は二人の娘を残して。そしてその女の死後は母がいろ／＼マルチン・ペトロウイッチの面倒を見てやつた。彼の長女を學校に入れてやつて、それから後には婿を取つてやつて、それからまた次にはその妹事を心

配してやつた。ハルロフはよく仕事をした。彼は八百エーカー近い地所を持つて、家も建て、そして百姓たちが彼の云ふ事を聞くことは非常なものだつた。ハルロフは體があまり肥満してゐるので何處に行くにも歩くことは減多になかつた。土地は彼を運ばなかつた。彼は大抵低い馬車に乗つて、自分で三十歳になる瘦せた牝馬を御しながら出かけたものだ。その馬はボロジノの戦ひに騎兵聯隊の士官を乗せて出たから肩の處に傷跡が残つてゐた。この馬は何時も四足とも満足なのはなくて、當り前には歩けないで、ぼか／＼馳つたり緩駟したりしてゐた。そして籬のまはりのマグオートやにがよもぎをむしや／＼喰べたが、私は他の馬が斯んな物を喰ふのは見た事がなかつた。私は何時もあんな瘦馬が何うしてあんな恐ろしい重荷を運ぶのだらうとよく不思議に思つたのを覚えてゐる。マルチン・ペトローウイツチが何んなに重かつたかと云ふ事は、最うくど／＼しく繰返さないが、彼の後ろには色の黒い召使のマキシムカが一緒に乗つたものだ。此の召使が顔と體を主人の體にしつかりすりよせて、跣足になつた足を車の前の軸の横木に突張つてゐるさまは、まるで彼の前の大きい體に木の葉か毛蟲が何かの拍子で落か／＼つてゐるやうに見えた。此の召使の子供は一週間に一度マルチン・ペトローウイツチの鬚を剃つた。其の時には此の子供が卓子の上に立つて遣るのだと人々は噂してゐた。主人の頭のまはりを走りまはつて遣るのだと、口の悪い人々は噂した。ハルロフは家に長くじつとしてゐる

のが嫌ひな質だつたから、例の馬車に乗つて、片手に手綱を振つて、片手は器用に肘を上に向けて曲げて膝の上のせゝ小さい帽子を頭の頂邊に冠つてゐる姿をよく人々に見せた。彼は小さい熊のやうな眼で大膽にあたりを見廻しては、道で出會う百姓や、職工や、商人に、雷のやうな聲で話かけた。坊主は見るのも嫌ひで、出會つた時には後からひどく罵つた。或日私に追付いた彼が（私は銃を持つてぶらついてゐた）路傍に臥してゐる鬼に向つて喚いたことがあつたが、私は其の日は一日その大聲で耳が鳴るのを感じた。

三

先にも云つたやうに私の母はマルチン・ペトローウイツチを大變歓迎した。何んなに彼が自分に對して尊敬を拂つてゐるか云ふことを母はよく知つてゐた。「私たちのやうに、あの人は本當の淑女だ、」と彼は何時も母の事を云つてゐた。彼の方では母を恩人と思つてゐるし、母の方では百姓たちが集まつて押寄せても一人で防いで呉れる忠實な巨人だと思つてゐた。無論そんな騒ぎは起りはすまいがそれでも夫のぬない母——早くから後家になつた——の頭ではマルチン・ペトローウイツチのやうな勇者は輕んぶることが出来なかつた。その上彼は眞つすぐな質で何んな人にも媚びず、金を人に借

ることもなければ、酒を飲みもしなかつた。また別に教育を受けもしないのだが馬鹿でも無かつた。母はマルチン・ペトロウイッチを信用してゐたので、何か仕ようと思ふ時には彼に證人になつてくれと頼んだ。すると彼は早速圓い鐵縁の眼鏡を取りに自分の家に馬車を歩せる。これがないと彼は何も書けないのだ。そして眼鏡を鼻の上に懸けると、十五分ばかりもかゝつて、溜息をついたり、唸つたりして一生懸命になつて自分の呼名と父の名と苗字と、それから階級などを、四角な字で尾をつけたり丸くひねつたりして書き終る。書終つて仕舞うと彼は草臥れて、字を書くのは蚤を捕るより難かしいと嘆聲を漏らす。左様、母は彼を尊敬してゐた……けれども彼は食堂より奥へは入れられなかつた。彼の體は強い匂を發つて、土の匂ひや、腐つた森の匂ひや、沼や泥の匂ひがした。「あれは森のお化だ！」と古い私の乳母は云つてゐた。食事の時は何時も隅の方の別の卓子でマルチン・ペトロウイッチだけ座つたが彼は少しも氣を悪くしないで、他の人が自分の傍に座ると心持が悪いのだと云ふ事を知つてゐて、自分でも一人の方が氣樂でいゝと思つてゐた。そして彼はポリフェマス以來誰も食つたことのないと思はれるほど好く食つた。食事の前には大抵はじめから四ポンドばかりの薯の鉢を彼の前を用意して置いた。「でない」と家を殘して妾が喰べられて仕舞つては大變だからぬ、と母が云ふと、「本當です、奥さん、」とマルチン・ペトロウイッチもにや／＼笑ひながら答へたものだ。

私の母は彼が土地に關した話をするのを好んでゐた。併し長い間彼の大きい聲をじつとして聞いてゐることは出来なかつた。「何うしてまあそんな聲を出すのだ！」と母は云つた。「本當に何か飲んで直した方が好いよ！ まるで驢になりそうだ。喇叭のやうな聲をして！」

するとマルチン・ペトロウイッチはお定りの様に斯う答へた。「ナターリア・ニコライエフナー！

奥さん！ この咽喉は私の咎じやありませんぜ。何んな藥を飲んだら直るでせう——教へて貰ひたいですな？ それより私は黙つてゐる方がましです。」

實際マルチン・ペトロウイッチには何んな藥も利きめがないだらうと思ふ。病氣でないのだから。

彼は話が下手だから、話をあまり仕ようとはしなかつた。「焼舌ると私は喘息になる」と怒つたやうに云つた。彼が二三の自慢話を焼舌り出すのは、人が佛蘭西人の事を訊ねた時、人が千八百十二年——彼は軍籍に在つたので勳章を貰ひ、事ある時にはウラジミルの綬のついた其の勳章をさげた——の事に話を向ける時ぐらひのものだつた。けれども彼は何うしても本當の佛蘭西人は露西亞には來なかつたと云ひ、たゞ食ふに困つた奴が掠奪に來たが、其んな奴は森のなかで存分に撲つてやつたと云つた。

四

とは云へ此の自信の強い、ひるむことのない巨人にも鬱陶しく寒き込む時はあつた。何の明白な理由も無いのに急に塞ぎ込んで、一人自分の室に閉籠つて錠をかて鼻で唸り出す——多分唸つてゐるのだらう——蜜蜂の巢をつゝいたやうな聲で。時々召使のマキシムカを呼んで、何かの拍子で彼の家を迷込んだ乏しい一冊だけになつたニウイコフスキーの「暇な労働者」を讀まして聞き入る。時々は唄を歌はせて聞く。そしてふとした機會の不思議な取合せで一字一字拾ひ讀みのできるマキムカは、例の如く切れ切れに方點などはおかまひなしに次の文句朗讀する。「併し人はその我儘によつて動物界に置く此の空しい假説から全々反對の結論を引出す。離れ離れになつた動物は自分を幸福にする事は出来ない！」云々。時には彼は鋭い小さい聲で悲しさうな歌を歌ふがあの歌は「エー……エー……エー……ア……ア……エー……ア……エー……ア……スカー！ オ……オー……オー……ベ……エー……エー……エー……ラー！」こんな聲しか聞分けが出来ない。其の間にマルチン・ペトロウイッチは頭を振つて人生の果取なさ、總ては灰になり、草の様に枯れ、去り——そして二度と歸つて来ない事などを考へる。時には彼は一枚の繪を手にとつて眺める。その繪は燃えてゐる蠟燭の四方から煙をふく

五

らませて吹き消さうとしてゐて、其の下の方には「人生は斯くの如し」と書いてある。彼はこの繪を大變愛して、自分の居間の壁に懸けてゐたが、機嫌の悪くない平常は何時も見えない様に裏を出してふせてゐた。大男のハルロフは死を恐れてゐた！ 併し憂鬱の時にも宗教や祈禱に慰めを求めることは稀であつた、そんな時でも彼は自分の理智に頼つてゐたのだ。彼は別に宗教的の感情は持つてゐなかつた。寺に姿を見せることは少なかつた。自分でも寺にあまり行かないのは本當だ、體が大きいから他の人を寺から押出すから行かないのだと云つてゐた。憂鬱の發作はマルチン・ペトロウイッチが口笛を吹いて唐突に雷の様な聲を張上げて馬車の用意を命じ、「鬼に角己れはそんな小さな事に心配はしないのだ！」と云はんばかりに手を頭の上に力強く振りかざして隣村に出かけると大抵消えてしまふのがならはしだつた。彼も露西亞人だつたのだ。

マルチン・ペトロウイッチのやうな強い男は概して粘液質の人が多いものだが、彼は反對に何方かと云へば短氣な方だつた。私の村に村ともつかず食客ともつかぬピチコフと云ふ男が寄寓してゐたが、彼はこの男に對しては殊に短氣だつた。この男は死んだハルロフの妻の兄弟で、小兒の様に片

見と云ふ紳名を付けられてゐたが、誰に對しても片見だつたに違ひなく、實際召使に到るまで彼の事を片見のチモフエイツチと呼懸けてゐた程だつた。本當の名は自分でも知らぬらしかつた。誰にでも輕蔑される憐れな男で、實際期間にすぎなかつた、片方の口に齒がまるで無いので、小さい皺の寄つた顔は捻れて見えた。彼は何時もちよ／＼して腰を落着ける事はなく、女中部屋に覗いたり、帳場に覗いたり、坊さんの處に覗いたり、監守小屋を覗いたりするのだが、何處に行つても追出されるので肩を揺すつて、小さい眼を細くして、囁を激ぐやうな聲を出して憐れな嫌な笑方をした。若しこの「片見」が金を持つてゐたら仕方のない卑しい、無定見な、憎むべき、慘酷な者になるだらうと、私は何時も考へてゐた。けれども金がないので何も出来ない。酒を飲むのは休日に限られてゐた。晩方には骨牌で母の機嫌を取るの、着物だけは母の云ひつけでしやんと着込んでゐた。「片見」は何うかすると「屹度、直ぐ、直ぐ。」と繰返すので、母が氣を悪くして、「何を直ぐ？」と訊ねると、彼は早速手をすぼめてびく／＼しながら、「あなたの御命令を、奥さん！」と云ふ。扉に聽耳を立てたり、隠で悪口を云つたり、それから何よりも嘲弄したり虐めたりするのがこの男の唯一の慰みで、何かの復讐でもするやうに、左様する権利でもあるやうに人を嘲弄した。マルチン・ペトロウイツチの事を兄弟と呼んで、彼を耐え切れぬほど苦しめた。「何うして己れの姉妹のマルガリータ・チモフエーウナを殺

してくれた？」と彼の前をのたくりまはつてにや／＼笑ひながら詰問した。或日マルチン・ペトロウイツチは誰もまだ一匹の蠅も見事のないと云ふ涼しい玉突臺のある部屋に腰掛けてゐた。彼は曇りも日光も嫌ひなので此處を好んでゐたのだ。彼が壁と玉突臺の間に腰掛けてゐると、その魁大な體の前を「片見」がうろ／＼しながら撃め面をして嘲弄する……マルチン・ペトロウイツチは五月蠅くなつていきなり両手を彼の前に突出した。幸に「片見」は身を引いたかその義兄弟の擴げた手は玉突臺の縁を突いたので、玉突臺は六つの螺旋から離れてしまつた……若し「片見」がこの頑丈な手で突かれたら何んなべと／＼の味噌の様なものになつた事やら！

六

私はヤルチン・ペトロウイツチが何んなに家事を處理してゐるか、また其の家庭は何んなだらうか見たいものだと思つてゐたので、或日彼についてイエスコウオ（彼の領地の名）まで行つてみた。「先づ私の地所をお目にかませう、何うしても庭や家や麥をこなす場所や、それから何もかも見てゐねばなりません。私はいろ／＼な物を持つてゐますよ。」と彼が云つた。二人は出かけた。イエスコウオまでは二哩はなかつたらう。「此處ですよ——私の地所は！」とトルチン・ペトロウイツチが短

い顔を振向けるやうに手で左右を示しながら唐突に奴鳴つた。「是れがみんな私のです……」ハルロフの家はなだらかな岡の頂に立つて、其の麓には二三の見すばらしい百姓家が小さい池に沿つて集つてゐた。池の傍の洗場には一人の老婆が碁盤織の下着を着て漏つたりネンを棒を持つて頼りに叩いてゐる。

「アキシニーア！」傍の燕麥畑から白嘴鴉が吃驚して一度に飛上つたほどの大聲でマルチン・ペドロ・ウイツチが奴鳴つた……「亭主の股引を洗濯してゐるのか？」

百姓女はすぐ振返つて丁寧にお辭儀をした。

「左様で御座います、旦那様、」と其の女の弱々しい聲。

「まああそこを御覽下さい、」マルチン・ペドロ・ウイツチは半分朽ち果てた編垣の傍を進み出ながら説明する。「あれが私の大麻畑であれが百姓たちのですが、どのくらい違ふか比べてみて下さい。是れは私の庭なんですが林檎も柳もみんな私が植えたんです。それまでは此處に木が一本も無かつたんですからね是れを見てあなたも考へて下さい！」

二人は垣で圍はれた中庭に出た。門と丁度友對の側に崩れかゝつた古い池があつて、その屋根は茅葺で、階段は柱で支へられてゐる。その傍に最一つ小さい屋根裏部屋のあるやゝ新しい家があるが、

それもどうやら危なげな家だ。ハルロフは云つた。「此處でも考へてみて下さい。私の親父は何んな小さい田宅に住んでゐたか、そして私が何んな屋敷を建てたかと云ふことを御覽になつて下さい。」この「屋敷」はまるで骨牌の家のやうだつた。恐ろしく見すばらしい犬が五六匹吠立てながら飛出して私たちを迎へた。「羊の犬！」マルチン・ペドロ・ウイツチが云ふ。「純粹のクリミヤ種！ シッ！ 畜生！ 一匹づゝ緋め殺すぞ！」新しい家の階段に長いだぶくの南京上股引を着けたマルチン・ペドロ・ウイツチの長女の婿が姿を現はした。彼は直ぐ馬車に跳上つて舅の腕を取つて抱き起し、その大きな體を前にかがめて突出した太い足までかゝえるやうにした。それから私を馬から下してくれた。

「アンナ！」ハルロフが呼ぶ。「ナターリア・ニコラエフナの坊様がお見えになつたから、何か御愛想をしろ。だがエウラムビアは何うしたのだ？」アンナは長女の名でエウラムビアは次女の名）

「家にゐないので、野に矢車草の花を取りに行つたのです、」とアンナが扉の傍の小窓から顔を覗けて返へた。

「糖菓があるかい？」とハルロフが訊ねると、

「あります。」

「クリームも？」

「えい。」

「よし／＼、じゃそれを卓子にお出し、其の間に己れは若旦那に部屋を御覽に入れるから。此方に、何卒此方に、」と私に云ひながら人差指を動かせる。主人としては形式的に勿體ぶらなければならぬと考へたものか、彼は自分の家では私に左程な親しさを見せない。彼は廊下を案内しながら、「私の住む部屋は此處にあります、」と云つて大きい戸口を斜めに這入つて、「それが私の部屋です。どうかお這入り下さい。」

彼の部屋は漆喰を塗らぬ、殆ど何も無い大きい室で、壁に斜に打つた釘には二本の鞭や、色の赤く褪せた三角の帽子や、單身の銃や、劍や、金屬で飾つた奇妙な馬の頸輪や、それから息を吹きかけられてゐる蠟燭の火の繪などが懸つてゐて、部屋の隅にはいろ／＼な色をした粗毯で覆つた、木製の長椅子があつた。數百の蠅が天井にたかつてはゐるが、部屋は案外涼しかつた。けれどもマルチン・ペトローウィツチに付き廻る例の奇妙な森の匂ひが強く鼻を打つ。

「何うです、好い部屋でせう？」とハルロフが私に訊ねた。

「好い部屋だねえ。」

ハルロフはまた例の親しげな調子にかへつて、「御覽なさい、立派な馬の頸輪でせう！ 猶太人と交

換したんです。まあ見て下さい！」

「立派な頸輪だねえ。」

「それが一番便利なんです。まあ一寸匂ひを嗅いで御覽なさい……何と云ふ革でせう！」その頸輪を嗅いでみれば腐つた油の匂ひに過ぎなかつた。

「さあお掛けなさい、——其の腰掛けの上に。御遠慮はなさらぬが、」と云つてハルロフは長椅子に倒れかゝつて居睡でもするやうに眼を閉じて、駢さへかき始めた。私はその姿を無言のまま見詰めてゐたが、見れば見るほど驚きは強くなつて來た。彼はまるで山の様に思はれた——他に形容の言葉はない、と、急に目を醒して、

「アンナ！」と喚くと彼の廣い腹が海のやうに波打つ、「何をしてゐるんだ？ 早くしろ！ 聞えないのか？」

「仕度はちやんと出來ましたよ、お父様、おいでなさい」と娘の聲が聞える。

私は心の中にマルチン・ペトローウィツチの云付がそんなに早く行はれるのに驚きを感じながら、彼の後に従つて客室に行くと、赤地に白い花を抜いた卓子掛の上に食事の用意がしてあつて、膳菓やクリームや、小麦細麴や、それから砂糖菓子まで並べてあつた。私が膳菓を食べてゐると、マルチン・ペ

トローウイツチは優しく、「お上んなさい、しつかりお上んなさい、田舎の御馳走だと云つて嫌はれては困ります、」と云つてまた隅の方に行つて腰を掛けて居睡をはじめた。私の前には身動きもしないアンナ・マルチノヅチが伏目になつてゐて、外には彼女の夫が私の馬を彼方此方歩かせながら馬の鬃の鎖を手で撫でゝゐるのが窓から見えた。

七

私の母はハルロフの長女を高慢な女だと云つて好かなかつた。アンナ・マルチノヅチは母のお蔭で寄宿學校に入れられて教育されたり、結婚さしてもらつたり、それから結婚の時には千留の金と、着るには少し古くはなつてゐたが黄な土耳其の肩掛を貰つたりしたのだつたが、私の家には滅多に顔を出さず、たまに顔を出しても母の前ではびく／＼して小さくなつてゐた。身の丈は普通で、瘦せてはゐても活發で敏捷で、濃い、美しい髪と、淡青い細い眼が妙に生々として輝く立派な、色の黒い顔を持つてゐた。その鼻は細くまつすぐに通つて、唇も細く、額は髪の中のピンと張るやうだつた。この女を見る者は誰でも、「働巧な女だ——併しまだ嫌な女だ！」と思はない者はない。それにも拘らず此の女には何處か人を惹付けるものがあつて、顔一面に「蕎麥糟」のやうに散らがる黒い痣でさへ其の感じを助け

た。彼女は手を頭布に突込んだまゝ、狡げに眼を伏せて私を見守つてゐた（私は腰掛け彼女は立つてゐた）。彼女の唇と頬と長い睫毛の影には意地悪さうな微笑が幽かに見えた。「まあ、よく食べる綺麗な坊ちゃん！」とその微笑が語つてゐる様に思はれた。呼吸をする度に彼女の鼻の孔が擴がつた——これも不思議に思はれた。けれども矢張り、アンナ・マルチノヅチが私を愛して呉れたら、または其の意地悪さうな細い唇で私を接吻でもしてくれやうものなら私は最う有頂天となつて天井にでも飛上つたらう。彼女が大變嚴格で難かしくて、百姓の女や娘たちは恐れて逃げると云ふ事は私も知つてゐる——けれども其れが何だ？ アンナ・マルチノヅチはひそかに私の心を動かした……結局私はまだ十五歳に過ぎなかつたが、——其の歳をして！……

マルチン ベトローウイツチはまた目を醒して呼んだ、「アンナ！ 何かピアノでも弾いてお上げ……坊様はあれがお好きなのだから。」

私はあたりを見廻した。部屋には貧しいピアノらしいものが見えた。

「はい、アンナ・マルチノヅチが返つた、「けれど弾いていゝでせうか？ 喜ばれはしないでせう。」

「何うして、お前學校で何をなつたんだ。」

「妾は何も忘れてしまひました——それに鍵盤も毀れてゐますから。」

アンナ・マルチノ・ヴナの聲はやゝ哀調のある、よく響く、氣持のいい聲だつた——何だか猛禽の鳴く聲のやうだつた。

「左様か」と云つてマルチン・ペトロウイツチはまたうとくと眠りに落ちかけながら「じや何うです、夢をこなす場所など御覽になつては？　ワロトカが御案内しますから。——おい、ワロトカ！」彼は外でまだ私の馬を連れて彼方此方歩いてゐる娘の婿を呼んだ、「坊様を夢をこなす場所に御案内してくれ……それからいろいろな仕事場を御覽に入れるのだ。私は睡らなくちやなりませんから！　じや、御免下さい！」

私は彼の後ろに従つて家を出た。アンナ・マルチノ・ヴナは早速いそいそとさながら怒つてでもゐるやうに食卓を片付けはじめた。戸口まで出た時、私は振返つて彼女にお辭儀をしたが、彼女は私のお辭儀には眼も呉れない様子で、たゞ一層意地悪げな例の微笑をまた漏らしたゞけだつた。

私はハルロフの娘の婿の手から馬を受取つて其の轡を取つた。二人は夢をこなす場所に行つてみたが、別に變つた事もないし、私のやうな子供に百姓の仕事の興味が無い事は伴れの人にも直ぐ解るので、二人は庭を横切つて大道に出た。

八

ハルロフの娘の婿は私もよく知つてゐた。彼の名はウラジミル・ワシリエウイツチ・スレトキンと云つた。彼は孤兒だつたから私の母に育てられたが、その父と云ふのは母が仕事をさしてゐたつまらない官吏だつた。始めは村の學校に通ひ、それから「領主の會計課」に勤め、それから政府の倉庫に代り、それから最後にマルチン・ペトロウイツチの娘の婿になつたのだ。私は彼の事を小さい猶太人と呼んだものだが、實際ちゞれ髪で、始終濕つた西洋李の様な黒い眼をして、鉤鼻で、廣い赤い口を持つた彼は猶太人の型に見えた。併し皮膚の色は白く全體に様子がいゝ方だつた。彼は自分の利害に關係のないかぎりは、ごく深切な實だが、一度利害に關する事になると慾の爲に前後のわきまへも失つてしまつて、涙さへ出して、つまらぬ小さい物を得る爲に一日泣言を云ひでもする。人と約束でもすればそれを忘れないやうに百度も相手に催促を繰返し、若し其れが直ぐ實行されなかつたら承知しないで苦情を云ふ。彼は銃を持つて野をぶらつくのが好きで、若し兎か鴨でも捕らうものなら、「最にお前が何んなに智慧を絞つても逃しはしないぞ！　最う己れのものだ！」と云ひながら妙に味をつけて其れを靴の中に入れる。

「いゝ馬をお持ちですなあ。」と彼は私を鞍に乗せながら咳く、「私もこんな馬が欲しいものです！ 何處に行つたら有るでせう？ 私はとても駄目だ。お母様に聞いてみて下さいませか、ねえ——聞いて下さい。」

「お母様を買つてやると約束したのですか？」

「約束？ いゝえ、けれども若し御深切に——」

「マルチン・ペトロトウイツチに頼んだらどうです。」

「マルチン・ペトロトウイツチに？」とスレトキンはゆる／＼繰返して、「あの人には私はマキシムカのやうなつまらぬ小僧よりもまだ構はれないのです。なか／＼手厳しい人で、何んなに働いたつても呉れはしません。」

「本當？」

「本當ですとも。」己れの云ふことは聞かねばならぬ！と斯う云ふのですからね——そうすると最う斧で切られたやうなものです。何んなに頼んでみても駄目です。それに私の妻のアンナ・マルチノ・ヴナはエヴランピア・ヌルチノ・ヴナほど可愛がられてゐないのですからね。おゝ、神様、私たちを恵んで下さい！」斯ふ云ひながら彼は急に絶望したやうに両手を振上げた。「御覽なさい！ あれは何

うしたんでせう？ 私方の半段ばかりの燕麥がまるで刈つてある。野郎！ まあ御覽なさい！ 泥棒だ！ 泥棒だ！ イエスコウオや、ビエスコウオや、イエリノや、ピエリノ（これは近くの四つの村の名）では信用が出来ぬと云ふのは本當だ！ あゝ、あゝ、何と云ふ事になつたのだらう、一留半、ひよつとしたら二留の損だ！」

斯ふ云ふスレトキンの聲はまるで泣聲だつた。私は馬の肋を蹴つて彼と別れた。

スレトキンの叫聲はまだ聞えてゐたが、道を曲るとハルロフの次女のエヴラムピアが、アンナ・マルチノ・ヴナの云つたやうに矢車草の花を取りに行つたものと見えて、頭の圍りに大きい花輪を巻いて歸るのに出會つた。私たちは黙禮を交した。エヴラムピアも姉と同じやうに美しい方だが、姉とはまた變つた趣さがあつた。背が高く丈夫さうで、其の頭も、手足も、雪のやうに白い齒も、ことに其の飛出た懶うさうな硝子の念珠のやうな青黒い眼も、何もかも大きかつた。何もかも美しくはあるが著しい特色を備へてゐた（彼女は眞にマルチン・ペトロウイツチの娘だつた）。豊かな美しい頭の髪は、何うして好いか自分でも解らないと見えて、三組に編んで頭に巻付けて、薔薇のやうに赤くて鮮やかな美しい唇は、話をする度に其の上唇の眞ん中を妙に愛らしく上に持上げた。けれども彼女の大きい眼の目差には何だか野趣のある殆ど荒々しい或物があつて、マルチン・ペトロウイツチも、

「荒いコサツク生れの自由な鳥」だと云つてゐた。私は彼女を畏れてゐた……此の立派な美しさは其の父の或物を思ひ出させた。

私は彼女の強い、やゝ烈しい、並通の百姓の聲で歌ふ唄を聞きつゝ馬を進めてゐたが、急に唄が止んだので岡の頂から眺めると彼女は姉婿の傍に立つて燕聲の畑を見てゐる。姉婿は畑を指差しながら何か頻りに辨じ立てゝゐるが、妹は身動きもせず佇んで、その高い姿を日光にさらし彼女の頭の上には矢車草の花がきら／＼青く輝いてゐた。

九

私は前に此のハルロフの次女にも母が婚の候補者を選んで遣つたと云つたと思ふが、其の男と云ふのは近在の貧乏人の一人で名はガヅリラ・フェドリツチ・ジトコフと云つて退役の陸軍少佐だが、最う若い男ではなく、自分でも多少のお世辭は混つてゐるようが、「老害れだ」と云つてゐた。読み書きは殆ど出来ない到つて間の抜けた男のだが、ひそかに母に取入つて自分は「働く男だ」と云つて母の家令にならうとした。ジトコフが馬鹿でなかつたら、家令になるには今の家令の母から信用されてゐる腕利きの波蘭人のクヴィチンスキーを退けねばならぬので、とても其んな事は出来ないと思ふことを

覺つたやうらう。ジトコフは馬のやうに長い顔をして汚ない白っぽい髪を生やし、それが眼の邊まで垂れ懸り、何んな酷しい霜の結んだ時でも其の髪に露のやうな汗が滴つてゐた。そして母の姿を見ると、柱のやうに眞つすぐに固くなつて棒立ちになり、頭をぶる／＼振はせながら両手を腰に付けてしまひ、まるで全身が「何でも云付けて下さい！……一牛懸命に遣ります！」と云つてゐるやうな調子だ。

私の母は彼の能力をよく知つてゐたが、エヴラムピアと嫁合はせるには差支へないと思つてゐた。

「併しお前はあの女を抑へることが出来るかへ！」と或日母が彼に訊ねると、彼は慇懃に微笑して、

「確に出来ます、ナターリア・ニコラエウナ！ 私は一つの聯隊を思ふまゝにして、馴らしましたぜ。斯んな事が何です？ わけのない事じやありませんか！」

「一つの聯隊は、わけがないかも知れないが、好く育つた娘、一人の妻はまた違ふからね、」と母が氣を悪くして云ふと、

「確に出来ます、奥さん！ ナターリア・ニコラエウナ！ すぐ解ることです。一口に云へば若い女は力弱い者です！」

「よし！」母はとう／＼心を定めた、「エヴラムピアを踏にじらせてはならない。」

或日——それは六月のことで夕暮に近かつた——召使がマルチン・ペトロウイッチの來た事を知らせた。母は吃驚した。彼は一週間以上も姿を見せないし、而も今までこんなに遅く訪れたことはなかつたのだ。「何事か起つたのだね！」と母は低い聲で呟いた。部屋に這入つていきなり屏の傍の椅子に倒れ懸つたマルチン・ペトロウイッチの顔には常に無い表情が漂つて、何か思ひ詰めてゐるらしく蒼白くなつてゐるので母は思はず聲を立てた。マルチン・ペトロウイッチは小さい眼で母を見詰めて暫くの間黙つてゐたが、やがて深い溜息をもらして、また黙り込み、それから曖昧な言葉の調子で或る用事で來た……それは……まあ謂はゞ、それと云ふのも……

斯んな前後の關係のない言葉を残したまゝ、不意に起立つて姿を消してしまつた。

すぐさま母は召使を叫んでマルチン・ペトロウイッチを逃がさぬやうに連れて歸れと云付けたが、彼は早や馬車に飛乗つて立去つた後であつた。

翌朝、母はマルチン・ペトロウイッチの不思議な様子や常でない顔付きに驚いて心配しゐる母が、彼の家に使ひを遣らうとしてゐる時、彼が遣つて來た。今度は幾分か落着いてゐた。

「何うしたんだ。何うしたんだ」と彼の姿を見るとすぐ母が問ひかけた。「何事が起つたんだ？ 昨日はね、本當に……お前が氣でも違つたんじゃないかと思つて氣が氣じやなかつたよ。」

「氣なんか違ひはしません、」マルチン・ペトロウイッチは返へた。「私はそんな男じやありません、併しあなたに御相談したい事がありました。」

「何を？」

「たゞこの同じ出來事でああなたが氣を悪くなさりはせぬかと——」

「早く話しておくれ、早く話しておくれ、ねえ、最つと手短かに。驚ろかしちやいけないよ！ 此の同じ出來事と云ふのは何？ よく解る様に話しておくれ。それともまた氣でも塞いでゐるのか？」

ハルロフは顔をしかめた。

「氣を塞いでゐるのではありません——それは三ヶ月様の出る時の事です。ですが奥さん、妙な事をお訊ねするやうですが死とは何んなものでせう？」

「まあ何を考へてゐるのだお前？ 死なゝい人があるものか？ 獲らお前の體が大きく生れ付いてゐても、矢張りおしまひはあるからね。」

「ある！ おゝ、ある！」ハルロフは黙頭きながら下を向いた。「私は夢で幻が近づくのを見ました。」

と、とう／＼事實を吐いた。

「何だつて？」と母が遮ると、

「夢の中の幻です。」と繰返して——「私がよく幻を見ることは御存知でせう！」

「お前が？」

「え、私が。御存知ありませんか？」ハルロフは溜息をして、「じや、何です……一週間ばかり前の事です、奥さん、聖ペテロの断食の前日で肉を食べた日でした。晝飯を食べて午睡をしてゐますと夢に自分の部屋に鴉のやうに黒い仔馬が走り込むのを見ました。その仔馬が齒を理して遊び廻るのです。油蟲のやうに黒い馬でした。」と云つてハルロフは口をつむいだ。

「それから？」母が訊ねた。

「すると不意に此の仔馬が向直つて私の左の肘を、丁度肘骨の處を蹴つたのです……私は目を醒ました。處が腕も足も動かなくなつてゐるのです。麻痺したのですね。幸に上下に動かしてゐる中に直りはしましたが長い間、骨と骨とのつなぎ目がうづいて、今でも痛みは止みません。手を擴げると肺の關接が痛くてたまらないのです。」

「なほに、マルチン・ペトロウイツチ、それはお前寐たがつて腕を痛めたのだよ。」

「いゝえ、奥さん、何うかそんな事は仰有らないで下さい！ 是れは知らせなんです……私が死ぬる知らせなんです。」

「そんな事が、」と母が云ひかけると、

「知らせです。死ぬる用意をしろと告げて呉れたのです。それで私は一刻の猶豫もなしに御知らせしたい事があるのです。」ハルロフは急に聲を上げて、「神様のお使ひが私の中に考へてゐる事を知らぬ間にその死がやつて來ると困りますからね。詰り私が生きてゐる中に、アンナとエヴラムビアの二人の娘に、神様が仰有る通りに従つて私の地處を分けて遣らうと思ふのです——」マルチン・ペトロウイツチは斯う云つて唸り聲を出してそれから附加へた、「一刻の猶豫もなしにね。」

「それは好い考へだよ、」母が云ふ、「尤も急ぐには當らぬとは思ふがね。」

「そこで其の手續や法律の證人となつて頂き度いと思ひましてね、」ハルロフは一段と聲を高くして續ける、「あなたの御息のドミトリ・セミヨノウイツチを——あなたに御面倒は掛け度くありませんから——そのドミトリ・セミヨノウイツチと、それから私の親戚のピチコフに、二人の娘——即ち結婚したアンナと、未婚のエウランピアに遺産を分配する證人になつて貰ひ度いと存じます。それは明後日の十二時から早速私のゐるエスコウオ、またコズルキノとも云ふ處で證人や役人のゐる前で行

はうと思ひます。」

マルチン・ペトロウイッチは暗誦してゐたと思はれぬ以上の文句を、處々に溜息を混へながら、やう／＼のことで終まで云ひ終つた……云ひ終つた時には最う胸に息がななさうで、彼の蒼白い顔は、赤くなつて、幾度も幾度も顔の汗を拭いた。

「財産を分配する命令を早や作つて仕舞つたのか？ 何時の間に作つたのだ？」

「私は……おゝ！ 食はず飲まずで——」

「でお前がそれを書いたの！」

「ワロトカ……おゝ！ あれが。」

「そして届けは出したのかい？」

「出しました。そして許しを得て、地方裁判所に通知も来て、……おゝ！ ……立會つて呉れるさうです。」

母は笑ひ出した。「まあ、マルチン・ペトロウイッチ、お前は何かも手續を済ましてしまつて

——こんなに早く。お金を使つただらう、屹と？」

「はい、奥さん。」

「宜しい、で、妾に相談に來たのだね。宜しい、ドミトリを遣りませう。それから「片見」も一緒に遣りませう、それからクヴィチンスキーに……併しお前はガヴリラ・フェドリツチは招きはしなかつたらうね？」

「ガヴリラ・フェドリツチ——ジトコフさん——はい通知しました……同じやうに私から。許嫁ですからそれが當り前です。」

スルチン・ペトロウイッチの雄辯の源はそろ／＼つきて來だした。彼は自分の可愛がつてゐるエヴラムピヤには最つと好い婿があると思つたものか、平常から母が取定めた婿にはあまり乗氣でないらしく見えた。

彼は椅子から立上つて足で床を擦りながら、「御承諾下さつて有難うございました。」

「是れから何處に行くの？ 最少しお待ち。御飯を拵へさせるから。」

「難有うございます。併し其んなわけには参りません……おゝ！ 私は家に歸ります。」

彼は後ろに向いて例の如く斜に戸口を出やうとした。

「ちよつと、ちよつとお待ち。お前は自分の財産をまるで少しも残さずに二人の娘に分けてしまふのか？」

「え、少しも残さずに分けます。」

「ではお前は何うするの——何處に行つて暮すおつもりなの？」

ハルロフは驚いて手を上げて、何處で暮すかと仰つしやるのですか？ 私の家で今迄の様に暮します……これからも。それより他に何がありますか？」

「じやお前はそんなに自分の娘たちや娘の婿を信じてゐるのか？」

「ワロトカの事を仰つしやるのですか？ あんな間抜けの事を仰つしやるのですか？ なあに、あれは私の思ふやうになります、何んな事でも……あれに何んな力があるんです？ それからまた娘等にしたところが私が墓に這入るまで世話をして呉れて、肉や酒を飲ましてくれて、着物を着せてくれるのが……其れが第一の務めですよ。長く面倒は掛けません。死は圃の向ふにあるのじやありません——私の肩の上に乗つかつてゐるのです。」

「死は神様の手の中にあるのだよ、」母が云ふ、「皆が左様するのは當り前に違ひないけれどね。けれど、マルチン・ベトロウイッチ、斯う云つては失禮かもしれないがお前の長女のアンナは自負心が強くて利かぬ氣だと云ふ評判だし、それから——左様——二番目のは烈しさうな顔をしてゐる……」

「ナターリア・ニコラエウナー」とハルロフが言葉を遮つて、「何うしてそんなことを仰つしやるので

す？ ……何うして、娘たちが……何うして、私が……彼等の務めを忘れ忘でもするやうに仰つしやるのですか？ 子供たちは夢にでも……逆ひますか？ 誰に？ 両親……そんな事をしますか？ 子供たちは私の呪ひを恐れませんか？ 子供たちは今迄一生私に恐れて服従して來ました——それが急に……あゝ神様！」

ハルロフは息を詰まらせて咽喉をぐうと鳴らした。

「其れは左様だね、」と母は急いで彼を宥めて、「けれども妾は今すぐ分けてしまふと云ふのが何うしても解らない。皆に渡るのは何うせ後になるのではないか。妾は是れはみんなお前の氣が塞いでゐるか、ただらうと思ふねえ。」

ハルロフはやゝ當惑した面持ちで、

「奥さんは其の事ばかり仰つしやいます、ね。これには人間の力でないものが働いてゐるのは、あなたに塞いでゐるからだと言つしやる。何うして斯んな事を考へたか云ひますと、生きてゐる中に私の眼の前でどの子が何を取るか、私がどんなに分けてやるかと云ふことを定めてしまつて、そして子供等が有難く思つて、私の志を繼いで、父であり恩人である者が定めたものを満足して受取るのが見たいからです。」

ハルロフの聲はまた續かなくなつた。母は直ぐそれを受けて、

「よろしい、でないと今度は鴉のやうな色をした仔馬が本氣になつて現れるからね。」

「お、ナターリア・ニコラエフナ、其のことは仰つしやらないで下さい。あれは私を追かけて来る死です。何うも邪魔を致しました。じやあなた、坊様、何卒明後日は私方に來て下さいまし。」

マルチン・ペトローウィッチは出て行つた。母は私の方を向いて意味あり氣に頭を振つて、「困つたことになつた、困つたことになつた」と獨語を云ひ「お前見たらう、」——私に向いて——「あれが話しをしてゐる時に眩しさうに日でも照つてゐるやうに騒ぎばかりしたが。あれが悪いのだ。あれをする時には屹と其の人に心配があつて不幸におびやかされてゐるのだ。明後日はウイケンティー・オシボウイッチと「片見」を連れて行つておやり。」

十一

約束の日になると四つの座のある大きい馬車は六匹の栗毛の馬を着け、灰色の聲を生やした、押出しの立派な馭者のアレキセイウイッチが馭者臺に座つて靜かに私の家を離れた。ハルロフが仕様とする事件は大切なことでもあり、それに彼の招き方が頗る嚴肅だつたので、母も平常は使はぬ立派な馬車

を出させ、「片見」と私には一張羅の着物を着させた。母は確にその被保護者に對して尊敬の意を示さうとしたのだ。クヴィチンスキーは何時ものやうにフロツクコートに白い襟飾をつけてゐた。「片見」は途々まるで鴉のやうに饒舌つたり笑つたりして、義兄が自分にも何か分けてくれるか何うか心配しては鈍物だの舊弊な男だのと云つて罵つた。それで嚴格で難かしいクヴィチンスキーも辛棒しきれなくなつたとみえて波瀾訛のある言葉で、「何うして其んなに怪しからぬ事ばかり饒舌るんだ？」「全く見かけばかり」「彼の好く使ふ言葉」のつまらぬ愚痴をこぼさずに、じつと座することは出来ないのか？」「よし、今直ぐ、」と「片見」は不幸らしく呟いてそれから鏡の目を馬車の窓に据えた。十五分ばかりたつて滑らかに走る馬が新しい馬具の温かさを感じもせぬ中に早やハルロフの家が見えて來た。大門をくゞつて私たちの馬車は庭に這入つた。足が馬の腹に半分しか届かぬ小さい馭者が小兒のやうに叫んで軟らかい鞍に最後に跳上ると、年を取つたアレキセイウイッチが直ぐ肘を擴げて微かに「ウォー、オー」と云ふと私たちは、はたと止まつた。尤も私たちを迎へて吠えもせねば、大きな腹の邊まで割けたスモックを着た農奴の小兒も蔭れて姿を見せぬ。ハルロフの娘の婿が戸口に出て迎へた。今でも覚えてゐるが復活祭のやうに階段の兩側に赤楊の枝が差してあるので驚いたものだ。一番に馬車を卸した「片見」が「物々しい上にも物々しい、」と鼻で云つたが、實際總ての方面に嚴肅な氣が満ちてゐた。

ハルロフの娘の婿は綿布の頸巾をつけて馬鹿に窮屈さうな小さい燕尾服を着込んでゐたが、其の蔭からひよつこり現れたコキシムカは頭の髪から滴がたれるほどクワスに浸つてゐた。客間に這入るとマ
ンチン・ペトロローウィッチが山の様に泰然と控えてゐる——左様まるで山の様に——室の眞ん中に身
動きもしないで、「片見」とクヴィチンスキーは此の巨大な姿を見て何んな感じを起したかは知らない
が、自分は一種の畏敬に似た念に打たれた。マルチン・ペトロローウィッチは灰色のコサツクの服——
屹と千八百十二年に着た軍服だつたらう——に黒い立襟が付いてゐた。胸には勳章を垂げ、腰に軍刀
を付け、左手で其の束を握り、右手は赤い布を掛けた卓子に凭せてゐる。其の卓子の上には何だか一
杯に文字を認めた二枚の紙が擴げてあつた。そして別に喘ぎもしないで凝と立てつたハルロフには、
何と云ふ威厳があり、また何と云ふ自信、自分の無限の絶対の権力に對する自信が示されてゐた。ど
う！ 彼は唯頭で軽く會釋して、微かな聲で「お掛けなさい、」と云ひながら左手の人差指で、並んで
ゐる椅子の方を指差した。客室の右手の壁際には月曜の晴着を着たハルロフの娘たちが掛けてゐる。
アンナは薄紫と緑が基盤に編合つた着物に黄色の絹に飾紐をつけ、エヴランピアは濃い赤のリボンに
淡紅色の着物を見て、その傍には新しい服を着たジトコフが斷えず間の抜けた慾深さうな表情を浮べ
ながら立つてゐて、其の毛深い顔には常にも増した汗が流れてゐる。左手には荒い褐色の髪をした年

の寄つた僧が着古しの衣を着けて腰掛けてゐる。此の髪が生えた頭や、其の力も光もない眼や、自分
でも重荷と感じてゐるやうに膝の上に二つの岩の様に載せてゐる皺の寄つた大きい手や、衣の下から
覗くタール塗の長靴や、總て是れらの物が彼の喜びの無い骨の折れる生活を語つてゐるやうに見えた。
彼の教區は皆貧しかつた。彼の次には地方の警察署長がゐたが、彼は肥えた蒼白い汚ならしい小さい
紳士で、軟かいぶよ／＼した小さい手足と、短く刈つた黒い髭を持つてゐて、斷えず愉快らしいが
何處か病氣でもありさうな微かな微笑を浮べてゐる。噂に寄れば彼はよく賄賂を取る男で、當時の
言葉に従へば壓制者だとさへ云はれてゐた。けれども上の方の人ばかりでなく、百姓たちでさへ彼に
馴づいて、彼を好んでゐた。彼は頗る自由な氣安な、寧ろ皮肉な目附であたりをじろ／＼見廻してゐ
た。彼は明に此の會合の「順序」を興味を持つて眺めてゐるらしかつた。實際彼に取つて大事なこと
は唯我々のために控えられてゐる軽い食事と酒だけであつた。併し彼の次に座つて長い顔にアレキサ
ンダー一世時代の細い頬髯を耳から鼻にかけて生やしてゐる腹せた辯護士は一心にマルチン・ペトロ
ーウィッチの順序を追つて、決して其の眞面目な大きい眼を彼から離さなかつた。彼は熱心な注意と
同感の餘りに口は開けないが始終唇を動かしたり捻じたりしてゐた。「片見」は彼の次に座つて私に彼
が縣内の共済組合の長だと告げた後で、彼に頻りと内證話を始めた。地方裁判の出張は、誰でも

知つてゐる通りに警察署長と、辯護士と、地方警察の委員が立會ふものだが、委員は來なかつたものか、それとも前に出しゃばらなかつたものか、私には見えなかつた。併し丁度漂浪者を「誰やら解らず」と呼ぶやうに、地方では彼を「ゐない者」と綽名をつけて呼んでゐた。「片見」の次には私が座り、その次にクヴィチンスキーが座つた。實際家の波蘭人の顔には私たちの「全く見かけばかり」の出席や、時間を無益に浪費するのを嫌ふ色が鮮かに讀まれた。……「奥様の物好き！ 露西亞の貴族の考へ！」彼は獨語を呟いてゐるやうに見えた……「へん、露西亞人のすること！」

十二

私たちが殊らず席につくと、マルチン・ペトロウイッチは肩を張り咳喇ばらひをして、熊の様な小さい眼で私たち一同をじろ／＼眺めた後大きい音をさして溜息をついて、纏て次の様に語りだした。

「皆様、私が皆様に列席して頂いたのは次の事の爲です。私は年を取りました、皆様、そして體も弱く成りました……私は早や知らせを受けて、死ぬる時が夜の盗人の様に忍込まうとしてゐます……ねえ、左様じゃありませんか、和尚様？」と僧に眼を呉れた。

僧は吃驚して、「左様ですとも、左様ですとも、」と鬚を揺すりながら呟いた。

「ですから私は、」マルチン・ペトロウイッチは急に聲を揚げて、「その死が不意に遣つて來ないやうに、」……マルチン・ペトロウイッチは先々日母の前で云つたと一言も違はぬ文句を繰返して、それから、「この決心をすると同時に私は、」此處でまた一層聲を張上げて、「此の證書を、」(卓子の上の紙を手で叩いて)「書いて皆様に御苦勞をかけました次第でございます。で、此の中に次の様に私の志が書いてあります。私は治めて來ましたが、最う私の仕事は終りました！」

マルチン・ペトロウイッチは圓い鐵縁の眼鏡を鼻の上にかけて、卓子の上から一枚の紙を取上げて始めた。

「退役陸軍下士なる貴族マルチン・ハルロフが彼自身の充分な正しき理解と彼自身の良き判断を以て書いたところの彼の財産分配の證書。而して此の中に彼の二人の娘、アンナとエヴラムビアに分配する恩恵を正しく定む——禮！」——(彼等は禮をした)、而して農奴、其の他の財産、及び家畜などを如何に以上の娘たちに分配するかを定む！ 署名！」

「是れが證書です！」と署長は例の微笑を浮かべながらクヴィチンスキーに囁く、「味を着ける爲に讀んだのでせうが此んな派手なお祭騒ぎは何うでも、兎に角法律上の證書は様式に従はねばなりませんか

らね。」

「片見」がにや／＼笑ひ出さうとする……

「私の意志に従つて、」と署長の言葉を捕へたハルロフが云ふと、

「いろ／＼な點を考へて、」と氣輕に署長が受けて「たゞ君も御承知でせうが、マルチン・ペトロウイッチ、様式を無視することは出来ません。そして不必要なこまかい事は退けるのです。政府は斑の牝牛や綺麗な牡牛の問題には關與出来ませんからね。」

「此方に來い！」ハルロフは私たちの後から室に這入つて、へつらうやうに屏近く立つてゐる彼の娘の婿に怒鳴つた。彼は直ぐ舅の傍に走寄つた。

「そら、是れを讀めい！ 己れには困難だから。用心して曖昧な讀方をせぬやうにしくちやいかんぞ！ 此處にゐらつしやる方に一人も残らず解るやうに讀むのだ。」

スレトキンは兩手に其れを持つて、おづ／＼ではあるが而もはつきりと、興味と感情を以て分配の證書を朗讀し始めた。其れには何をアンナに、何をエヴラムピアにと極く詳細に認めてあつて、分配の方法も書いてある。讀む間にもハルロフは斷えず、「解つたか、アンナ、あれはお前の熱心に對して遣るのだ！」とか、「あれはお前だ、エヴラムピア！」とか注意をし、娘たちは二人共、アンナは腰か

ら上、エヴラムピアは唯頭だけで會釋をした。ハルロフは二人を威儀を正して見た。「農場の住家」(小さい新築)は「世間悉知の習慣に従つて、」妹たるエヴラムピアに與へられた。朗讀者の聲は此の自分に不利益な言葉を読みながら振えた。ジトコフの方では唇を嘗めた。エヴラムピアの尻目がそつと彼に注がれたが、私が若しジトコフの靴だつたらあの目差を好まなかつたゞらう。大抵の純粹の露西亞の美人には附き物だが、エヴラムピアの癖の此の人を輕蔑した表情には其の瞬間妙な影を宿してゐた。マルチン・ペトロウイッチは自身の分として自分の居間に住む權利を保存し、また「定糧」の名義で「日常の糧食」と、月十留の被服料を要求した。そして證書の終の文句はハルロフ自身で朗讀した。

「而して是れは律に次いで父たり頭たる者の命令なれば、且つまた我れは何人にも辯明をなしましたはなされる義務なければ、此の我が意志に従ふは娘たちの義務なり。而して此の我が意志に従へば父たる者の祝福彼等の上に在れども、若し神に逆ひて従はざれば避け難き父たる者の呪咀永遠に彼等の上に在らん、アメン！」

ハルロフは證書を高く頭の上に捧げた。アンナは直ぐ跪いて額を床に押付け、彼女の夫も其れに従つた。「よし、お前は？」とハルロフがエヴラムピアに向直ると彼女はまつ赤になつて床に伏した。ジトコフも全身を前に曲げた。

「署名しろ！」とハルロフは證書の終りの處を人差指で示した。「此處に『感謝して受く、アンナ。感謝して受く、エヴラムビア』と書くのだ！」

二人の娘は立上つて順々に署名した。スレトキンも後から立上つてペンを握らうとすると、ハルロフが中指を彼の頸巾に突込んで押退けたので、彼は喘ぐやうに息をした。其處に暫く沈黙があつた。と、不意にマルチン・ペトロウイチは噁り泣くやうな様子を見せて、「さあ、これで皆お前たちのものになつた！」と呟いた。彼の娘たちと婿は互ひに目を見交して、つか／＼と彼の傍に寄つて其の肘の上の處を接吻した。肩まではとどかないので。

十三

署長はマルチン・ペトロウイチが本當の様式に従つて認められた遺産分配の證券を読んだ。それから彼は辨護士を従へて入口の階段の處に出て、法律に規定された立會人として門口に集まつてゐる近所の人やハルロフの小作人や二三の農奴などに向つて顛末を報告した。それから新しい所有者の財産を受繼ぐ式が行はれた。彼等もまた階段の處に出た。無造作な顔にちよつと嚇かすやうな色を浮べて片方の肩をやゝ掣めた署長は、彼等を指差し、群集に向つて云ふことを聞くのだと訓した。然し署長の

訓示はなくてもいゝ位で、世の中にハルロフの百姓ほどおとなしい百姓はなかつたやうに思ふ。彼等は薄いルバーシユカに羊皮の外套の破れたのを身に纏つてはゐるが、事ある時の彼等の習はしとして腰にはしつかりした堅い帯を締めて、まるで石の像のやうに凝として突立つてゐた。そして署長が、「解つたか、畜生？ 聞えるか、畜生？」などゝ奴鳴る毎に彼等は急に命令でもされたやうに皆んな一緒にお辭儀をするのであつた。此の「畜生」は皆兩手に堅く帽子を握つて、マルチン・ペトロウイチの姿が見える窓から眼を離さなかつた。一同はびく／＼ものであつた。「マルチン・ペトロウイチハルロフのたつた一人の法律上の相續人、及び娘達が財産を受繼ぐことになつたについて異議のある者があるか？」と署長が奴鳴つた。

言下に一同は身を集めて一塊にかたまつた。

「異議があるか、畜生？」と署長はまた奴鳴りつける。

髯を短かく刈込んだ痘瘡面の背の低い兵隊上りの老人が、「ありませんです、署長様」と元氣のいい聲で答へる。

「なあ！ エレメイッチは膽が大きいなあ！」と後で一同が彼の事をはやした。

署長が頼んでもハルロフは娘と一緒に入口に出て來ない。「そんな事をせんでも外の百姓は云ふこと

を聞きます！」と濟ましてゐた。讓るものを讓つてしまつた彼は何だか物悲しいやうな感じを覺えた。彼の顔色は蒼白くなつて來た。この思ひ懸けない、時にそぐはぬ悲しみの表情を、あの大きくて親切なマルチン・ペトローウイチの顔に見た私は、何と思つていゝのか腑に落ちかねた。幽鬱症に襲はれたのであらうか？ 百姓達も明らかに困つて來たらしかつた。無理もない。「旦那は生きてゐる——旦那は彼處にゐて、あんなに丈夫なんだ！ だのに急に持物を讓るなんて……不思議だ！」自分の「部下たち」の頭を往來してゐる考を覺つたのか、それとも自分の勢力を最後に振つてみたかつか、ハルロフは急に小窓を開けて頭を突出し、「云ふことを聞くんのだ！」と雷のやうな聲で喚いてすぐまた窓をびつしやり締めてしまつた。呆然とした百姓達の疑惑はこれで追拂はれもしなければ少なくなつてもしなかつた。益々石のやうに固くなつて見る物も見ないほどになつた。家附の農奴の群（その中には短かい更紗の着物を着てミケランゼロの「最後の審判」に比べても可いやうな筋肉を持つた二人の丈夫な女と、着古しの粗羅紗の外套を着た老耄して殆ど眼もよく見えないほどの白髪の老人でポテムキンの頃にコルネットを吹いてゐたと噂されてゐる老人が一人、——小僧のマキシムカはハルロフが自分で使つてゐた）この群は百姓達の群に比べるとやゝ生色があつた、少くも始終身動きをしてゐた。二人の新しい女主人、ことにアンナは非常に嚴肅に取濟ましてゐた。彼女のきつと結んだ薄い唇

や、凝と下を見結めた眸……彼女の嚴格な姿は農奴達に未來に對する餘り有難い豫想は起させなかつた。エヴラムピアも下を見詰めてゐたが、たつた一度自分の許婚のジトコフガスレトキンに習つて階段に出ようとした時に驚いたやうに振返つて見た。「あなたは何用があつて？」とその立派な大きい眼が訊ねるやうに見えた。誰よりも一番様子の變つてゐたのはスレトキンであつた。さながら飢えでも感じてゐるやうないそ／＼とした嬉しさうな風が全体の様子に現はれてゐた。頭や足の動かし方は何時ものへつらつたやうな調子であつたが、いき／＼と腕を始終動かさしめ、何でもなことに肩胛骨をびく／＼揺すぶつたりした。それが如何にも、「たう／＼遣つて來た！」と云はぬばかりと見えた。受繼の式が濟むと、御馳走の事を考へて口に唾をためてゐる署長は、酒の最初の杯を飲干す前によく人がやる様に手を揉んだ。然しマルチン・ペトローウイチは其れより先に聖水を注ぐ式を濟ませ度いと云つた。僧は古くさい外袍を着た。老耄の補祭は古い眞鍮の器の中の香に苦心して火を點けながら臺所から姿を現した。やがてお勤めが初まつた。ハルロフは斷えず溜息をしてゐた。彼は餘り肥えてゐるので床に頭を屈めることが出來ないので、右手で十字を切つて頭を垂れ、左手の人差指で床を指差した。スレトキンは光つてゐるやうで涙さへ流した。ジトコフは將軍らしい威嚴を見せて軍服の第三釦と第四釦の間に微かに指を動かせるばかり。クヴィチンスキーは天主教徒として次の室に止ま

つてゐた。然し辨護士は非席に熱心に祈り、同情のこもつた溜息をして口の中で何か呟いては唇を噛んだり、眼を仰向けたりしてゐたので、私は彼を見てゐると自然に感傷的な氣持になつて熱心に祈りだした、聖水を注ぐ時にはボテムキンの時代から生きてゐる盲目のコレネット吹きや、クヴァイチンスキーに至るまで一人も残らず聖水で眼をうるほしたが、それが濟むとアンナとエヴラムピアは再び父の命令で床に跳いて彼は感謝した。それが濟むとやう／＼で食事の番が来る。澤山の皿が出たがそれが皆んな良いものなので、私たちは恐ろしく澤山喰べた。無くてはならぬドンの酒の罎も現れた。誰よりも一番世間の事を知つてゐて、その上に政府の代表者である處の署長は先づ「美しい女主人」の健康を祝して一緒に飲まうと云出した。それから彼は、次に最も名譽ある氣の大きい友人マルチン・ペトローウィツチの健康の爲に飲まうと云つた、この「最も氣の大きい」と云ふ言葉でスレトキンは鋭い低い叫聲を上げて接吻しようと思人のそばに走り寄つた……「よし／＼」とハルロフは彼を腕で拂ひのけながら五月蠅さうに囁いた……しかしこの時面白くない出来事が起つて來た。

十四

始めから酒どかり呷つてゐた「片見」は不意に赤大根のやうに染まつた顔をして椅子から立上り、

マルチン・ペトローウィツチを指差しながら例の氣味の悪い卑しい笑方をして、
「氣が大きい！ 氣が大きい！」と不平を云ひ出した、「雪が降つてゐる時すつ裸にされて外に投出された時でも氣が大きいのか知らん！」

「何云つてゐるんだ、馬鹿！」とハルロフが輕蔑するやうに云つた。

「馬鹿！ 馬鹿！」と「片見」が見返す、「何方が本當の馬鹿か神様は御存知だ。お前は己れの姉妹を死なして仕舞ひあがつたが今度はたう／＼お前も自分で……はつはつはつ！」

「何故そんなに名譽ある恩人を侮辱するんです？」とスレトキンはマルチン・ペトローウィツチの肩から手を放して「片見」の方に馳寄つた。「若しあの恩人のお望みなら私は今でも證書を消して貰ひますよ！」

「それでもあなたは彼奴を裸にして雪の中に……」と云ひながら「片見」はクヴァイチンスキーの陰に身を隠した。

「黙れ！」とハルロフが奴鳴つた。「詰込んでジェリーにしてしまふぞ！ お前もまた出しやばらずに黙つとれ！」とスレトキンに向直つて、「用もない處に口を出すんぢやない！ このマルチン・ペトローウィツチ・ハルロフが遺産分配の證書を書いたら誰がそれを消せるものか？ 世界中を探したつて

それを消せるものはありやせん……」

「マルチン・ペトロウイッチ！」と辯護士は酒の廻つた低音で呼んだ——彼も大分酒を呷つた方なんだが彼の威厳は飲めば飲む程現れてゐた——「然し若しあの人云はれた事が本當だつたら何うします？ あなたが氣の大きい處置を取られたのはよく解つてゐますが、然し若し——こんなことは有りませんが——本當に満足しない者があつて、不平を云ひ出したら何うします？」

私はハルロフの二人の娘を窃と見た。アンナは辯護士の顔に凝と眼を据えて、其の顔を二層蛇のやうに嫌らしくしてゐたが、其の爲に却つて平常より美しく見えた。エウラムビアは顔を素向けて腕を組んで座つてゐた。そして何時もに増した嘲るやうな微笑が彼女の大きい薔薇色の唇を歪めてゐた。

ハルロフは椅子から身を起して口を開けたが舌が云ふことを聞かぬ。……唐突に彼が握拳で卓子の上を叩くと部屋中の物がまるで踊上つて音を立てた。

「お父様、」とアンナが急いで口を出した、「皆様は妾たちのことを知つてゐらつしやらないのですよ。だからあんな事を仰つしやるのですから氣を悪くなさらないで下さい。あなたは何でもない事に腹を立てゝゐらつしやるんです。御覽なさい、お顔がまるで引鉤つてゐますよ。」

ハルロフはエウラムビアの方を向いた。彼女は傍に座つてゐるジトコフにちよつと脇を突かれたの

だが身動きもしない。

「よく云つて呉れたアンナ、」と暖聲でハルロフが云つた、「お前は伶俐な子だ。己れはお前とお前の婿が頼りなのだ。」スレトキンはまた小さい鋭い聲を洩らした。「ジトコフは胸を擴げて足で床をちよつと掻いて注意を引かうとしたがハルロフはそれには氣を止めない。」この馬鹿は、と彼は顔で「片見」を差して、「己れをいじめようと思つてゐる。然しあなたには、」と今度は辯護士の方に向いて、「マルチン・ハルロフに對して裁判を下す権利はありません。そんな事はまだあなたには出来ない筈です。あなたはお役人にも似ず随分馬鹿げた事を仰つしやいました。證書は早や承認されてしまつたのですから、最う私が定めたことを動かすことは出来ないのです……さあ、これで失禮いたしました。私は最う此の家の主人ではなくて客なのです。アンナ、後はお前がよく氣を附けるんだよ。私はこれから私の部屋に歸るから。これでい——」

マルチン・ペトロウイッチはこの言葉の他は何も云はずに私たちの方に背を向けて、ゆる／＼と部屋を出て行つた。

斯うして主人が急に姿を隠してしまつた上に、二人の女主人と間もなく出て行つたので、一座はしらけて來た。スレトキンは後を取持たうとしても駄目だつた。署長は辯護士が必要もない時におつび

らな態度に出たことを責めた。「仕方がなかつたんです！」と彼は云ひわけをした……「私の良心が云つたんです。」

「ねえ、あの人は共済組合員ですよ、」と私に「片見」が囁いた。

「良心ですか！」と署長が答へた、「あなたの良心のことはよく知つてゐます！ 私たち罪人と同じやうに、あなたにも其れはポケットの中にあるだらうとは思つてゐます！」

僧は食事が早く片付きそうなのを見て取つたものだから休みなしに頼りて忙がしうに頬張つてゐた。

「あなたは随分やれますねえ、」とスレトキンが鋭い聲で彼に話掛けた。

「今食ひ溜めて置きませんとね、」と僧は優しい聲面をして答へたが、その答でも平常あまり食はないことは知られた。

がたくと馬車の音がした……私たちは解散した。クワイチンスキーはこの「まつたく見かけばかり」の嫌なものを見せられたので気分が悪くなつたと云つて一足先に歩いて歸つたので、私たちが歸る途では誰も「片見」のお饅舌と間の抜けた悪戯と邪魔するものがなかつた、クワイチンスキーの代りにジトコフが私たちの馬車に乗つたが、この退役の少佐は頗る不機嫌な顔附をして始終蜘蛛のやうに

鼻髭ばかりつ振てゐた。

「辛抱が仕切れなしなりはしませんか？」と「片見」がおどりとジトコフに話しかけた、「まあも少し様子を見てゐて御覽なさい何んな事になるか！ あなたも断られますよ。あゝ、お氣の毒な花婿さんだ。お氣の毒な運の悪い花婿さんだ！」

「片見」は夢中になつて饅舌り立てたが、可愛さうなジトコフは髭を振るより他に何も爲し得なかつた。

私は家に歸ると見たことをまるで母に話した。母はお終ひまで私の話を聞いて五六度頭を振つた。そして「困つたことだ、妾は斯んな事に定めたのを何うも蟲が好かない、」と云つた。

十五

翌日にマルチン・ペトロウイツチが食事に來たので母は萬事豫定通り無事にすんだことを祝して、「最う自由な體になつたんだから、これからは氣樂に暮すのですね、」と云つた。

「氣樂になりました、奥様、」とハルロフは答へたがその顔には本當に氣樂になつたやうな表情は見えなかつた。「これから私の靈のことでも考へて、死ぬる用意でもいたしませう。」

「そして腕のきやくする痛みは直つてしまつたの？」
 ハルロフは二度ばかり自分の左の腕を掘つては放してみた。「まだ直りませんです。奥様、實はこんな事があつたのです。私が眠りかけますとね、誰だか「用心しろ！ 用心しろ！」つて頭の中で怒鳴るのです。」

「それは神経だよ、」と母は打消して昨日の分配の時に起つたことに話を持つて行つた……

「實際、實際、」とハルロフは母の言葉を遮つて、「そんな事があつたんです……何でもないことなんですかね。實はかう云ふ譯なんですよ、」とちよつと言葉を切つてためらひながら——「私が昨日氣にしたのは「片見」が云つた、たわごとぢやないんです——辯護士は馬鹿ぢやありませんが、——辯護士の言葉にも迷惑は感じませんでした。私を困らしたのはそんな人ぢやなくてまるで違つた人なんです——」かう云つてハルロフは口をつむいだ。

「誰？」と母が訊ねた。

ハルロフは凝と母の顔に見入つて、

「エウラムビア！」も答へた。

「エウラムビア？ お前の娘の？ まあ何うして？」

「本當に奥様、あの子は石です！ まるで木像です！ 感じと云ふものが無いのでせうか？ あれの姉のアンナの方は——立派に當り前に出来てゐて、氣が走つてゐるんです！ ところがエウラムビアときは——なあに、本當のことを申しますが——あの子はひいきにしてやつたのです！ 何もかも遣つてしまふのですから私がこの世に長く生きる氣がないと云ふことは解つてゐるのに、あの子はまるで石の様になつてゐるんです！ 一口ぐらゐは云つてもいゝのに！ お辭儀——左様、お辭儀だけはしました、然し有難さうな顔はしてゐませんでした。」

「なあに、ガヴリラ・フェドリツチに嫁合はせればいゝぢやないか……そうすればあの子も軟らいで来るよ。」

ンマルチ・ペトロウイツチはまた眉の下から母を覗いた。

「なる程ガブリラ・フェドリツチがゐますね。然しそれでは母様はあの人を信用してゐらつしやるのですか？」

「信用してゐるね。」

「よろしい、あなたの方がよく知つてゐらつしやるでせう。然しエウラムビアは私に似てゐます。氣質は私の通りなんです。あの子は荒い哥薩克の血をうけてゐて心は火のやうに燃えてゐるんです。」

「ぢやお前もそんな心を持つてゐると云ふのかね？」

ハルロフは返事をしなかつた。短かい沈黙があつた。

「何うするおつもりなの、マルチン・ペトロウイツチ、」と母が口を切つた。「何うして魂を救はうと思つてゐるの？ ミトロフアンかキエフルでも行くつもりなの、それとも近いからオブチンの野にも行くつもりなの？ 何でも彼處には尊といお坊様が現れるさうだよ……マカリーと云ふ名でね、その人のやうな人を憶えてゐる者は一人も無いさうだ！ そして其のお坊様はどんな罪でも残らず見破つてしまふさうだよ。」

「あの子が本當に有難いと思つてゐないと云ふことが解れば、此の手で殺して遣つた方が増しです！」とハルロフが皺涸聲で云つた。

「まあ何を云ふんだ！ 罰が當るよ！ 考へてからお言ひなさい！ 云はない事ぢやない、此間こゝに相談に來た時に、妾の云ふことをよく聞いてくれ、ばよかつたんだが？ 御覽よ今になつては自分の魂のことなんか考へないで氣を揉むばかりしてないで！ お前は何にもならないのに自分で一人苦しんでゐるのだ！ さうだ！ 今になつてお前は愚痴をこぼして落膽してゐるのだ……」

この叱責はハルロフの胸を刺した。彼の昔の自負が一時に頭を持ち上げて來た。彼は體を揺すつて頭

を突出して難かしい聲で云ひ出した、「私は愚痴をこぼしたり落膽したりするやうな男ぢやありません、奥様。たゞ抱の恩人として、たゞ私が尊敬してゐる人として自分の感じを正直に申上げたゞけなんです。然しこの地球が紛微塵に碎けても私が一度云つたことは取消もしなければ……（鼻息を吹いて）自分が遣つたことを失望したり後悔したりすることもしないと云ふことは（こゝで彼は頭の上に手を高く上げて）神様だつてよく知つてゐらつしやいますよ！ 私の仕たことは確によかつたのです！ 娘達も勤めを忘れることはありませんまい、何時までも、何時までと！」

母は耳を塞いで、「まあ何うしてそんな喇叭のやうな大きな聲をするんです！ 本當にそんなに自分の家の者を信じてゐるのならそれでいゝぢやないか！ ほんとにこの人は妾の頭に渦を巻かせてしまつた！」

マルチン・ペトロウイツチはそれを謝した後二度溜息をして黙り込んだ。母が再びキエフや、オブチンの野や、僧マカリーのことを繰返すと……彼も同意して、何うしても……何うしても……左様して……魂……これだけの事を云つた。そして歸る時まで氣を晴らさずじまつた。始終手を握つて拳を拵へてみたりまた開いて掌をしげく眺めたりした。そして彼が何よりも恐れる事は後悔せず、に打撃の爲に死ぬることだと云つた。怒りは血を悪くしてそれが頭に上るから最う怒らぬことと決心

したと云つた……それに最う萬事を人に任せてゐるのだから何うして怒る事があらう、他の人に勝手に怒らして血を悪くさせて置けばいい。

歸る時に彼は妙に悲しさうな何ふやうな目付で母の顔を見入つた……と唐突に彼は自分のポケットから「労働者の暇な時」と云ふ本を手早く出して母の手に握らした。

「これは何？」と母が訊ねると、

「読んで下さい……此處を」と急いで云つた。「角を折込んで死のことが書いてある處を。なか／＼よく書いてあるやうですが私にはさつぱり解らないのです。あなた解いて聞かして下さいませんか奥様？ またやつて來ますから其の時間かして下さい。」

かう云ひ残してマルチン・ベトロウイッチは出て行つた。

「あの人も困つたことだ、あの人も困つたことだ、」と彼が戸口を出ると直ぐ母が云つた。そして「暇な時」を読み始めた。ハルロフが折つた頁には次のやうな言葉が書いてあつた。

「死は自然の大きい嚴肅な働きである。死は靈魂と云ふものが、靈魂を押へ従つてゐるものゝ要素よりも、否、雷氣そのものゝ力よりも、一層軽く、立派で、限らないほど透明であるから、化學的に純化されて、それ自身の住むべき平等に精神的な永住の場處に達するまで向上せんとする努力に他なら

ないのである……」云々。

母は其處を二度繰返して讀んでから「プー！」と云つて本を投出した。

それから三日後に母の姉妹の夫が死んだと云ふ知らせがあつたので、私は母に連れられて其の叔母の住む田舎に行つた。母は其處に一ヶ月逗留するつもりだつたのだが、とう／＼秋の末まで逗留してしまつて、私たちが家に歸つたのは早や九月も残り少なくなつた頃であつた。

十六

召使のプロコフイが私を迎へて第一に告げたことは（彼は立派な獵師を以て自ら任じてゐた）素晴らしく澤山の鶴が飛んでゐて殊にイエスコヴォ（ハルロフの領地）の邊の赤揚の林には殆ど群をなして集つてゐると云ふことであつた。食事の刻限にはまだ三時間を餘してゐる。で私は早速銃と獲物袋を取り出しプロコフイとセッター種の犬を連れてイエスコヴォの林に急いだ。其處には實際素晴らしく澤山の鶴がゐて、私たちは三十發ばかりで五羽を殺すことが出来た。獲物を持つて家に歸りかけると路傍で一人の百姓が耕やしてゐる。その百姓は自分の馬が動かなくなると酷い罵りを浴せながら綱の手綱で横に向ひた馬の首を無慘に引つた。氣を止めてよく其の可愛さうな馬を見ると、筋骨

が數へられるほど腹せてゐて汗びつしよりになり 鍛冶屋の風櫃のやうに頻りに不規則な激しい息を吐いてゐた。私は其の馬の肩にある傷痕を見てすぐにそれがマルチン・ペトロウイチに長い間使へた老鷹の馬だことを知つた。

「ハルロフは生きてゐるか？」と私はプロコフに訊ねた。餘りに獵に氣を取られてゐたので其時まで他の話をする暇がなかつたのである。

「生きてゐますよ、何うしてよ？」

「だつてありやハルロフの馬だらう？ 賣つてしまつたのか？」

「そりやハルロフの馬は馬なんですがね、賣りなんかしやしませんよ。皆んなが取つて百姓に渡してしまつたんです。」

「何うして取つたの？ ハルロフが許したの？」

「許すも許さんもあつたもんぢやないんです。あなたのお留守の間に大分様子が變りましたよ、」とプロコフは私が吃驚する顔を見てかすかな微笑を漏らしながら、「お氣の毒なことです！ 今ぢやスレトキンが主人になりましたね、誰彼の容謝なく命令するのです。」

「だつてマルチン・ペトロウイチがゐるぢやないか？」

「なあに、あの人は最う此處では一番つまらない人になつてしまひました。あの人は麵麴と水で生きてゐるのですよ——それで萬事は解りませう？ 皆んなであの人を何うにも斯うにもならぬやうにしてしまつたんです。まあ見てゐて御覽なさい、今に家からあの人を追出しますよ。」

あんな巨人を家から追出すなんて事は私の夢にも考へたことのないことであつた。暫くして私が訊ねた、「ジトコフは何と云ふだらう？ あの人は二番目の娘と結婚したのだらう？」

「結婚？」と言葉を受けてプロコフは顔を崩して笑つた。「皆んなはあの人を家に入れさせないのです。お前に用はないから勝手にしろ」つて云ひましてね。先つき云ひましたやうにスレトキンが采配を振つてゐるのです。」

「然し二番目の娘は何う云ふだらうか？」

「エヴラマビアですか？ あゝ、坊様、それはね……しかしあなたはまだお若いから——その事を考へなくちや。此處では萬事が何もかも……おゝ……おゝ……おゝ……おゝ……おや！ ……デイアンカが狙つてゐますよ！」

實際私の犬は路傍の狭い谷に覆ひかぶさる深い樫の繁みの前に立止つてゐた。プロコフと私が犬の傍に馳寄ると繁みから鶉が飛出したので直ぐ二人でそれを撃つたのだが逃してしまつた。私たちは

他の場處に逃込んだ其の嗣の後を追つた。

家に歸つてみると早や食卓の上に汁が出てゐた。母は私は叱つた。そして不機嫌らしい聲で「何うしてそんな事をするのですか？ 歸ると早々御飯時に皆んなを待たせるなんて。」と云つた。私は自分が獲つた鵜を出したが母は見向きもしなかつた。部屋には「片見」、ヘヴィチンスキー、それからシトコフもゐた。この退役の少佐はまるで小學校の生徒のやうに面目なさうに隅の方に小さくなつて、きまり悪るいやうな怒つたやうな顔附をして、眼を赤くしてゐた……今まで泣いてゐた形跡がありくと見えた。母の機嫌は何うしても直らなかつた。機嫌が悪いのは私の歸りが遅かつたからではないと云ふことは直ぐ私にも感づかれた。母は食事中も減多に言を云はなかつた。少佐は時々哀願するやうな目附で母を見てゐたが、それでも澤山物はよく食べた。「片見」は振ふばかりしてゐた。リヴィチンスキーは例の落着き拂つた態度で濟ましてゐた。

「ウイケンテイ・オシビツチ」と母はクヴィチンスキーに話しかけた。「明日マルチン・ペトロウイツチの處まで馬車を遣つてお呉れ、あの人は最う馬車を持つてゐないそうだから。そして妾が是非會ひ度いから何うしても來るやうに頼んでお呉れ。」

クヴィチンスキーは何か答へかけたが、思ひ返して口をつむいだ。

「それからスレトキンにね、妾の前に出るやうに云附けてお呉れ……解つたか？ ……妾のい……いひつけです！」

「それがいゝです……あの悪黨を——」と云ひかゝるジトコフを母は凝と輕蔑するやうに睨んだので彼はすぐ顔を素向けて黙つてしまつた。

「解りましたか？ 私の云附けです！」と母が繰返すと、

「承知いたしました、奥様」とクヴィチンスキーが恭々しく應應に答へた。

食事がすんで一同が食堂を出る時に「片見」が私に斯う囁いた。「マルチン・ペトロウイツチは來やしませんよ！ あの男が何うなつたか今に解ります！ 吃驚する他はないです！ 何んな事を云つてもあの男には一口も解らないのですからね！ さう、まあ又把の下の蛇なんですよ！」

かう云つて「片見」は厭らしい高笑をするのであつた。

十七

「片見」の云つたことは本當だつた。マルチン・ペトロウイツチは遣つて來なかつた。母はそれに満足しないで手紙を書いた。それに對する彼の返事には四角な紙片に次のやうなことが大きな字で

書いてあつた、「本當に行かれません。私は恥をかきながら死ぬるでせう。私をこのまゝにして置いて下さい。有難うございます。私を嗜めないで下さい——マルチン・ハルロフ。」スレトキンは来るには来たが母が「云附け」た日ではなくて、それより二十四時間遅れて来た。母は彼を自分の居間に通させた……何事が其の會見で話されたかは神より他に知るものはあるまいが、それは餘り長い時間は取らなかつた。十五分以上は取らなかつた。母の居間から出て来たスレトキンは意地悪さうな嫌な傲慢な顔を眞つ赤にしてゐたので、客間で出會つた私は吃驚して固くなり、「片見」はげら／＼笑つてゐたのだが黙つてしまつた。母も顔を赤くして出て来た。そして一同のゐる前で、今後どんなことがあらうともスレトキンには會はない、それからまたマルチン・ペトロウイツチの娘達が無遠慮に——あの人達は鐵面皮だからと母は云つた——會ひに来ては入れないと云つた。食事の時に唐突に母は斯う云つた、「忌はしい小さい猶太人！ あれを溝から拾ひ上げて一人前にして、何もかも、何もかも私が仕てやつたのに——その私に向つて自分方の事に口を出して呉れるな！ マルチン・ペトロウイツチは斑氣で移り氣、とても機嫌なんか取れない！ 機嫌なんか取れない、本當に！ 何と云ふことを云ふのだらう！ あゝ、思知らずの傲慢な小さい猶太人！」

丁度其の場に来會はせてゐたジトコフ少佐はこの機會を握つて口を出すのは神様のお志と考へて口

を出しかけたが、母がすぐ其れを遮つた。「お前もまた立派な人だ！ 士官ともあらうものが一人の娘の上手に出ることが出来ないなんて！ 軍隊にゐた時には何んなに兵隊が云ふことを聞いたのかしら！ この人が執事になつたら立派な執事になれるだらう！」

食卓の一番隅に座つてゐたクライチンスキーが人の悪さうな微笑を漏らした。可愛さうなジトコフは鼻鬚を振つたり、眉を釣上げたり、ナプキンに毛深い顔全體を埋めたりするより他に何事も爲し得なかつた。

食事が済むと彼は例の如く煙草を喫ふためにパイプをくわえて入口の階段の處に出たが、その様子が餘りに哀れで物淋さしうだつたので、何日もは彼を好かない君も此の時ばかりは直ぐ彼の傍に近づいた。

「何故なの、ガヴリラ・フェドリツチ」と私は遠廻りをしないで訊ねた、「あなたとエウラムビアの仲が破れたのは？ 私はとうに結婚しのかと思つてゐた？」

退役の少佐は力のない眼を私に注いだ。

「草の中の蛇か」と彼は一言一言に恨めしさうに力を入れて云つた、「毒の牙で私を刺して一生の望みをまるで灰のやうにしてまひました。私は彼奴の恐ろしいたくらみをみんなお話ししてもいゝのです」

ね、坊様、あなたのお母様が御立腹なさると思ふんですよ。「あなたはまたお若いから」——このプロコフイの言葉が私の頭に閃いた。まあ——ジトコフは唸つた。

「勘忍だ……勘忍だ……勘忍さへしてゐればいゝのだ。(彼は握拳で胸を叩いた。)勘忍だ、昔の軍人、勘忍だ。私は皇帝に忠實に……立派に使へました……本當です。あの時は血も汗も惜みはしなかつた。今は斯んな事になつてしまつた。若しこれが聯隊のことだつたら——そして私に振掛つたことだつたら、」と云つて暫く黙つて櫻のパイプを烈しく喫つて、「私は……私は劍の背で彼奴を……三度ばかり……存分に撲つて遣るのですが……」

ジトコフは口からパイプを取つて、自分が想像で描出した繪に見惚れるやうに凝と空間に眼を据えた。

やがて「片見」が遣つて来て少佐を嘲弄しはめた。私は其場をはすした。そして何んな事があらうとも私自身の眼で一度マルチン・ペトロウイツチを見ようと決心した……私の子供らしい好奇心は少なからず動かされてゐたのであつた。

十八

其の次の日に私は銃を手に犬を連れて、プロコフイは伴はないで一人コスコウオの林に出かけた。二はよく晴れてゐた。私は露西亞の他で斯んな日を九月に見ることは出来ないと思ふ。百歩離れた乾草の上を飛ぶ栗鼠の音さへ聞える静かさであつた。幽かに梢に囁れながら軟らかい草の上に落ちる小枝の音さへ聞える静かさであつた——其の小枝は永却に其處に横たはつて動くことなく静に朽ちてゆく。暑くも寒くもない香ばしい、鋭どいやうな空気は微かに心地よく眼や頬を刺す。真ん中に白い玉のある長い蜘蛛の網は絹糸のやうになよ／＼と滑らかに漂つて、私の銃の臺尻に密着しては空中に眞つ直ぐに伸びる——當分氣づかひのない暖い天氣の兆だ。太陽はさながら月のやうに軟らかく輝いてゐる。私は鶴は度々見たのだが、そんなものには氣も止めなかつた。私は林が殆どハルロフの家の庭の籬のそばまで續いてゐるのを知つてゐたから其の方格に足を向けた。向けるには向けたが何うして家の内に這入つたらいか、また母が其の新しい主人を面白からず思つてゐるのに私が其の家に出かけて行つてもいゝものだらうかは自分にも解らなかつた。程遠からぬ處に人の氣合がした。私は耳を澄ました。……林の中を誰かと近づいてゐるらしい……眞つ直ぐに私の方へ。

「遠慮なしにさう云つてしまへばいゝのですよ、あなた」と女の聲。
すると他の男の聲で、「考へてみたまへ、一時にそんな事が出来るか何うか？」

私は其の體を知つてゐた。色づいた實のなる繁みの間から女の青い着物がちらと見えて、其の傍には黒い豊かな服の姿が立つてゐる。次の瞬間——木立の間の私から五歩離れた處にスレトキンとエウラムピアが姿を現した。

狼狽たのは二人だ。突嗟にエウラムピアは後返りして繁みに身を隠した。スレトキンはちよつと考へて聽てつかくと私の方に歩み寄つた。其の顔には四ヶ月前ハルロフの庭先を歩きながら私の馬の馬銜を撫でゝゐた時の猫を冠つた優しさもなかつたが、それかと言つて昨日母の部屋の入口で私を驚かした傲慢な影もなかつた。何時ものやうに白くて美しかつたが、一層廣々と一層しつかりした處があるやうに見えた。

「何うです、鶉が澤山とれましたか？」斯う云つて彼はにこくと帽子を取つて黒髪を撫でた。「私方の林で撃つてゐらつしやるのですね……何卒御遠慮なく。御邪魔なんかしませんよ……その反對です。」

「今日は一羽も獲れないんだ。これから直ぐお前方の林から出るよ、」と私が答へた。

スレトキンは急いで帽子を冠つて、「何故です？ 私は追出しやしませんよ——よくおいでになりませしたね……此處にゐるエウラムピアだつて左様思つてゐるんです。エウラムピア此處において何處に

隠れてゐるんだ？」エウラムピアは繁みの蔭から顔を出した。然し此方には遣つて來ない。彼女は今までより美しくなつて、一層背が高く大きいやうに見えた。

「本當のことを云ひますが、私はあなたにお會ひしたのを非常に悦んでゐるのです。あなたはまだお若い、それでも最う充分良い考へを持つてゐらつしやいます。昨日お母様は私を大變怒つてゐられた——私が道理を話しても聞いて下さらないのです。けれども私はあなたの前で、神の様に立つたやうに、自分は少しも悪くないんだと云へるのです。マルチン・ペトロウイツチは全く老考てゐるんですから、あゝするより他に仕方がないんです。あの人の斑氣を一々機嫌取つて行くなんて事は誰とだつて出来つこありませんから、實際。それでも私たちは出来るだけあの人に尊敬を拂つてゐるので、エウラムピアにだつて聞いて御覽なさい。」

エウラムピアは凝としたりたまゝ何時もの嘲るやうな微笑を唇のあたりに漂はせて、親しみを見せぬ大きな眼で此方を見詰めてゐた。

「だつて何うしてお前はマルチン・ペトロウイツチの馬を賣つてしまつたの？（百姓のものになつてゐたあの馬のことがひどく私の頭に刻まれてゐたのだ。）

「何うしてあの馬を賣つたかと仰つしやるのですか？ なあに、困つたことには——一体あの馬が何

の役に立つんです？ たゞ無闇に喰ふばかりしてゐるんですが、百姓の處に行けば兎に角、田を耕して働きます。若しマルチン・ペトロウイッチが何處かに出かけ度くなつた時には私たちに左様云ひさへすればいいのです。私たちは何處へだつて連れて行つて上げますよ。休日には私たちは大悦びです。」

「ウラジミル・ワシリエウイッチ」と彼方に連れて行かうとするやうに嘔聲でエウラムビアが呼んだが彼女も身動きはしないで、草の莖を指に巻附けて額を巾切つては叩き合はせたりしてゐた。

「小僧のマキシムカの事だつて左様です」とスレトキンは話を續けた。「マルチン・ペトロウイッチは私たちがあれを取つて奉公さしたと云つて不平を云ふのですか、まあよく物事を考へて御覽なさい。マルチン・ペトロウイッチの傍にゐて何をする事があるのです？ あの人は死ぬるだけなんです。またあの人の仕事さへ出來ない程若くて馬鹿なんですからね。それで今は馬具屋に奉公さしてしまつたんです。多分良い職人になるでせう——自分でもあの仕事で良い事にありつくでせう——そしてまた此方に贖身金を寄越すのですからね。何しろ私たちが今やつてゐますやうに細く暮して行くのが大切なことなんです。私方のやうな小さい畑を持つてゐるだけぢや、何うしても小さい事でも逃がさないやうにしくちやならないんです。」

私は心の中では、「マルチン・ペトロウイッチが可愛さうな馬鹿」と云つたのは此の男のことか、」と思つたが、口に出しては、「ぢやこれからは誰がマルチン・ペトロウイッチに本を讀んで聞かせてやるの？」と訊ねた。

「なあと、讀む本があるものですか？ 尤も一冊ありましたがね——幸ひ何處かへ紛れ込んでしまひました……またあの年で本を讀んだつて詰りませんからね。」

「ぢや髻は誰が剃つて遣るのす？」

スレトキンは面白い冗談に調子を合はせるやうに笑つて、「なあと誰も剃つて上げないのですよ。初めは蠟燭の火で髻を焼いてゐましたがね——今ぢや生え次第に放散らかしです。その方が立派ですよ。」

「ウラジミル・ワシリエウイッチ！」エウラムビアは質濃く呼ぶ、「ウラジミル・ワシリエウイッチ！」スレトキンは手を振つて女に見せた。

「マルチン・ペトロウイッチは私たちと同じ物を食つて、着物を着せて貰つたり世話をして貰つたりしてゐるんです。其の他に何の不足があります？ あの人は自分の靈のことを考へるより他に此の世に何の望みもないと云つてゐます。たゞあの人があなたのやうに最う何もかも今は私たちの物だと

云ふことをわきまへて呉れるといふのですかねえ。あの人はまた私たちが時定の金を拂はぬと云つてゐるのですよ。そんな事を云つて私たちが何時も金を持つてゐる譯ぢやありませんし、また何不足なしに暮してゐて何うして金が要るのです。それに私たちが家族の一人として待遇してゐるんですよ。私は本當のことを申上げてゐるんですよ。例へばあの人に上げてある部屋だつて御覽なさい——あの部屋は大切なんですよ！ あの部屋なしには何處へも廻られないのですが一言も苦情を云はずに上げてゐるのです。慰みの事だつて考へて上げてゐますよ。さういふ、聖ペテロの目でした、町で上等の針を買つて来て上げたんです——本當の英國製の高い釣針なんです。私方の池には澤山鯉がゐますからね、あの人に釣をさせると一時間か二時間の中にちよつとしたおいしい汁が出来るんです。年寄には一番いゝ仕事なんです。

「ウラジミル・ワツリエウイツチ！」と鋭い聲で川度目にエウラムピアが叫んだかと思ふと、指に巻き附けてゐた草を遠方に抛投げて、「妾行きますわ！」と云つた。彼女の眼と私の眼が出會つた、「妾行きますわ、ウラジミル・ワツリエウイツチ！」かう云つて彼女は繁みの向ふに姿を隠した。

「すぐ行くよ、エウラムピア！」とスレトキンは後から喚いて、「マルチン・ペトロウイツチも今ちや得心が行つたらしいです。」とまた私の方に向直つた。「無論最初の中は怒つてあなたにもお解りです。」

うが思ひ切つて苦情も云ひました。御覽の通りあの人は随分疍癩持ちですから氣の毒なものです！ 然し今ちやおとなしくなりましたよ。あの人がだつて自分のことも考へますからね。あなたのお母様はまあ——本當に！ 随分私を責められました！……實際あなたのお母様はマルチン・ペトロウイツチと同じ様に自分の考が一番いゝと思つてゐらつしやる人なんです。あなたも折があつたら申上げて下さい。そりや私だつてあなたのお母様の御恩は忘れやしませんかね、然し私も矢張り生きて行かねばなりませんからね。」

「そしてジトコフは何うして断はられたの？」と私が訊ねた。

「フエドリツチですか？ あの馬鹿ですか？」とスレトキンは肩を揺すつた。「なあに、全體あんな男が何になるのです？ 一生軍隊にばかりゐて——今になつて畑を作りたいと云つたつて。あの人は人を使ひつけてゐるから百姓でもよく従はせてみせると云つてゐます。ところが何も出来ないんですよ。人を使ふのだつて多少頭が要りますからね。エウラムピアは自分である人を断つたのです。全く不適當な人なんです。あんな人に任せて置くと私の内の畑がまるで潰れてしまひますよ！」

「おゝい！」エウラムピアの音楽的な聲が聞えた。

「今行く！ 今行く！」とスレトキンが聲の方に向いて喚いた。彼は私の前に手を差伸べた。氣は進

まなかつたが私はその手を取つた。

スレトキンは白い齒並をまるで見せながら云つた、「ちや失禮いたします、ドミトリ・セミヨノウイツチ、林にゐる鶴は誰のものでもありませんから幾らでもお撃ちなさい。然し兎が出ましたら——獲らないで下さい、私方のですからね。えゝと、それから、あなたの犬は仔を生まないでせうか？ 私も一つ欲しいのですがー」

「おゝいー」とまたエウラムピアの聲が叫んだ。

「おゝいー」と答へてスレトキンも直ぐその中に姿を消した。

十九

今でも憶えてゐるが私は其時一人で残されると、何うしてハルロフは何時か云つてゐたやうにスレトキンをジェリーに詰込まなかつたのだらうか、またスレトキンにしても何うして其んな運命を恐れなかつたのだらうかと、頻りに不思議がつたものだ。私は屹とマルチン・ペトロウイツチが「おとなしく」なつたのだと思つた。そして是非ともエスコウオに行つて、私の頭の中に折れて素直になつた人としては何うしても描くことの出来ぬあの巨像を、一眼でもいゝから見たいと思ふやうになつ

た。私が林の端に着いた頃、突然大きな鶴が足元から恐ろしい羽ばたきをして飛出して、深い繁みの中に逃げて行つた。狙つて撃つたが當らない。私は口惜しくてたまらなかつた。好い鳥だつたので最一度探してみることに決心した。その鳥の飛去つた方格に向つて二百歩ばかり林の中に這入つた時であつた、——枝の垂れ覆さつた赤楊の下の空地に——私は鶴ではない先つきのスレトキンをまた見出した。彼は両手を頭の下にして仰向けに轉び、右の膝の上に組んだ左足を揺るがせながら満足げな微笑を浮べて空を見入つてゐた。私が近づいたのも知らないのだ。彼から二三步離れてエウラムピアが伏目になつて狭い空地を靜かに彼方此方歩き廻つてゐる。その様は草の中に草か何か探してゐるやうで時々俯向いては手を伸ばしてゐた。彼女は低い聲で歌つてゐた。私は直ぐ立止まつて耳を澄ました。初めの中は何を歌つてゐるのかさつぱり解らなかつたが、聴てそれは次のやうな古い有名な民謡の一節だとはつきり知れた。

「此處だよ、此處だよ、嵐の雪よ、

わたしの爲に男を殺せ、

わたしの爲に姑を打て、

若い妻だきやわたしが殺すー」

エウラムピアの歌の聲は段々高くなつて、最後の言葉などは妙に力を入れて歌つた。スレトキンは矢張り仰向けに轉んで笑つて居り、女は相變らず彼の周圍を歩き廻つてゐた。

と暫らくして男が云つた。「おゝ、まつたく誰かゞ實際に考へさうな事だね！」

「なあに？」とエウラムピアが訊ねた。

スレトキンはやゝ顔を起して、「何うだつてお前の歌つた文句はありや一體何だい？」

「だつて文句を抜いちや歌へないわ、ワロージャ、」とエウラムピアが答へた時、ふと彼女は此方に振り向いて私を見た。私たちは兩方とも聲を立てゝ叫び、瞬間に反對の方に向つて走り出した。

墓地に林を抜け、細い切開いた地帯を横切つた時に、私はハルロフの家の庭先に立つてゐた。

二十

私は自分が見たことを細かく考へる時間も持つてゐなかつたし、また考へたつて仕様のないことだつたけれども私が先つき聞いた「戀の呪文」は絶えず頭に甦つて來て、私はその意味をいろ／＼と考へてみた。庭の柵に沿つて少しばかり行くと白楊の木立（その白楊の葉はまだ一つも落ちないで豊かに繁つてきら／＼輝いてゐた）の向ふにマルチン・ペテローウイッチ方の二つの小さい家と空地が見え

た。私は先づそのきちんと格恰よく片付いてゐるのに打たれた。何を見ても其處に行きとゞいた嚴格な監督振りの跡があり／＼と讀まれた。やがて入口の石段の處にアンナの姿が現はれて、青味が／＼つた灰色の眼を細めて長い間林の方を眺めてゐた。

「お前旦那を見なかつたかい？」と庭を歩く百姓に彼女が訊ねた。

「ウラジミル・ワシリエウイッチですか？ 屹と林の方に行かれたんですよ。」

「林に行つたのは知つてゐるんだが、まだ歸られないかい？ お前會はなかつたかい？」

「いゝえ……會ひませんよ。」

百姓は帽子を冠らずにアンナの前に佇んでゐた。

「よろしい、行つてもいゝ、いや——ちよつとお待ち——マルチン・ペテローウイッチは何處にゐるの？ 知らない？」

「おゝ、マルチン・ペテローウイッチですか、」と百姓は歌でも歌ふやうな聲で答へて左の手、次に右の手を上げて何處かを指差すやうな身振をした。「釣竿を持って此處の池の傍に座つてゐられますよ。蘆の中に座つて、竿を持つてね。多分魚でも釣つてゐらつしやるのでせう、何うしてゐるのかさつぱり解りませんや。」

「よし／＼……行つてもよろしい。それからあの車の輪を片付けて置いてくれ、邪魔になるから。」
 百姓は直ちに云附かつたことをする爲に走りだした。彼女は暫く階段の上に立つたまま、林の方を眺めてゐたが、颯々とした音で嚇しつけるやうに一方の手の券を握つて靜かに家の中に姿を隠した。と拵走つた彼女の聲で「アクシュートカー」と叫ぶのが聞えた。

アンナは何時もの薄い唇を疳癩まざれにぎつと結んで怒氣を含んでゐた。だらしのない着物の着方をして、巻いてあつた髪は亂れて肩に垂れ懸つてゐた。けれども私には、彼女が身なりにも構はず、またむしやくしやと怒つてゐたにも拘らず、何時かのやうに魅惑を持つて感じられた。そして焦々と二度ばかり亂髪を掻上げた時の彼女の細くて意地悪さうな手は、私も喜んで接吻したであらう。

二十一

「マルチン・ペトロウイッチは本當に釣りをしてゐるのだらうか？」こんな疑惑を抱きながら私は庭の一方にある池の方に足を向けた。私は土堤に上つて四方を見廻した……マルチン・ペトロウイッチの姿は何處にも見えない。暫らく池の土堤を歩いてその一番高い處に來た。時池が入江になつて赤い蘆が倒れて平らになつてゐる處に、私は灰色の大きいものを見た……私は凝と目をこらした、其

れがハルロフであつた、帽子も冠らず頭の髪をおさ／＼亂して、縫目のほころびたルバシニカを着て、地べたの上に足を組んで身動きもせずに座つてゐる。私が近づくと林から二歩ばかり離れた乾いた泥地から千鳥が立つて、小さい羽でひゆうと音を立てながら水面を掠めて飛去つたが、それを見ても長い間その鳥を何物もおびやかさなかつたと云ふことは解つた。ハルロフは全體の様子が餘り變なので私の連れてゐる犬は彼を見るや否や立止つて尾を上げて唸り出した。彼は少し顔を振向けて荒々しい眼を私と犬に注いだ。短かくはあるが豊かにちぢれた、アストラハンの毛革のやうな白っぽい髯の爲に顔附はすつかり變つて見えた。右の手に持つた竿の先は水の上で微かに動いてゐる。私は胸がどきつとした。勇氣を出して彼の傍に行つてお早やうと云ふと、彼は今日を覺したばかりのやうにゆつくりと隣きをした。私は云つた。

「何うしてゐるの、マルチン・ペトロウイッチ、此處で魚を釣つてゐるの？」

「えゝ……魚、」と皺涸聲で答へて彼は針の着かぬ一間ばかりの絲のついた竿を上げた。

「それは毀れてゐるぢやないか、」と私は云つたが見れば彼の傍には餌を入れる器の影も見えない……それに九月に釣をして何が取れよう！

「毀れてゐる？」と云つて彼は顔を撫でて、「同じことだ！」

彼はまた絲を垂れた。

私は何うしたらよからうかと、おどろししながら彼を見詰めてみると、二分ばかりたつた後に彼が口を開いた。「ナターリア・ニコラエウナの息子さん？」彼は恐ろしく瘦せてはゐるがそれでもまだ巨人たるを失はなかつた。然し其の着物の見すばらしいこと！よく破れてゐること！

「左様だよ、私はナターリア・ニコラエウナの子だよ。」

「あの人は無事？」

「お母様は無事だ。お前が来ないと云ふので大變心配してゐらつしやるよ。お前が来ないだらうとは思はなかつたからね。」

マルチン・ペテロウイツチは顔を胸に埋めた。

「彼處に行きましたか？」と云つて彼は顔を動かした。

「何處？」

「彼處、家。行かなかつたのですか！お行きなさい！此處に何用があつて来るんです？お行きなさい！私に話したつて仕方は無い。私は嫌ひだ。」

彼は暫く黙つてゐた。

「何時も腰砲を持つてのらくらしてゐるんですね！私も若い時分には左様し度かつたものだ。然しお父様は嚴格な人で私が云ふこと聞かないと承知しないんです。今頃のお父様とはまるで違つてゐましたよ。馬の鞭で叩くのですから何うしても根性が入ります！それでのらくらするのは止めてしまひました！だからお父様を崇めました……あゝ……本當に……」

彼は沈黙した。やがてまた口を開いて、「此處に来ないで家の方においでなさい。何もかもよくなつてゐますよ。ワロートカは……此處でもよつと言葉を切つて、「うちのワロートカはなか／＼旨く遣ります。立派な奴だ！實際！それでまた立派な悪黨だ！」

私は何と云つていゝか解らなかつた。マルチン・ペテロウイツチの言葉は極く靜かだつた。

「行つて娘達にお逢ひなさい。私が娘を持つてゐるのを憶えてゐませう。あの娘達も家の差圖を遣りますよ……立派に。然し私は最う年が寄りました、坊様、最う隠居です。休む時が来たんです……」

私は周圍を見廻しながら、「いゝ休み方だ」と思った。

「マルチン・ペテロウイツチ！私方に來て皆んなに逢つてくれなきやいけなさいよ。」

ハルロフは私に眼を呉れて、

「彼方に行つて下さい、お願ですから。」と云つた。

「お母様の感情を害しちやいけな。4520」

「彼方に行つて下さい。何用があつて私に話かけるのです？」

「若しお前が馬車を持つてゐないのなら、お母様のを送つて上げるよ。」

「彼方にお行き！」

「だつて本當に、マルチン・ペトロウイッチ！」

「ハルロフはまだ俯向いたが、其の土のやうに汚れた頬は微かに赭くなつたやうに思はれた。

「本當においで、ね、斯んな處に座つてゐて何になるんだ？ 自分で自分を辱めて何になるんだ？」

「自分で自分を辱める？」と彼は口籠つた。

「あゝ、本當だよ——自分で自分を辱めてゐるのだよ！」

ハルロフは何も云はないで瞑想に耽りだした。彼が黙つたので私は勇氣を得て、正面から明らかに喰つて懸らうと決心した。(私がまだ十五歳だつたことを忘れてはいけな。)

私は彼の傍に腰を卸して云つた。「マルチン・ペトロウイッチ！ 私はちやんと何もかも知つてゐるよ。お前の娘の婿が、娘と一緒になつて何んなにお前を取扱つてゐるか知つてゐるよ。そして今こんな境遇になつてしまつて……然し落膽することはないよ。」

ハルロフは矢張り黙り込んだまゝ釣を垂れてゐる。私は何と云ふ小賢い男だらう、何と云ふ哲人だらうと自分で思つた。

「無論何もかも娘さんに遣つてしまつたのはお前が無考へだつたの。だけれどもお前の方では氣の大きい處直を取つたわけだからそれをとかめはしない。今頃はそんな心を持つた人は少ないものだ！ けれどもお前の子がそんなに我儘になつたのなら、お前だつて輕蔑——左様だ、輕蔑して遣るのが當り前だ。……氣を揉むことはない、——」

「解つた！」唐突にハルロフが齒を喰しはつて、池を見詰める眼を荒々しく光らせながら云つた……

「彼方に行つて下さい！」

「だつてマルチン・ペトロウイッチ、——」

「彼方に行つてお呉れ、お願ひだから……殺すぞ！」

私は彼のすぐ傍にゐたのだが此の最後の言葉で我れ知らず飛退いた。

「何だつて、マルチン・ペトロウイッチ？」

「彼方に行かんと殺すぞ、彼方に行けい！」ハルロフは喰るやうな荒々しい聲を胸から出した。此方を向きもしないで腹立たしさに正面を凝と見詰めてゐる。「ぐずぐず」云ふと池の中に抛り込むぞ。五

月蝕い、生意氣な子だ！」

「この人は氣が遣つたのだ！」と云ふ考が私の頭を掠めた。

よく氣を附けて見るとマルチン・ペトロローウィッチは泣いてゐるので私は吃驚して石のやうになつた。一滴また一滴、其の睫毛の間から涙が流れて頬をつたふ……顏附は物凄く荒々しい……

「彼方に行けい！ 行かんと殺すぞ！ 他の奴の見せしめの爲に！」

彼は猪のやうに齒を現して體を左右に動かしてゐた。私は銃を引つたくつて飛んで逃げた。犬も吃驚したとみえて、吠えながら私の後について來た。

私は家に歸つてから自分の見た事を見せなかつたが、「片見」に會つた時には——何故左様したのか解らぬが——まるで話してしまつた。憎らしい「片見」は私の話を聞くと頻りに嬉しがつて呻つてみたり笑つてみたり、果ては嬉しきまぎれに小踊りし始めたので、私は撲つて遣り度いほど忌々しく思つた。

「あゝ！ あの瑞典の俄鬼のハルロフを見てやり度いなあ、泥の中に這入んで座つてゐる處を……」と彼は鼻も詰るほど笑ひ轉げながら繰返すのであつた。

「見たけりや池の傍に行けばいゝぢやないか。」

「だつて殺されたら何うします？」

私はひどく不快に感じて悪い時に「片見」に打明けたことを後悔した。……けれども彼から其の話を又聞きしたジトコフは彼とは違つた見方をした。

「巡査を呼んで來よう。」と云ふのが彼の詰論であつた。「でなければ一大隊の兵隊を呼んで來てもいゝ。」

まさか彼が云つたやうに一大隊の兵隊が來たわけではないが、兎に角それから後に大變な事は起つて來たのだ。

三十二

マルチン・ペトロローウィッチに會つてから三週間ほどたつた。十月の中頃の或る日、私は二階の自分の部屋の窓際に立つて、向を考へるともなく驟々としたれ持で向ふの庭や路を眺めてゐた。五六日の間不愉快な天氣が續いて、霧に出来るなどは思ひも寄らぬこと、生命のあるものは皆んな姿を隠し、白雲は早や遠くから影も見せず、僅でさへ物音をひそめてゐた。陰鬱な音を立て、吹く風は時々思ひ出したやうにひゆう／＼と笛のやうに唸つて。一線の光線も漏れて來ぬ低く垂れ籠めた雲は氣味

の無い白い色から次第に鉛色になつて遂には毒々しいまで濃いくなり、小止みなく降りに降りしきる雨は段々勢を増して烈しくなり、消魂の音を立て、頼りに窓硝子を叩く。木と云ふ木は殆ど裸にされて灰色になり、最う盗むべき何物も残つてゐないのだが、それでも風は容赦なく吹き捲つて虐めた上に虐めつける。彼方此彼方に出来た落葉の散り敷く水溜りには大きな泡が消えたり出来たり、飛んだり滑つたりして、泥だらけになつた路は歩くことさへ出来ないほどだ。外の寒さは部屋の内まで浸透して、着物に纏まつても骨身が刺さられるやう。思はずぞつと胴顛ひをする其の気持ちの悪さ！ 左様だ、悲しいのではなくて気持ちが悪いのだ。さながら此の世の中には、日光も、明るい輝きも、色彩も最早やなくなつてしまひ、永劫に雨や、泥や、灰色の濕氣や、冷たい霧ばかりになつて、永劫に風が唸つたり呻いたりするのかと思はれた。斯うして私が鬱陶しい気持ちで窓際に立つてゐると、今でも憶えてゐるか突然急に暗くなつて来た——蒼白いほの暗さだ——時計はまだ十二時を打つたばかりなのに。と、唐突に一匹の熊のやうなものが門から庭を横切つて石段に向つて藪地に飛んで来るのを見た。無論四つ這ひになつてはゐなかつたが、後足で立上つた時の様子は見えた。私は自分の眼を信じられなかつた。私が見たものは熊でないにしても兎に角、大きい黒い、むしゃくしゃしたもので……何だらうかと怪訝に思つてゐると不意に下で烈しく扉を叩く音がする。何だか意外な。恐ろしい

或る物が非常な勢で私の家に轉げ込んだやうに思はれた。それから大騒動が始まつて彼方に走つたと此方に走つたり……

私は急いで下に降りて食堂に断附けた……。

客室の扉の傍に母が私に向つて根を卸したやうに嘔と突立つてゐた。母の後からは五つ六つのびく／＼した女の顔が覗いてゐる。廣間の入口には執事や二人の召使や吃驚して口をあんぐり開けた給仕が立塞がつてゐた。食堂の中央には泥だらけになつて、髪を振亂し、ぼろ／＼の服を着て、濡れ鼠になつて——全身から湯氣が立つて床に滴が垂れる程濡れてゐた——ぶる／＼と烈しく顛えて、死際のやうに喘ぎながら跪いてゐる……それが先つき庭を走る時に私が見た怪物なのだ！ そして此の怪物は誰？ ハルロフだ！ 私は傍に寄つた。顔は見えないで頭が見えた。穢ない髪を両手で掻捲つてゐる。彼は息も断々に烈しく呼吸して、咽喉のあたりに妙な音をさしてゐる——全身穢れた黒い塊の中で小さい白い眼だけがきよろ／＼鋭く周囲を見まはしてゐる。其の物凄いこと！ 私は彼をマストドンに比べた爲に彼に遣付けられた高官のことを思出した。原始時代の沼の永遠の濕地で他の一層強い怪物に責められて逃げて来た洪水以前の動物は實際こんなだらうと思はれた。纏て母は自分の手を握りながら訊ねた。マルチン・ペテロウイッチ！ まあお前か？ おや／＼！ 酷いこと……」

「私……私……」苦しうな一言一言吐き出すやうな聲を私たちは聞いた。「あゝ！ 私です！」

「まあお前何うしたのだ？」

「ナターリア・ニコラーエウ……ナ……私は……家から……真つ直ぐに歩いて……此處まで来ました……」

「こんな泥水の中を！ まあ人間とは見えないよ。起きて兎に角腰をお掛け……そしてお前は、」と女中を振返つて、「早く着物を取つて、おいでお前乾いた着物を持つてゐない？」とオ食司に向いて云つた。

「オ食司はこんな大きな體にはとても合はないと云ふ意を身振でほめかした後……」然し寢床の上被が新しい馬の蔽ひがあるでせうと云つた。

「まあお起き、お起き、マルチン・ペラローウイチ、起きて腰をお掛け、」と母が繰返した。

「マルロフは不意に悲しさうな聲で、」皆んなが私を追出しました、奥様、」と唸つて所を後に振返し兩手を前に伸した。「皆んなが私を追出しました、ナターリア・ニコラーエウナ！ 私の娘が、私自身の家から……」

母は吐息をして呻いた。

「何だつて？ お前を追出した！ 何と云ふ酷い事を！ 何と云ふ酷い事を！」と云つて十字を切つて「だが兎に角お起き、マルチン・ペラローウイチ、お願ひだからね！」

二人の女中が身に纏ふ物を持つて来てマルロフの前に立つた。けれども此の纏ない山の纏なものに何うして手を出していか二人には解らなかつた。「皆んなが追出しました、奥様、皆んなが追出しました！」とマルロフは同じ事を云ひ續けた。オ食司も大きな羊毛の上被を持つて来たが何うしていか當惑して立つた。「片見」の小さい顔が屏の蔭から覗いてもまた隠れた。

「マルチン・ペラローウイチ！ お起き！ 腰をお掛け！ そして試しい事を話しておくれ、」と母は決然とした調子で云つた。

マルロフは起上つた……オ食司が起さうとしたがそれは手を汚したとけで、彼は指を振りながら屏の傍に退いた。よろ／＼とよろめきながら、マルロフは椅子の傍まで歩いて行つて腰を卸した。女中が持つて来た物を出さうとするのを彼は手で拂ひのけて上被を掴んだ。母もそれを強ひはしなかつた。マルロフを乾かすことなどは思ひも寄らぬことである。皆んなは唯いそいで床の汚れた處を拭くだけで満足した。

「何うして皆さんがお前を追出したの？」と暫くして彼が落着くとすぐ母が訊ねた。

「奥様！ ナターリア・ニコラエウナー！」と緊張した聲で彼が云つた——そしてまた私は彼の眼の不安げに動くのに驚いた。「私は本常のことを申しますがね、科は皆さん私にあるのです。」

「あゝ、左様とも、あの時妾の云ふことを聞かなかつたからさ。」かう云ひながら母は腕椅子に深く身を沈めて香水を注いだハンケチを幽かに鼻の先で動かした。ハルロフが放す臭氣が強いからである……森の中の濕地の匂ひだつて斯んなに強くはあるまい。

「いゝえ、私の過失は其處にあつたんぢやありませんよ、奥様、私の自負心にあつたんです。丁度ナウホドノソル皇帝と同じやうに自負心が私の破滅の元だつたんです。私は神様から立派な考へを與へて貰つてゐて、私が思ひついたことは皆正しいのだと思つてゐました。そこで……それから死の恐怖が遣つて來ました。……私はすつかり當惑してしまひました。私は云ひました、「己れは死ぬるまで自分の勢力と力を示してみせる！ 己れ何もかも皆さんに遣る——そして皆さんは生涯それを感謝する……（不意にハルロフは全身を顫はした……）皆さんは穢ない犬を追出すやうに私を家から出しまし

た！ これが皆さんの私に對する感謝なんです！」

「何うして——」と母が云ひかけると……

「皆さんは私の小僧のマキシムカを取りました、」とハルロフが母の言葉を遮つた（相變らず眼をきよろ／＼動かしてつめて兩手の指は組んで頤の下に持つて行つてゐた）、「馬車も取つてしまひました。月々の金も呉れなくなりました。約束の金高を呉れないのです。何もかも取去つてしまつたのです。それでも私は何も云はずに忍びました！ それを忍んだのも矢つ張り……あゝ！ 自負心だつたのです。残酷な敵に『年寄の今になつて後悔してゐるのを見ろ』と云はれたくありませんので、それからまた奥様も、憶えてゐらつしやるでせうが、「其んな事をして何になる、と仰つしやつたことがありませんでしたので、それで私は忍んでゐたのです。……それが今日、私が自分の部屋に歸つてゐましたら他の者の部屋になつてゐて、私の寢臺を物置場に打込んでゐるんです。」あなたは彼處にお休みなさい、彼處に入れて上げるのもあなたを氣の毒だと思つて上げるからです。あなたがゐた部屋はこの家では何うしても要るのですからね。」これを誰が云つたと思ひます？ ワロートカ・スレトキンですよ！ あ

の畜生の犬めが云つたんです！
ハルロフの聲は切れた。

「そしてお前の娘さんは？ 娘さんは何と云つたの？」と母が訊ねた。

「けれども私は何もかも忍んで來ました。またハルロフは言葉を續けた、「苦しくて、苦しくてたまりません。面目がなしに……晝の光も仰がれないほどです！ 私が此處に縋りませんでしたのは、奥様この面目ないと云ふ氣があつたからです。私は親切にしてみたり、愛してみたり、嚇してみたり、まとしてみたり、いろいろにしてみました！ 私は斯うして（と云つて身振で示しながら）……皆んなの前に頭も上げました。けれどもまるで駄目です。私はまるで忍びました。尤も始めの中は變つた考へを持つてゐました。何かまふものか、打殺して遣る。跡に何も残らぬやうに皆んなを片端から打潰してやる！……思ひ知らしてやる！ けれども終ひには私の方が折れてしまひました！ それは私の體には十字架が押かぶさつて、死ぬるの間に間が無いやうな氣がしたからです。それが今日思ひがけなく犬の様に家を追出されてしまつたんです！ 是れも誰の爲！ ワロートカの爲なんです！ あなたは娘の事をお訊ねになりましたねえ、なかに、あいつらには自分の考へと云ふものはまるでないのですよ。皆んなワロートカの奴隷なんです！ 本當に！」

母は膽に落ちかねた様子で誤ねた。

「アンナは左様かも知れない、何しろ妻だからね……けれども妹の……」

「エウラムピアですか？ 彼姉はアンナよりまだ仕様のない奴です！ 彼女はまるでワロートカの手に掛つてゐるのです。だから彼女があなたの軍人を斷つたのです。みんなワロートカの命令なんです。アンナは怒つて妹を許されないのが、當り前なんですが、こらへてゐます！ ワロートカの悪漢が二人を旨く圓め込んだわけなんです。無論アンナはエウラムピアが、あの何時も高慢なエウラムピアが——今彼女が何うなつたか御覽なさいまし……あ……あ……あ……」

母が不安らしい眼附で私の方を見るので、私は追出されぬ用心として少しばかり後に追いた……

母は云つた、「マルチン・ペトローウイツチ、妾が始め手にかけて者がそんなにお前に迷惑かけさしたり悪者になつたりしたのは本當に濟まないねえ。妾もあの人を見そこなつてゐたのだよ……けれどもあの人斯んなに成らうとは誰だつて思はないからねえ。」

ハルロフは胸を叩いて、

「奥様、娘達の恩知らずは許すことが出来ませんです！ 出来ませんです、奥様！ 何もかも遣つたのですもの！ それに私の良心が私を苦めぬくのです。私は池の傍で釣をしながらいろいろのこと……え……いろいろのことを考へました。己れは一生、中に誰かの爲に良い事をしたことがあるか？ 貧乏人を救つたり、百姓に自由を與へたり何かして彼等の生命を換取つた贖ひをしたことがあるか？

彼等の代りに己れは神様の前に出なければならぬ。己れは今こそ彼等の涙の復讐を受けてゐるのだ。」
 そして彼等は今何んな生活をしてゐるでせう？ 私の時代でさへ彼等は深い奈落の底の生活をしてゐたのです——何で私の罪を覆ひませう？——けれども今は最う底が見えぬほどの深さなんです！ こんな罪を私は自分の靈に受けました。子供達の爲に自分の良心を犠牲にしました。その爲に私は嘲けられ、笑はれて、野良犬のやうに家から蹴出されたんです！」

「そんな事は考へるものぢやない、マルチン・ペトロ・ウイツチ、」と母が口を入れた。

ハルロフは新しい元氣を以つて話しを續けた。「そして私が最う私の部屋に住めないと云ふ事をワロトカが告げた時には——自分の手で板をあつた部屋に置いたものですが——彼奴が左様云つた時には——私の頭に何んな考が起つたでせう！ 頭の中には渦が巻いて、心は短刀の様にとがりました……彼奴の咽喉を斬るか、家を飛出すか！……そこで私は此處まで逃げて來たんです奥様、ナターリア・ニコラエウナ……何處にこの頭を横たへる處があつたでせう？ それに雨、泥……私は二十遍も轉びました！——そして今……こんな穢ない……」

ハルロフは自分の風彩をつくく見ながら今にも立上りさうに體を動かした。

母は急いで口を出した。「最うその話はお止し、マルチン・ペトロ・ウイツチ、そんな事が何です？」

床が穢なくなつたのが何です？ そんな事は何うでもいゝのですよ！ さあ、妾の云ふことを聞いて下さい。ね、今部屋と綺麗な寢床を拵へさせるからね——お前、着物を脱いで、よく洗つて、横になつて暫くお休み……」

「ナターリア・ニコラエウナ！ とても眠られませんか！——とハルロフは兎も見もなく答へた。「頭の中で槌が叩いてゐる様です！ 私を！ 役に立たぬ獸のやうに……」

母は質濃く繰返した。「横になつてお休み。それからお茶を上げるからね、——そしてお話をしませう。心配しちやいけな！ 皆んながお前の家からお前を追出したら、妾の家が何時でもお前の家ぢやないか……何時かお前が妾の生命を助けてくれた事があるだらう、妾はあの事を忘れちやゐないよ。」

「奥様！」と唸る様に云つてハルロフは手で顔を隠した。「今度はあなたが助けて下さいませ！」

この言葉は涙ぐませるほど母を感じさせた。「あゝ、いゝともお前、何んな事でもして上げるよ。けれどもこれからは私の云ふことを聞くやうに約束して呉れなくちやいけな！、そして最う恨みがましひことは綺麗に忘れてしまふのだよ。」

ハルロフは手を顔からはなして、「何だつたら皆んなを赦して遣つてもいゝと思つてゐる位です。」と

云つた。

母は領づいた。「お前がそんなに基督教徒らしい氣立になつて呉れたのが何んなに嬉しいでせう！しかしそんな話はまた後ですることにしよう。兎に角着物を脱いで、何よりも寝ることだ。」
「伏食司に向いて」「マルチン・ペトロウイチを主人の部屋だつた緑の部屋に連れて行つてお遣り、そして欲しいと云ふものは何でも直ぐ出してお遣り。この着物を洗濯して乾かさしてね、それから女中から要るだけのリネンを貰つてお呉れ。解つたねえ？」

「はい、承知いたしました。」と伏食司が答へた。

「それから眠てしまつたら仕立屋に寸法を取らしてお遣り。それから髯も剃つてお遣り。今でなくても後でいゝからね。」

「承知いたしました。ちやマルチン・ペトロウイチ、此方においでなさい。」ハルロフは起上つて母の顔を見てその方に行きか、けたが立止まつて上半身をかごめ、聖像に向つて三度十字を切つて伏食司に従つた。私も彼の後から部屋を抜け出した。

二十四

「ハルロフを緑の室に案内した伏食司は寢床に敷布のないのを見て直ぐ係りの女中の處に走つて行つた。途中で出會つて私たちの後をつけて緑の室に顔を出した。「片見」は、ハルロフの周囲を飛んだり跳ねたり、齒をむき出してげら／＼笑つたりした。ハルロフは両手を少し體から離して垂れて、考へに沈んだ顔附をして、室の中央に跨を擡げて立つてゐた。其の體からはまだ滴が垂れてゐた。

「瑞西人！ 瑞西人のハルルス！」と「片見」が横腹を抱へて腰を曲げて奇珍な聲をして云つた。「光荣あるハルロフ家の御先祖様、あなたの子孫を見て下さい！ 何んな様をしてゐるか？ あなたに解りますか？ ハツハツハツ！ あなたのお手をちよいと、なんだ、黒い手套をはめてゐるのですか？」
「私は「片見」が彼を侮辱するのを止めやうとした……けれども其れには餘り遅すぎた。」

「此奴は私を居候だ、罰間だと云つた！」「お前は自分のだと云へる家を持つてゐない」と云つた。だが今度は此の憐れな小さい私と同じやうに此奴も人の厄介になるんだ。マルチン・ペトロウイチと「片見」は同じやうな憐れな罰間になつたんだ。此奴も人の情で生きて行くやうになつたんだ。犬が嗅いでも喰はなかつた干乾びた縋ない麵麩を……此れを食べると云つて突き付けられるのだ。ハツハツハツ！」

それでもハルロフは身動きもせず、頭を引込めて手と足を少し開いたまゝ突立つてゐた。

「家柄の良いマルチン・ペトロウイチー」「片見」は相變らず饒舌り續けた。「此奴は随分意張つたものだ！ 己れを見ろ！ 近づくかと打撲るぞ！ それから自分の財産を分配した時には「満足した」と云つたぢやないか！ ……「満足した」と云つたものだ！ 然し何うして己れにはあんなに吝嗇だつたんだ？ 何うして己れには何も呉れなかつたんだ？ 若し呉れたら己れだつて有難く思つたのだが。己れが云つた通りに皆んなはお前を裸にしてみました。そして……」

「片見！」と私が呼んでみたが駄目だつた。ハルロフはそれでも動かなかつた。彼は今になつてやつと全身のすぶ濡れになつてゐることに氣が附いて、服を脱がして黄ふのを待つてゐた。然し伙食司はまだ歸つて來ない。「片見」は續けた。

「あの軍人だつて左様だ！ 十二年には國の爲に戦つて勇氣のあることを示した。私はよく知つてゐる。あの人には凍えた掠奪者を裸にする様なことには向ひてゐるのだが、お轉婆娘に、じ、だ、んだ踏まれると何うにもかうにもならないほど奴隷を抜かれるのだ。」

「片見！」と私は二度目に喚いた。

ハルロフは「片見」をじろりと横目で見た。其の時まで彼は「片見」がゐるのに氣附かなかつたらしい。そして私が喚いたので初めて氣が附いたらしかつた。

「靜かにしないと危ないぞ。」と彼が勢涸壁で奴鳴つた。

「片見」は笑ひ轉げるやうにして歩き廻つた。

「あゝ、吃驚した。お前さんは本當に怖ろしい人だねえ。まあ髪でもとくのだね、左様しないと髪が乾いて綺麗に洗へなくなつて、嫌で刈らねばならなくなるよ。」と「片見」は急に憤怒して來た。「まだお前は意張る氣なのか。憐れな家無しが意張るなんて。お前の家は何處にあるの？ 何時も自慢してゐたがそれを聞き度いものだね。」「これは自分の家がある」と何時も云つてゐたが最う家は無いんだよ。

「『これの先祖』の家と云ふかもしれないね。彼はこの最後の言葉を急に思ひ附いたやうに浴せかけた。」

「ピチコフさん、お前何うしたの？ 前後のわきまへもなく。」と私が遮つた。

けれども彼は饒舌りぬいで、ハルロフの直ぐ傍で踊つたり跳ねたりした。執事と女中はまだ姿を現はさぬ。

私は心配しだした。ハルロフは母と話してゐる間に段々落着いて來て終ひには運命に身を任せると云つたやうな風さへ見えたのだが、それがまた次第に元に戻つて來るやうに見えた。彼の息づかひは次第に烈しくなつた。耳の下が急に脹れて、背は痠痛し、眼は再び猶猛な顔の黒い假面の中に休みな

く動きはじめた……。

「片見」「片見」お止し、お母様に告げるよ。」と私が喚いた。

けれども「片見」は狂気のやうになつてゐた。

「さうだ、今お前さんと私は非常に面白い位置に立つてゐるのだ。そしてお前の娘達と婿のウラジミル・ワシリウイツチはお前の屋根の下でお前の事を大笑ひしてゐるのだ。そしてお前は約束したやうに彼奴等を呪ふ。それでもお前には似合はないのだ。何うしてお前とウラジミル・ワシリウイツチと組合ひが出来るものか？ お前はワロートカと呼んでゐたね。お前はワロートカと呼んでゐる。彼はウラジミル・ワシリウイツチ・スレトキンさんと云ふ地主の紳士なんだ。そしてお前は何か、お伺ひしますが？」

凄まじい唸聲が「片見」の言葉を消した……ハルロフは起上つた。握拳を振上げて顔を紫色にし、引締めた唇からは泡を出して、忿怒に體を戦慄させ、例の體の様な聲で仄鳴つた。「屋根と云つたな！ 呪ふと云つたな……いや、己れは彼奴等を呪ひはしない……其の心配はない……然し屋根は……屋根は己れが打毀して、己れと同じ様に屋根無しにしてやる。此のマルチン・ベトロウイツチが何んな男か思ひ知らしてやる。己れの方はまだある。笑ひなければ笑はしてやる！ 彼奴等の頭の上に屋根

が無い様にしてやる！」

私は茫然としてしまつた。私は生れてからこんな涯もない忿怒を見たことがない。人間ではない——野獸が——私の眼の前を彼方此方と動いてゐるのだ。私は茫然としてしまつた……「片見」は「片見」で膽を潰して卓子の下に隠れてしまつた。

「何うしても！」と最後に奴鳴りながらハルロフは飲食司と女中を突退けるやうにして窓から飛び出した……そして藪地に庭を横切つて門の外に消えた。

二十五

飲食司が當惑した顔附をして、マルチン・ベトロウイツチが思ひもよらず急に歸つたことを告げて行くと母は非常に立腹した。彼は左様なつた原因を隠しはしなかつた。私も傍から其の事實のことを得心さした。母は鬼の様に部屋に走り込んだ。母の手に接吻しようとして近づくと「片見」に向つて「ちや皆んなお前が仕た事なんだ！ 皆んなお前の毒々しい口が仕た事なんだ！」と御免下さい、と、ちや……」かう口ごもりながら「片見」は兩肘を後に引いてもじくする。母は咎めるやうに「また直ぐ」が始まつた、と云つて彼を部屋の外に出さした。それから母は呼鈴を鳴らしてタウイチンスキー

を呼ばせ、彼に直ちにエスコウトに出かけて何んな事があつてもマルチン・ペトロウイツチを馬車で連れて歸るやうに云附けて、「彼れを連れて歸らぬお前には逢ひ度くない」と結んだ。此の重々しい波瀾人はお辭儀をして無言のまま部屋を出て行つた。

私は自分の部屋に歸つてまた例の窓際に腰を卸して、今日の前で起つたことを長い間考へたものだ。自分の家では殆ど殺されんばかりに扱はれて侮辱されても勘忍じておたハルロフが、高が「片見」のやうな卑賤な男の嘲弄や針でつくやうな言葉に自分を忘れて怒りだすとは何故だらう、私にはそれがさつぱり解らなかつた。其の頃の私は愚かな罵りと云ふものは、人から馬鹿にされてゐる男の唇から出ても時に忍び難い苦痛を與へるものと云ふ事を知らなかつたのだ。……「片見」の唇を漏れたスレトキンと云ふ憎らしい名前は、火薬に投込んだ火の子の様なものだつた。痛い傷口は最後の針の先を忍ぶことは出来なかつた。

約一時間が過ぎた。馬車は庭先に歸つて來たが其の中には執事の姿しか見えない。「彼を連れて歸らぬお前には逢ひ度くない」と母は云つたのだ。クウイチスキは「と馬車を飛下りて石段を断上つた。狼狽な顔だ——何か大變な事があつたらしい。私は喫煙に二階を断下りて彼の後に從つて客室に這入つた。母は「何うだつた？ 連れて歸つたか？」と訊ねた。

「駄目でした——何うしても連れて歸られないのです。」

「何うして？ 彼に會つたのか？」

「はあ。」

「何んな事になつたの？ 病氣の發作？」

「いえ、何んな事にもならないのですがね。」

「ぢや何うして連れて歸らなかつたの？」

「家を打毀してゐるんです。」

「えッ？」

「新築の家の屋根の上に登りましてね、それを打毀してゐるのです。最上板を四十枚以上は投落したでせう、それから五六本の梢も投げました。」（私は「頭の上に屋根なしにしてやる」と云つたハルロフの言葉を思ひ出した。）

母は凝とクウイチスキを見詰めて、

「一人……彼が屋根の上に登つて屋根を毀してゐるの？」

「左様でございます。屋根裏の板板の上を歩いてつ片端から打し毀してゐるのです。あの人の力と云つ

たら、奥様、素晴らしいものですからね。それに屋根も随分酷い屋根なんですよ。半時の屋根を広い間をあけて一吋ばかりの釘で止めてあるだけなんです。」

母は今の言葉を自分で正しく聞いたか何うか確かめるやうに私の顔を覗いて、「半時の広い間、」と繰り返してゐたが、これで見ても母には意味が解らなかつたのだ。「よし、それから。」と囁て母は促した。

「それで御相談に参つたのです。人手が無ければ手の着けやうがありません。彼處にある百姓達は皆んな腰を抜かしてゐるのですからね。」

「そして娘達は——何をしてゐるの？」

「何もしてゐないのです。いろ／＼な事を云つて喚きながら、うろ／＼走つてゐるのですが……何の役にも立ちません。」

「でスレトキンもゐるのだね？」

「ゐます。あの人は誰よりも一番烈しく喚き廻つてゐますが——手出しは出来ません。」

「そしてマルチン・ペテローウィッチは屋根の上に立つてゐるのだね？」

「屋根の上……詰り、天井の上ですね——そして屋根を徹底に打毀してゐるんです。」

「さうか、さうか、半時の廣さ。」

云ふまでもなく大變な大事件である。何處から足を踏出したらよからう？ 町に人を遣つて署長を呼んで来るか？ 百姓達を集めるか？ 母は途方に暮れてゐた。食事に來たジトコフも、つく／＼思案に暮れてゐた。彼がまた軍隊を引合ひに出したのは事實であるが、何の建議もしないで黙々として引込んでゐた。別に妙案もないと見て取つたクワイチンスキーは——彼一流の輕蔑したやうな恭々しい物腰で——若し母が馬丁や園丁や召使などを檢集めて連れて行くことを自分に許して呉れるなら何とかしてみようと云ひだした……

「さうとも、母は彼が云ひ終らぬうちに口を出して、「何とかしてみよお呉れ、ウイケンチー・オシビッチー！ 大急ぎでね、責任は皆んな妾が負ふから！」

クワイチンスキーは冷やかに頬笑んで、「然し其前に一口申上げて置きますが、ハルロフさんの腕力はその通りですし、其の上一生懸命になつてゐるのですから、何んな結果になりますか其處はお受合ひ出来ませんよ。何しろ酷い目に合はされたのを怒つてゐるのですからね。」

「さうとも、それも皆んなあの「片見」の咎なんだよ！ 最う勘辨しては遣らないつもりだ、ちや召使を連れて出かけてお呉れ！」

は怖ろしかつた。彼の吐く荒々しい鐵洞聲を聞くのも怖ろしかつた。庭には人が黒くなつてゐた。百姓女や、小供や、女中たちは籬の傍に密着してゐた。少し離れた此處其處には百姓が三三人づゝ塊まつてゐた。私も知つてゐる村の老僧は帽子も冠らずに他方の家の戸口に立つて、眞鍮の十字架を兩手に支へて時々黙つたまゝ絶望的な色を浮べてそれを高く捧げてはハルロフに見せるやうにした。其の傍にはエウラムピアが背を壁にして腰きもせず父を見入つてゐる。アンナは小窓から顔を覗けたかと思ふと直ぐ引込めて庭に姿を現し、それからまた家の中に這入つたりした。スレトキンは鉛の様に蒼ざめて古い寛衣に帽子を冠つたまゝ銃を手にして小刻にちよ／＼歩き廻つてゐる。謂はゞ彼はすつかり猶太人になり濟ましてゐるのだ。彼は喘ぎながらハルロフに銃を向けてみたり、振つて見せたりして嚇しては、また其の銃を肩にをさめた——と見るとまた銃を向けては、泣いたり、叫んだりする……「片見」と私の姿を見つけるや否や飛んで來た。彼は泣聲で、

「まあ見て下さい、この有様は何うです！ 見て下さい！ 氣が違つたんですよ。狂人になつて暴れてゐるんです……あの爲る事を見て下さい！ 巡査を呼びに遣つたのです……ね——誰も來ないので！ 誰も來ないので！ 私が撃つても法律は私に干渉できないのです。誰でも自分の財産を守る權利はあるのですから！ 撃つてやらう？ ……本當に撃つてやらう！」

彼は其家の傍に斷つた。

「マルチン・ベトロウイツチ、そらつ！ 下りぬと撃つぞ！」

「撃つてみい！」屋根から鐵洞聲がした。「撃つてみい！ 時にこいつをお前に遣らう！」

長い板が二度ばかり空を回轉して凄まじい勢でスレトキンの足元に落ちて來た。彼は飛上り、ハルロフは笑つた。

「あゝ怖い！」と私の後で誰か云つた。私は周圍を見廻して「片見」を見た。「あゝ！ 彼奴も今度は笑へないな！」と思つた。

スレトキンは傍近く立つ百姓の襟頭を掴んで力一杯揺すりながら泣聲になつて、

「登らんか、登らんか、皆んな登らんか、馬鹿野郎目、己れの家を守るんだ！」

其の百姓は二三歩踏み出して頭を後に、兩手を振つて、「は、はい！ 旦那！」と叫んで足踏みをして、それからまた後返りをした。

「梯子だ！ 梯子を持つて來い！」とスレトキンは他の百姓に奴鳴りつけた。

「何處から取つて來るのです？」と返事が聞えた。

するとまた他の落着いた聲がした。「若し梯子があるにしても、誰が登るものか？ そんな馬鹿があ

るものか！ 頭を振じられてしまわあ——ちよつとの間に！」

「あの人は直ぐ人を殺すんだ」と髪の毛の白つぼい間の抜けた顔をした子供が云つふ。

「まつたくだよ」と他の聲が相槌を打つた。よしんば危険がないにしても百姓達はこの新しい主人の命令に従ふのは嫌らしく見えた。彼等は驚きながらもハルロフのすることを尤もだと心では思つてゐたのだ。

「あゝ、お前たちは泥棒だ！」スレトキンは恨むやうな聲で云つた。「お前たちは皆んな……」

此の時恐ろしい音響と共に残りの煙突が崩れかゝつた。見るまに立上る黄色い塵の雲の真ん中に、血のじむ手を高く上げて鋭い叫聲を立てながらハルロフが此方を向く。スレトキンはまた彼に銃を向けた。

エウラムアが彼の腕を引張つた。

「邪魔をすな！」と彼は荒々しく奴鳴つた。

彼女は掣めた眉の下から青い眼を嚇かすやうに光らせながら答へた。「あなたも——あなたもお止しなさい！ お父様は自分の家を毀してゐるのです。あれはお父様の家なんです。

「嘘だ。私たちのものだ！」

「あなたは私たちのものと云はれても、妾はお父様ののだと云ふのです。」

スレトキンは狂念して叱咤した。エウラムビアは彼の顔を貫くやうに見詰めた。

「何うだ！ 娘！」とハルロフが上から奴鳴た。「何うだ！ エウラムビア！ 情夫との仲は何うだね

！ 接吻したり撫でたりするのはいゝかい？」

「お父様！」とエウラムビアの音楽的な聲が呼んだ。

「えゝ、娘？」かう答へてハルロフは壁の直ぐ傍まで近づいた。私の見た處では彼の顔は奇妙な、微笑、輝やかしい、真しそうな——またその爲に不思議に珍らしく毒々しい微笑を浮べてゐた。……私は數年後に此の微笑を死刑の宣告を受けた者の顔に見たことがある。

「最う止して下さい、お父様、降りて下さい。妾たちが悪かつたのです。何もかも皆んなお父様にお返ししますから、其處を降りて下さい。」

「私たちの物を何うすると云ふんだ？」とスレトキンが云ふ。エウラムビアは益々腹立たしやうに顔を掣めるばかり。

「妾の物は、お返しします。妾は何んにもお返しします。最う止して降りて下さいね、お父様！

妾たちを勘辨して下さい。」

「ハルロフは相變らず微笑してゐる。「最う遅過ぎる、可愛い娘、」彼の一言々々は眞鍮のやうに鳴響いた。「お前の石の様な心が今になつて醒めても最う遅過ぎる！ 岩が山から轉がりだしたんだ——止めることが出来るものか！ 己れの運は定まつてゐる人だから、己れを見ないがよいぞ。それよりもフロトカを見るんだ。好い男を拾つたものだなあ！ それからあの怖ろしい姉さんを見るんだ。あすこの窓から狐の様な鼻を覗けて、亭主を見てらあ！ お前達が云つても最う駄目だ。己れの頭の上から屋根を盗んだから、己れもお前達の頭の上に一本の梁も無いやうにして遣るんだ！ 己れの手で建てた家を、己れの手で毀すのだ——人手を借らずに己れの手で毀すのだ！ 見ろ、己れは一本の斧だつて借りぢやないぞ！」

「彼は擴げた両手を眺めながら高笑ひをして、また中央の梁を握つた。

「最う澤山、お父様、「エウラムピアの聲は驚くほど優しくなつた、「濟んだ事は濟んだ事にして下さい。ね、妾を信用して下さい。何時も妾を信用して下さいたちやありませんか。さあ、降りて下さい妾の小さい部屋の軟かい寢床に来て下さい。それを乾かして温めて上げますから。傷を巻いて上げますから。御覽なさい手に傷をしてから。基督の胸にゐるやうに大切に、美味しいものを拵へて——よく眠らして下さいますから。ね、妾たちが悪かつたんです！ あんまり増長してゐたんです、妾たちは

罪を犯したんです！ ね、勘辨して下さいさねー」

ハルロフは頭を振つた。「最う云ふな！ お前を信用する！ 最う駄目だ！ お前の信用はなくなつてしまつたのだ！ 何もなくなつてしまつたのだ！ 驚だつた己れが、お前の爲に蟲になつた……お前は……蟲さへ潰す氣か？ 駄目だ！ 己れがお前を可愛がつてゐるのは解つてゐるだらう——然し最うお前は己れの娘でもないし、己れはお前の親でもないのだ……己れは運の定まつた男だ！ 邪魔をするな！」今度はスレトキンに向つて怒號し始めた。「お前は撃てるなら撃つてみい、臆病者、天下の豪傑！ 何故狙ふばかりして撃たないんだ？ 若し受ける者が與へる者の命を取らうとすれば、ハルロフは明瞭に云つた、「與へる者は其れを残らず取戻す権利があると云ふ法律を知つてゐるか？ ハツハツ！ 心配すな、法律家の先生！ 戻せと云やあしない。己れは自分で何もかも結末をつけるんだ……そらつ！」

「お父様！」とエウラムピアが最後の哀願をする。

「黙れ！」

「マルチン・ベトロウイッチ！ 兄貴！ 寛大に許してやりたまへ！」と「片見」が口ごもりながら云ふ。

「お父様！ お父様つたらー！」

「黙れ、みだらな女！」

ハルロフは「片見」には見向きもしなかつた——たゞ彼のゐる方に唾をはいたきりであつた。

二十七

丁度この時、伴の者を引つれたクウイチンスキ一の三臺の馬車が門口に見えた。疲れた馬は喘ぎ、人々は一人づゝ馬車から泥の中に飛降りた。

「あゝ！」ハルロフはカ一杯の聲を上げて叫んだ。「軍隊……軍隊が遣つて来た！ 有りたけの軍隊をまこしたな！ 結構！ たゞ一口云つて置くが——若し誰でも此の屋根に上つたら、眞つさかさまに打落すぞ！ 己れは無愛想な主人だから、來ちやならぬ時に遣つて來るお客様は嫌なんだ！ 何うしても嫌なんだ！」

彼は破風の袂と云はれてゐる屋根の前の桶に両手を掛けてぶらさがつて、烈しく揺すりだした。天井裏の端に中心を取つて、船頭のやうに拍子をつけて、「最一つだ！ 最一つだ！ おゝ、おゝ！」と歌ひながら其れを引張つた。

ズレトキンはクウイチンスキ一の傍に断寄つて泣言や不平を並べ出した。……クウイチンスキ一は「邪魔をしない様に」と断つて置いて自分の考へた計畵に取かゝつた。彼は先づ家の前に場所を取つて、其處からハルロフに向つて彼が思ひ止まるやうに、そんな事は彼の身分に似合はぬではないかと云つた……

「最一つだ！ 最一つだ！」ハルロフが歌ふ。……「あのナターリア・ニコラエウナは是れを非常に残念がられて、かうならうとは思つてゐられなかつた……」

「最一つだ！ 最一つだ！」おゝ、おゝ！」とハルロフが歌ふ……其の中にクウイチンスキ一は馬丁の中で最も頑強で膽の太い男を四人選んで家の裏から彼の背後を目掛けて攀じ登らせる。それと氣附いたハルロフは矢庭に柱を棄て、屋根の上を裏の方に走つた。すると早や屋根裏まで登つてゐた二人の馬丁は、彼の様子に魂消たものか直ぐさま水管の傍の地上に飛降りてしまひ、農奴の小供達はそれを見て大喜びして腹を抱へて笑つた。ハルロフは其の後で拳を打振つて見せ、それからまた表の方に行つて先つきの柱を握つて船頭の様子に歌ひながら揺すり始める。

と、急に彼は手を休めて眼を凝らした……

「マキシミニエーシユカ、おい……己れの味方のマキシミニエーシユカぢやないかなお前は？」

私は周囲を見廻した……其處には事實マキシム・シユカが人ごみの中から前に進み出てゐた。彼は齒を現はしてや／＼笑ひながら進み出てゐた。休日なので主人の仕立屋に暇を貰つて來てゐたのだらう。「登つて來い、己れの云ふことをよく聞くマキシム・シユカ、二人で一緒に悪い鞭打人やリスアニアの泥棒から逃れようぢやないか！」

にや／＼笑つてゐたマキシムカは素速く屋根に登らうとする……みんなはそれを引降した——彼がマルチン・ペテローウイチを手つたたとて大した助けにはなる筈はないのに何故引降したのかは知らないが、多分他の人達の見せしめの爲だつたのだらう。

「おゝ、構はない！ ようし！」かう囁すやうな聲で云つてまた柱に手を掛けた。

スレトキンはクウイチンスキーに向いて、「ウイケンチー・オシビッチ！ あなたの許可を得て撃ちますよ。嚇かしさへすれば可いのです、銃には鶴を撃つ弾丸が込めてあるだけなんですから。」が、クウイチンスキーが返事する間もなく前方の柱がハルロフの鐵の様な手に插られて凄まじい響きを立てゝ庭に倒れかゝつた。其れと一緒に體を支へ得なかつたハルロフも重々しい音をさして地上に落ちた。一同が戦慄して息を吸込んだ……ハルロフは身動きもせず胸を地につけて横たはり、背には破風の木片と一緒に落ちた屋根の頂の一番大きい梁が乗掛つてゐた。

二十八

一同はハルロフの傍に駆寄つて梁をのけて彼を仰向けに起した。顔には生きた色がなく、口のまはりに血がにじんで、呼吸も断えてゐる。「息が止まつてゐる」と彼の傍に集まつた百姓たちが云つた。彼等は井戸に走つて釣瓶に一杯水をくんで來てハルロフの顔に打かけた。泥と塵は洗はれたが正氣はつかない。彼等は腰掛を曳つて來て家の傍に置き、やつとのことで遠大なハルロフの體を持つ上げて頭を壁にして其の上に戴せた。小僧のマキシムカは近寄つて片一方の足で跪き、片一方の足はすつと後ろに伸ばして芝居で遣る時のやうに主人の手を取つた。死んだやうに蒼ざめたエウラムピアは彼女の父の正面に立つて其の大きい眼で凝と見詰めた。アンナとスレトキンは彼の傍に來なかつた。みんなが黙つてゐた。みんながさながら何事かを待ちまふけてゐるやうであつた。やがて私たちはハルロフの喉咽で、何か飲込むやうな、唇を鳴らすやうな、切れ／＼の音を聞いた……それから右手（左手はマキシムカが握つてゐた）を微かに動かし、右の眼を開いて靜かに周囲を見廻して「恐ろしく酔拂つた人のやうに呻いで、はつきりした聲で断え／＼に云つた「遣られた」それからちよつと考へた後に「とう／＼、か……鴉色の……こ……仔馬！」突然彼はしたゝか血を吐いた……彼の全身がびく

く、痙攣した……。

「臨終だ！」かう私は思った……が、ハルロフはまた同じ眼（左の眼瞼は死んだやうに動かなかった）を開けてエウラムピアを見入りながらはつきりした聲で息も断えく、「よし、む……むすめ……お前と、己れは……」

クウイチンスキーは素早くまだ石段に立つてゐる僧を手招きした……老僧は窮乏な衣を方のない足にもつらせながら遣つて来た。此の時不意にハルロフの足と腹が怖ろしく引懸つて、不規則な痙攣が顔に走つた。同じ様なエウラムピアの顔は頓えてゐた。マキシムカは十字を切つた！ 私は怖ろしくなつたので外に飛出して周囲を見向きもしないで門のそばに少さくなつてゐた。やがて一分間ばかりたつと私の後ろの群集にひそくと幽かな騒ぎが起つた。そして私はマルチン・ペトローウイチが最う生きてゐないのだと知つた。

死後に検査した處によれば、梁の爲に頭骸骨と肋骨を挫かれてゐたのだ。

二十九

彼が臨終の際に彼女と云ひかけた事は何だつたらう？ 私は家に歸りかけの馬の上で頻りに考へ

た。「己れは……許さぬ、」だつたらうか。雨はまた降り出したが私は馬を走らしもしなかつた。私は何時までも一人で心行くばかり追想に耽りたく思つた。「片見」は早やクウイチンスキーと一緒に来た馬車に乗つて歸つてゐた。私は其の頃は幼なくて何も知らなかつたが、總ての人の心を同じ様に一時に動かす（小さい事ばかりに限らず）ところの死——豫期されたとされなかつたとに拘らず——と云ふものの莊嚴さと、嚴肅さと、信實さとに深く胸を打たれざるを得なかつた。私は胸を打たれて自分の困惑した子供らしい眼でいろ／＼なものを一時に見た。スレトキンが何んなに急いでこつそりと、盗んだ物か何ぞの様に其の銃を人目から隠したことか。彼と彼の妻が何んなに黙々のうちに、人々から遠ざけられる對象に早變りしたことか。エウラムピアは、其の罪は姉に劣らぬかも知れないが、遠ざけられはしなかつた。彼女が死んだ父の足元に到れかゝつた。時には或る同情をさへ起こさせた。けれども彼女も亦た罪を持つてゐると云ふことは人々も知つてゐた。髪が白くなつた頭の大きい一人の百姓が、長い杖に兩手と髻を當て、乗掛かりながら、古い審判者のやうな態度で斯う云つた、「此の老人は濟まぬことをされたのだ。お前たちの魂には罪が宿つてゐる！ お前たちは此の人に濟まぬことをしたものだ！」この言葉は最後の審判として總ての人々に直ちに受容られた。この言葉に百姓たちの正義の感じが表はれてゐると私は直ぐに氣が附いた。私はまた初めにはスレトキンが差圖をしよ

うとさへしなかつたのを認めた。彼の差圖を持たないで人々は死骸を起して一方の家に運んだ彼の差圖を持たないで僧は要るものを寺に取りに行き、村の年寄は馬と車を町に遣るために村に走つた。アンナでさへ「死人を洗ふ湯」が要るので湯沸を持って來させる時に例の威丈高な聲を護しんだほどだ。彼女の命令は寧ろ哀願するやうで、其れに對する答は荒々しかつた。

私は断えず彼が娘に云ひかけた言葉は何であらうかと云ふ問題を考へ續けた。彼は彼女を許さうとしたのだらうか、それとも彼女を呪はうとしたのだらうか？ 終に私の心は定まつた——それは許したと。

三日後にマルチン・ペテローウイチの葬式が行はれた。葬式の費用は彼の死を深く悲しんだ私の母によつて出されたが、母は何んな費用も節約すなと云附けた。母はあの二人の悪い氣儘娘と、忌はしい小さい猶太人を見るのが嫌だと云つて葬式には立合はなかつたが、その代りにクウイチンスキーと私とジトコフを立合はせた、尤もそれからと云ふものは母はジトコフの事を本當のお婆さんだと云つてゐたが、母は自分の友人を「片見」が殺したと云つて、長い間「片見」を怒つて傍に寄せつけなかつた。彼もまた其の不面目を強く意識して母の居間の隣まで來ては何時にも爪足で走り、一種のおびやかされた卑劣な憂鬱症に身をまかせて、ぶる／＼しながら「戸ぐー」を咳いてゐた。

寺の内や、葬式の途々ではスレトキンも落着きを回復してゐた。彼は例の小如く急がしげに奔走しては命令を下してゐた。そして自分のポケットから出た金ではないのだが無駄な費用は一文も使はぬ様に愠深い注意を拂つてゐた。マキシムカは、これも私の母から貰つた新しい哥薩克の服を着けて、合唱隊に混つて其れを聞く人は誰れでも彼が故人に對する奉仕の誠實を疑はない様なテノルを出して歌つた。二人の姉妹は喪服を纏つてはゐたが、彼等、殊にエウラムビアは悲しむでゐると云ふよりは喪心してゐるやうに見えた。アンナはおとなしい質素な風をしてゐたが、泣かうとはしないで始終美しい細い手で髪や頬を撫でゝゐた。エウラムビアは始から終まで淡い思ひに沈んでゐるらしかつた。ヘルロフが死んだ日に見られたあの普遍的な根強い疏絶と非難の氣分は、此の日寺に集まつた人々の總ての顔や、動作や、眸の中に、一層いかめしく、さながら人間でないほど烈しくなつてゐるのが見られた。そしてヘルロフ家の人々が墮ちた此の大きい罪は、今や唯一の正しい審判の前に立つたので、其の爲に人々は最早や心配したり憤怒したりする必要がないと考へてゐるやうにも見えた。一同は生きてゐた時には好むと云ふより恐れてゐた人の靈に向つて恭々しく祈禱した。死は餘りに不意に彼を捕えた。

「別に大して酒も飲まなかつたのになあ、」と入口に立つ一人の百姓が他の一人に云ふと、

「いや、あの人は酒を飲まんでも酔拂つてゐたんだ。」と一人が答へた。

「随分虐められたんだ。」と第一の百姓が概括した處を繰返して云ふと、

「虐められたんだ。」と一人も呟いた。

私はハルロフの農奴らしい百姓に、「死んだ主人はきびしい方だつたらうか？」と訊ねてみた。

「そりや左様でしたがね、けれども……何しろ餘り酷くお虐められましたよ！」

「酷く虐められた」……私はまた群衆が斯う囁くのを聞いた。

墓地でもエウラムピアは自失した様に佇んでゐた。いろ／＼な考へが彼女をさいなんでゐたのだ……にがい考へが。私はスレトキンが幾度も彼女に話しかけると、彼女が會てジトコフに對していたやうな、いやそれよりも一層酷い態度で彼を取扱ふのを見た。

それから数日たつた後にエウラムピアが父の家を永久に立去つたと云ふ噂が村中に擴まつた。何でも自分の財産はまるで姉と姉婿に遣つてしまつて、僅か二三百留の金しか持たずに出たのださうな……「アンナが買ひ出したのだらう！」と云つた母は、骨牌の相手をしてゐるジトコフ——彼は「片見」の代りをするやうになつた——に向いて、「けれどもお前と妾は本當に馴れた手を持つちやゐない！」ジトコフは元氣なく彼の大きい掌を見入つた……「こんな手！ 馴れてゐないと！」心で云つ

てゐるやうに見えた……

間もなく母と私はモスコーに住む様になつた。そして私が再びマルチン・ペトロウイッチの娘たちに邂逅ふ運命になるまでには長い年月がたつた。

三十

けれども私は再び彼等に逢つた。アンナ・マルチノウナには最もありふれた逢ひ方をした。

私は母の死後、十五年以上も歸らなかつた田舎に久しぶりに歸つたが、其時後家のアンナ・スレトキンの地處で行はれる近處の地主達の會議への招待状を仲介者から受取つた。(其の頃は百姓達と前地主との間に境界を定めるのが忘るべからざる遅さを以て露西亞全體に行はれたものだ) あの梅の實のやうな眼をした、母の云ふ「嫌な小さい猶太人」がこの世に最うゐないと云ふことを聞くのは、正直に云つて悲しくもなかつたが、取残された其の後家を見るのは興味があると思つた。彼女は萬事をきび／＼と切つて廻すので近處中の評判であつた。見れば流石に評判通りで、地處も、住所も、家そのものも、(私は屋根を見ずにはゐられなかつたが今は鐵の屋根になつてゐた) 總てがきちんとしてゐた。總てが小綺麗に、清潔に、整頓してゐて、必要な處にはペンキを塗つたりして、まるで其の家の

主婦は獨逸人かと思はれる位であつた。アンナは無論争を取つてゐた。けれども曾て私を惹着けたあの妙に冷たい、意地悪るさうな魅惑はまだ残つてゐた。川舎らしい着物を着てはゐたが何處か優美なところが見えた。彼女は私たちを心から迎へはしなかつたが——この言葉は彼女に當てはまる言葉ではない——慇懃に迎へて、あの怖ろしい光景の目撃者たる私を見ても、眼瞼ひとつ振はせなかつた。彼女は私の母のことや、彼女の父のことや、妹のことや、夫のことは少しも口にいさなかつた。彼女は二人の娘を持つてゐたが、それが二人共非常に美しく、細つそりした手で、可愛い小さい顔と、明るい、人なつこい、黒眼を持つてゐた。その他にまだちよつと父に似た男の子が二人あつたが、まだほんの子供だ！地主たちの相談の時にはアンナは酒まじ込んで落着き拂つてゐたが、別に頑固に云張つたり、怒ばつたりはしなかつた。然し彼女ほど自分の利害を明らかに見破つて、自分の権利を旨く主張できる者はなかつた。「事件に關する」總ての法律や、理事者の廻状まですつかり心得てゐた。あまり饒舌らず、時々靜かな聲で話すだけだが、それが急處々々を突いた。そしてとう／＼結局私たち一同が彼女の要求を容れて讓歩することになつてしまつたので、私たちは自分で自分を驚くより外なかつた。歸り途で地主の中でも主だつた人たちはひどい言葉さへ云ひ、妙な聲を出して頭を振つた。

「あの女は喰へないよ！」と一人が云ふと、他の少々亂暴さうな地主が、

「するい奴だ！口は優しくても仕る事は酷い！」と云つた。

「其の上に随分吝だ！」と第三の人が云ふ「酒の一杯も桶鹽漬の一片も出さないなんて——何うだ君？」

すると其時まで黙つてゐた一人の紳士が怨じだした。「あの女に其んな事を注文できるものか？あの女が自分の夫を毒殺したことは誰でも知つてゐらあ！」

私はこの怖ろしい、無根だと解りきつた説に誰も反對しようとしないうのを不思議に思つた。なほ一層私が不思議に思つたのは、先に述べたやうに輕蔑の色は浮べてゐるに拘らず、一同が、あの亂暴な地主に到るまで、アンナに對して尊敬の念を抱いてゐたことだ。殊に仲介者に至つては口を極めて褒めたほどだ。

「あの女を女王にしたら、」と彼は云つた。「セミラミスや、カテリーナの様な女王になれるよ！あの百姓たちの訓練の行きとゞいたことは全く模範だ！……子供たちの教育の仕方も模範だ！偉い頭だ！偉い智慧だ！」

セミラミスやカテリーナの問答は別としても、兎に角アンナが頗る幸福に暮してゐると云ふことに

は疑を差挟む餘地がなかつた。内部と外部の平安と、精神的健康の快い静寂は、彼女自身と、彼女の家庭と、彼女の環境との雰圍氣のやうに思はれた。此の幸福を受ける資格が彼女に何れほどあるか……それはまた別な問題である。そんな問題は若い時にのみ考へるべきである。好いことも悪いことも、世の中の總てのことは、其の人の賞罰から來るものではなく、未知の、けれども論理的の、或る法則から來るものである。その法則は私は示さない時々自分でも幽かにそれを認めたやうな氣のすることはあるけれど。

三十一

私は仲介者にエウラムビアの消息を訊ねたが、彼の話によれば家を出て以來何うなつたのやらさつぱり解らない、多分「遠うに此の世を去つた」のだらうと云つた。

敬すべき仲介者はさう云つた……けれども私はエウラムビアを見たと思つてゐる、確に彼女に一度出會つたと思つてゐる。其の話は斯うなのだ。

私はアンナと會見してから四年後に、ベテルブルグの近くの、中流階級の避暑客で有名なムリノと云ふ小さい村で一夏を過ごしたが、其の頃のムリノの近在は獵にこく宜いので、私は毎日の様に銃を操

ぎ出したものだ。何時も私はウイクロフと云ふ商人階級の男を連れて出たものだが、この人は氣の利いた、氣立てのいゝ人で、自分で自分の事を何の位地もない男だと云つてゐた。彼は何んな處にも行つたことがあり、何んなことも仕たことがあるので、彼を珍らしがらせるものはない、何でも知つてゐるのだ——けれども彼は獵と酒の他には見向きもしなかつた。さて、或る日私たちがムリノに歸つてゐたら、ふと路の辻の處に高い密な柵圍に取巻かれた一軒家の立つてゐるのが見えた。此の家を見たのは其の時が初めてではなく、見る度に私は好奇心を唆られてゐたのだ。何だか神秘的な、隠遁的な、陰鬱な沈黙のある、何だか何處か牢獄か病院を思ひ出させるやうな家であつた。路からは其の家の傾斜のはげしい黒つばい赤のベンキを塗つた屋根しか見え、柵圍にはたつた一對の入口があるばかりだが、それも固く閉じられて滅多に開けたことがないやうに見えた。そして柵圍の内には何の物音もしなかつた。其れにも拘らず空屋とは何うしても思はれず、誰かど屹度住んでゐるらしく思はれた。いや、その反對に反つて萬事が丈夫で堅固でしつかりしてゐて、さながら外敵を防いでゐるやうに見えた。

「あの城塞のやうなものは何ですか？ 君知りませんか？」と私は伴の男に訊ねた。

ウイクロフは意味ありげな腰きをして、

「いゝ家でせう？、此の邊の警察署長はこれでいゝ儲けをするのです！」

「何うしてです？」

「かうなんですよ。君はフラジラント派の反抗信者のことを聞いたことがありませんか——あの坊さんなして遣つて行く信者のことを？」

「ええ。」

「その信者仲間の母が此處に住んでゐるんですよ。」

「女ですか？」

「ええ——母です、神の母だと云つてゐるのです。」

「馬鹿な！」

「ところが本當なんですよ。眞面目な人でね……まるで司令官です！ 數千人を支配してゐるんです！ この人や他の母たちのことは知つてゐますが……そんな事を話したつて何になりますか？」

彼はベガーシユカを呼んだ。ベガーシユカは素的な犬で臭ぎつけることは早いが忍ぶことを知らない。それでウイルコフは烈しく駈らない様に後足を結つてゐた。

彼の言葉は私の記憶に深くしみ込んだ。私は時々わざ／＼其の神秘的な家の前を通つてみた。或日そ

の家の近くに差し掛ると、不思議な話だが、だしぬけに門の門の音と鍵の軋る音がして、靜かに扉が兩方に開いたかと思ふと、大きな馬の首がぬつと現れた。其の馬は鬣を辨んで、飾のある轡をつけて博勞や呼賣商人が持つてゐる様な小さい車を曳いて靜々と道路に出た。馬車の革布圍の上には私に近い方の側に、非常に美しい容貌の三十ばかりの百姓男が、小ざつぱりした黒のルバーシユカに、同じ黒の帽子を目深に冠つて座つてゐる。彼はベーチカのように巨大な横腹をした立派な逞しい馬を、用ひ深く駈してゐる。この百姓と並んで、私の向ふ側には、弓の矢の様に眞つ直ぐな、背の高い女が座つてゐるが、彼女は高價な黒い肩掛で頭を包み、鳩の様な天鵝絨の短かいジャケツに黒味がよつた青色のメリノのスカートを着け、白い兩手は慎み深く膝の上で握り合はしてゐた。

馬車は路に出ると左に曲つた。女は私から二歩の處に近づいて、ふと此方を振向いた。その瞬間に私はエヴランピア・ハルロフを認めた。私は直ぐ彼女だと思つた。其處に一瞬間の疑惑もなかつた。何うして彼女を疑へよう。あんな眼、ことにあんな高慢な、肉感的な口元を彼女の他に誰が持つてゐよう。彼女の顔は稍々瘦せて長くなり、皮膚は黒くなつて處々に皺が見え、顔全顔の表情がすっかり昔と變つてゐた。其處に表れた自信、自尊心、嚴格な心持は、とても言葉では述べられない。彼女の顔には力の静けさばかりではない——力の飽滿が表れてゐた。彼女は何氣なく私の方を見たが、その眼

差にも彼女が長い間人々の深い尊敬と服従のみに圍まれてゐたことは表れてゐた。崇拜者でなく、奴隷に圍まれて暮して來たのだと云ふことが明に表れてゐた。彼女は自分の命令や要求が直に満たされなかつた時代の事は、遠くの昔に忘れてゐるらしかつた。私は大聲で彼女の名を呼んだ。彼女は驚いたやうに私の方を再び見たが、その眼差には驚愕の色はなくて、「五月蝨い妾を呼び止めるのは誰だ？」と云はぬばかりの輕蔑した怒氣のみが表れてゐた。彼女は何やら一口百姓に云付けた。百姓は前にのしかゝつて腕を上げ、馬に一鞭くれた——馬は足を速めて走りだし、聽て彼等の姿は消えてしまつた。

私はそれから二度とエヴランピアに會はなかつた。何故マルチン・ベトロウイクチの娘が、フラジラント派の教母になつたのも、それは私には解らない。けれども恐らく、彼女が彼女自身の名にちなんで聽てエヴランピア派と云はれるべき——または今でも云はれつゝある分派の創設者であると云ふことを誰が知つてゐよう？ 世の中には何が起ころか解らない。何んな事でも起り得るものだ。

これが私の「曠野のリア」及びその家族の行ひの話である。

談話者は話を止めた。私たちはそれから暫くの間話をしたのちてんで、家に別れて歸つた。

よけい者の日記

布施延雄譯

千八百年——三月廿日——羊の泉の村にて

醫者は今し方歸つて行つた許りだ。到頭俺は決定的な或るものに到達した。あらゆる彼の狡猾さにかゝはらず、醫者は到頭白狀して了つたのだ。さうだ、俺は間もなく、本當に間もなく死ぬ筈なんだ。凍つた河は融けるだらう、そして最後の雪と共に俺は、殆んど疑の餘地なく泳ぎ去るであらう……何處へ？ 神ぞ知るだ！ やはり大洋へだらう。よし、よし、どうせ死ななくてはならぬからは、春に死ぬのもよからう。だが多分もう十四日経てば死ぬといふ時分に日記をつけ始めるのは馬鹿げては居ないか？ しかしそれがどうしたのだ？ そして十四日が十四年或は十四世紀に比べてどれだけ少いのだ？ 永遠を除いては一切が無だと人はいふ——然りしかし乍らその場合永遠もまた無ではないか。氣が附いてみると俺は形而上學の中に甘んじて陥らうとしてゐる。これはよくない徴候だ——俺はもしかすると、臆病者になつてゐるのであるまいか？ どうもこれは何事かの叙述を始める方がよいやうだ。戸外は濕つぽくて風が吹く俺は外に出る事を禁じられてゐる。それでは、どんな事が書けるだらう？ 行儀のいゝ間は自分の病氣のことなど話さないものだ。小説を書くのは俺の柄ではない。高尚な題目に關する考察などは俺の力に及ばぬ。自分の周圍に進行しつゝある人生の描寫などやつてみる興味は

俺にない。然るにまた俺は何も爲ないことに倦み疲れて、そして讀書するにはあまりに怠惰なんだ。あゝさうだ、いいことがある、俺は俺自身のために俺の一生の物語を書かう。これが一等いゝ考だ！ 死ぬ間際に爲ることとしてそれは持つて來いだ。そしてそれは何人にも有害である筈はない。俺は始めよう。

俺は三十年前に、可成りいゝ暮しをしてゐる地主の息子として生れてきた。父親はひどく博奕が好きだつた。母親は人格のある女だつた！ 至極有徳の婦人だつた。たゞ、俺はあれ位幸福を産みだすには役に立たない道德的優秀をもつた女は知らなかつた。彼女は彼女自身の徳の重みで押し潰されて、彼女自身からはしまつて他のあらゆる人の怒めさの根源になつた。五十年の生涯ちう、彼女は決して一度も休息をしたことがなかつた。すなはち手を膝において坐つてゐたことがなかつた。彼女はいつでも果もなく蟻のやうに騒々しく立ち働いてゐた、そしてそれが絶対に何等の善い結果をも産み出さなかつた——蟻の場合はさうではないと思ふ。休み知らずの蟻が彼女を夜晝となくじり／＼さしたのたつた。たつた一度俺は母親がまつたく靜かになつたのを見た。そしてそれは彼女が死んでから棺に入つたときであつた。彼女を眺めたとき、實際自分には彼女の顔が驚愕を抑へてる様な表情を帯びてるやうに思はれた。半ば開いた

唇や落ち凹んだ頬やおづ／＼見詰めてゐる眼やで以て、それは顔ちうで「休息といふものはこんなにいゝものなんだね」と言つてる様に見えた。さうなんだ、この生の倦怠な氣持から、生存の執拗な、休みなき意識から免れることは、善い、實に善いことだ！ だがそれは何處を探してもないんだ。

俺の育てられ方は良くなかつた、そして幸福でなかつた。父も母も二人とも俺を愛した。しかしそれは俺の物事をよくしなかつた。父親は恥づべきそして身も家も滅ぼす悪行におぼつぱらに耽つてゐたから、彼自身ですら些の權威もなくまた何等重きをなさなかつた。彼は自分の墮落して行くことを意識してゐた、で自分の氣に入りの熱情を打ち棄てる意志の力が無いところから、少くとも、その始終愛想の好い謙べた態度やどんな時でもへ／＼してゐることによつて、風變りの妻君から甘んじてまあ夫として立てられようと試みた。俺の母親がその試練に堪へ得たのは確かにその徳の高い威丈高な辛抱によつてであつた。そしてその中には獨善主義的な矜持が大分あつた。彼女は俺の父親をどんな事があつても決して非難しなかつた、最後の一錢を彼に與へた、そして一言も言はずに彼の負債を支拂つた。彼は彼女を面と向つてども唯々でも偶像の様に崇めてゐた、が彼は自分の家に居ることを欲しなかつた、そして俺をこつそ

り可愛がつた、恰も父親自身が傍に居ることによつて俺を墮落さしはしないかと恐れるかの様に。しかしさういふ場合に彼の引ん曲つた顔付きは大層深切さに充ちて、いつもの唇の神經的な痙攣の代りにバセチックな微笑が現れ、そして細い皺にとり圍まれた鳶色の眼は、俺が涙で濡れて温かい父親の頬に自分の頬を押し付けずには居られなかつたほどのさうした愛を以て輝くのであつた。俺は俺の手巾で以てその涙を拭きとつた、そしてそれは充ち溢れたグラスからの水の様に、何の苦もなしに又もや流れ出すのだつた。俺は、そして、泣きはじめた、そして父親は背を叩いたり、震へる唇で俺の顔ちうを接吻したりして、俺を慰めるのだつた。彼が亡つてから二十年以上経つた今でさへも、俺は、俺の可哀想な父親のことを考へるたびに、聲なき嗚咽が胸に上つて来る、そして俺の心臓は、あたかもそれが長い間うち續けなければならぬいかの様な、何か悲しむべき事柄が現在あるかの様な、さうした毒々しい憐憫の情を以て劇しく鼓動しかつ疼くのである。

俺の母親の俺に対する態度は、あべこべに、いつも同じで、深切だが冷やかだつた。子供の書物の中で、人はよくさうした説教好きの正しい母親に出會うものだ。彼女は俺を愛した、が俺は彼女を愛しなかつた。さうだ、俺は俺の有徳な母親に対する恥しさと戦つた、そしてよく

ない父親を熱情を籠めて愛した。

だが、今日はこれだけで澤山だ。これが初めだ、そして結末に就いては、それがどうあらうと、俺はそれに就いて頭を悩ませる必要はない。心配しなくてはならんのは俺の病氣なんだ。

三月二十一日

今日は騒ぐべき日和だ。暖かくて、輝かな日だ。日光は融けてゆく雪の上に嬉々として戯れてゐる。萬物が輝き、蒸氣し、滴つてゐる。雀共は濡れそぼちた暗い濃い雲のほとりに氣が狂つたものゝ様に轉つてゐる。また、濡つた空氣は甘美く怖ろしく俺の病んだ胸をいらだたせる。春だ、春が来るのだ！俺は窓の邊に坐つて、河を越して打ち開けた田舎を眺め渡してゐる。

お、自然よ！ 自然！俺はお前を大層愛する、だが俺はお前の胎内から役立たずとしてイヤこの世に適しない人間として、出て來たのだ。あそこに一羽のおほ雀が翼を擴げてびよい／＼飛んで行く。彼は機嫌よく囀る、そしてそのあらゆる歌聲、その小さな軀のあらゆる亂れた羽毛は、健康と力とを息づいてゐる……

それがどうなるか？ 何にもならないのだ 彼はたつしやでそして機嫌よく囀り、翼を振り

亂す権利を持つてゐる。だが俺は病氣でそして死なねばならぬのだ——それつきりなんだ。それについてこれ以上言ふ價值はないのだ。そして自然に向つて涙を流して祈るなぞいふことは濟度し難いくらゐ馬鹿げた事だ。俺をして俺の物語に歸らしめよ。

俺は嘗て言つた通り、ひどく悪くそして幸福でなく育てられた。俺は兄弟も姉妹もなかつた。俺は自宅で教育せられた。そして、實際、もしも俺が寄宿學校か公立の専門學校へでも遣られたなら、俺の母親は何をして目を暮したらう？ 子供が役に立つのはこれなんだ——つまり両親がすることがなくて困らない爲めなんだ。吾々は多くは田舎で暮した、そして時々莫斯科に行つた。俺は無論のこと數人の家庭教師やその他の教師を持つた。その中でとりわけ一人が俺の記憶に残つてゐる。それは乾びた、涙もろい獨逸人で、リツケルマンといひ、運命によつて残酷に取扱はれ、そしてその遠く離れた父祖の國に對する熱い憧れの情によつて無益に懲かかれてゐる類なく悲しい人間であつた。時々、狭苦しい控室の籠えたニスの酸っぱい臭氣に充ちた怖るべき息苦しさの中のストオヴの傍で、綽名を鷺鳥といふ髯ぼう／＼と生えた子守男のワシリイが、糞のいゝ靴を穿き、泡の様白い新しい羊革の上衣を着た馱者のポオタツプと骨牌をやる、すると、リツケルマンが次の部屋で、壁の向う側で唱ふのであつた。

心よ、わが心よ、如何なれば

さは惨ましき？

何が汝をさは苦しむるや

既に外國にあるにあらずや——

心よ、わが心よ、何をか汝求むるや？

俺の父親が死んだ後吾々は何かよいことを探すつもりで莫斯科に移つた。俺は十二歳であつた。俺の父親は夜中に殴られて死んだ。俺は決してその夜を忘れないだらう。俺は、子供達の例に洩れず、ぐつすり寝こんでゐた。が、俺は覺えてゐる、眠つてゐた間も俺はきちんと間をおいて重い喘ぐ様な物音に氣が附いた。突然俺は誰かが俺の肩を捉へて俺を小突くのを感じた。俺は眼を開けて俺の小守男を見た。「どうしたの？」「おいでなさい。おいでなさい、アレキセイ・ミハリツチがお亡くなりです。……俺はもう寢床の下に居た、そして氣が狂つたものゝ様に彼の寢室にとび込んだ。俺は眺めた。父親は頭をうしろへ投げて、血に染つて、怖ろしく喘ぎ

乍ら横はつてゐた。僕等は憎えた顔付きをして戸の周圍に群つてゐた。玄關で誰かど太い聲で訊ねてゐた。「醫者を呼びにやつたか？」庭では、一頭の馬が厩から曳き出されて來た。門がぎい／＼いつた。部屋の上に獸脂が燃えてゐた。母親がそこにゐた。ひどく顫動してはゐたが、節度を保つことも自分の威嚴を亂さないことをも忘れてゐなかつた。俺は父親の胸の上に身を投げた。そしてしがみついて、おろ／＼聲で言つた。「父さん、父さん……」彼は變な風に眼の玉をぐり／＼させながら、ちつと臥てゐた俺は父親の顔に見入つた——堪へ難い恐怖が俺の呼吸を止めた。俺は亂暴に捉へられた鳥の様に、恐ろしさを以て喚いた。人々が俺を拾ひ上げて運び去つた。ほんのその前の日に彼は自分の死の間近に迫つてゐることを曉つたかの様に、俺をひどく熱烈に絶望的に愛撫したのであつた。

眠さうな、頭髮を亂暴にした、怖ろしく酒の香のする醫者が連れて來られた。俺の父親は彼の手術の下に死んだ。そして翌日、悲嘆の爲に全く失心した様になつて、俺は手に蠟燭を持つて、死人が載つてゐる卓子の前に立つてゐた、そして時々下役の弱々しい聲によつて、遮られる所の補祭の低音の唄ひ聲に無意味に聞き入つてゐた。涙は俺の頬を、脰を、襟を、襯衣の前を流れ下つた。俺は涙の中に溶けた。俺は執拗に見まもつた、宛ら、父親から何事かを豫期す

るかの様に、その硬ばつた顔をうち成つた。俺の母親は徐りかに床まで頭をさげまた徐りかに起き直り、そして十字をきるとき、指をしつかり額や肩や胸部に、押し附けた。俺の頭の中には唯一つの考へもなかつた。俺はまるで心が痺れてゐた、が俺は何か怖ろしい事が俺の身に起りつゝあるのを感じた。……死がその日俺の顔に見入つて俺を覚えて了つた。

俺達は俺の父親の死後極く單純な理由から莫斯科に移つた。吾々の地所邸宅は負債を返すために競賣ですつかり賣られた——絶対にすつかりだつた、俺が今俺の素晴らしい生存を續けてゐるこの小さな村一つを除いて。俺は言はねばならぬ、俺は當時まだ少さかつたに拘らず、俺達の家の賣られたのを嘆いたことを。いや寧ろ、事實は、庭園の賣られたことを嘆いたのだつた。ほとんど俺の唯一の氣持のいゝ鮮かな記憶はその庭園と結びついてゐる。或る穩かな春の夕暮に、俺が俺の一番好い友人だつた短い房になつた尻尾と曲つた足とを持つた老犬のトリックスを埋めたのもそこだつた。長い草の中に隠れて俺がいつも盗んだ林檎——それは甘い、紅いノヴォゴロドの林檎だつた——を食つたのもこゝだつた。俺が實つた野毒の茂つた間で初めて女中のクラウチアを見たのもこゝだつた。彼女は振り返つた鼻を持つてゐて、頭巾を引きさげてその中でくつ／＼笑ふ癖があつたに拘らず、俺にひどく優しい情熱を起させ、俺はその爲ほ

とんど息も出來ずに、彼女の前に氣が遠くなる様な氣持で口も利けずに突立つてゐたのだつた。そして一度復活祭に、彼女が俺の小さい手に接吻する番になつた時、俺は危ふく彼女の足元に身を投げてそのぐた／＼に踏み躪られた山羊の皮のスリツバに接吻しかけた事があつたつけ。俺の神様よ！ それ等すべてが果して二十年も前の事なのか？ 俺がよく瘡せた栗毛の小馬に跨つて庭の垣根に沿うて歩かせ乍ら、鐘の中に立ち上つて白楊の二色の葉を摘んだのは大して以前のことでないやうに思はれる。人間は生活してゐる間は自分の身の生活に氣が附かない。それは時經てのち、物の響きの様に、聞えて來るのだ。

おい、俺の庭園よ、おい、小池に沿つたあの入り交つた運等よ！ おい、あの壊れた堤の下の小さな砂地よ、そこで俺はいつも河ぎすを捕へたものだつた！ そしてお前、丈高の樅の樹よ、お前の長く垂れた枝々の彼方から、荷車のがらく／＼いふ音に時々途切らされながら農夫の悲しげな唄が聞えて來たつけ！ お前達に俺は俺の最後の告別をする……此の世と別れるに當つて、お前達にばかり俺は俺の手をさし延べる。俺が今一度あの苦蓬の鮮かな苦い香を、俺の生れた故郷の野の刈りつた蕎麥の甘い香を、吸ひ込むことが出來たなら！ 今一度俺達の教會のひゞの入つた鐘の和かな音を遠くに聞くことが出來たなら！ 今一度昔よく行つた、山谷

の斜面に瑞々しく生ひ立つた樺の樹の冷たい樹蔭に横になつたら！ 今一度あの風に騒ぎ立つ野を、俺達の牧場の黄金色の草の上に起る暗い波浪を、眺めたなら……あ、さうしたらどんなによからうか？ だが俺は今日はもう書けぬ。これ丈だけで十分だ。明日また。

三月二十二日

今日はまた寒くてどんより曇つてゐる。かうした天気の方がぐつとより適當だ。これの方が俺の仕事に調和する。昨日は無益な情緒や記憶を夥しく俺の中に湧き立たせたが、あれは全くよくなかつた。あゝいふ事は二度とあらせてはいかん。感情的な爆発は甘草のやうなものだ。最初吸つた時にはわるくない、があとで口の中に至極厭な味が残るものだ。俺は單純に、沈靜かに俺の生涯の物語をなすべく仕事にかゝらう。で、さういふ風で、俺達は莫斯科に引き移つた。……

だが俺は考へる、實際俺の身の上話なんて、そんなことをする價值があつたら？

ない、それは確かにない。……俺の生涯はどの點に於ても他の多くの人間の生涯と違つてはゐなかつた。両親の家、大學、下級官吏、退職、友人の小さなサアクル、好い加減な貧乏に好

い加減な享樂、非野心的な追求、分相應な慾望——どうか深切に言つて呉れ、こんな事がたれかにとつて耳新しいかしら？ でそれ故、俺の身の上話なぞすまい、殊に俺は自分一個の愉しみに書いてるのだから。そして俺の過去が俺自身にとつてすら何等大いなる歡びの刺激も苦痛のそれも與へないとすれば、他人が注意して聞く價值なぞ毫もないに違ひない。俺は俺自身の性格を俺自身のために述べ立てる方がよからう。どんな風な人間で俺はあつたか？……何人も俺にそんな事を尋ねる人はゐまい——そりや知れきつた事だ。だが、そこで、俺は死にかゝつてゐるんだ、なあ——俺は死にかゝつてゐるんだ、で、死ぬ間際には、と俺は實際考へる自分が結局どういふ變挺な人間であつたかを發見しようといふ慾望は赦さるべきだと思ふ。

この重大な問題について考へたとき、そしてその上俺は、自分自身の價值ある性質に關して強い確信を抱いてゐる人々が兎角さうする様に、俺自身に關してあまりに辛い言ひ方をするとは無いだらうからして、俺は一つの事を言つておかなけりやならぬ。俺は此の世界で全然餘計な人間だつた——いや單によけいな生き物といふべきかも知れない。そしてその事を俺は明日説明しようと思ふ。俺は今日は年寄りの羊の様に咳をするし、それに俺の看護婦のテレンチエウナは俺に平和を與へないから、「お臥りなさいませ、旦那様。」と彼女は言ふ。「そして少しお

茶をお喫りなさいませ。……俺は何故彼女がさう言つて勸めるのか知つてゐる。彼女は自分が茶を欲しいのだ。宜しい、飲むがいゝ！ 哀れな婆さんをしてその主人から出来るだけの利益を煮き出させないといふ法が何處にあるか？ これが最後の機會なんだ……その機會がある限りそれをさせるがいゝのだ。

三月二十三日

また多になつた。雪片が舞ひ落ちる。よけい者、よけい者！……俺は素敵な言葉を言ひ當てたものだ。より深く俺自身の中に探り入るに従ひ、より熱心に俺の過去の一切を検すれば検するだけ、俺はこの言葉のびつたり當て嵌つてゐることを益々確信して来る。よけい者……正にその通りだ。他の人間には此の言葉は適用できない。……人間はみな悪いか善いか伶俐か馬鹿か氣持が好いか悪いかだ、しかし、よけい者……ではない。しかし、俺の言ふ事を了解して呉れ。彼等が居なくてもこれまた萬有の進行を妨げはしない……それは疑を容れぬ。しかし無用といふ事が彼等の主要な特質、彼等の最も目立つた性質ではない、そして彼等の事を話す時「よけいな」といふ言葉が君達の唇に上る最初の言葉ではない。所が俺は……俺について言ひ得

ることは他には伺はない。俺はよけい者でそしてそれ以上の何者でもない。つまり數に入らぬ者だ。それだけなんだ。自然はどうやら俺の出現を勘定に入れなかつたらしい。そしてその結果俺を豫期せられなんだ、招待されなかつた客として取り扱つたのだ。或る諧謔好きの紳士で熱烈な優種論者が俺について實にうまいことを言つた。俺のことを俺の阿母が人生の賭場で支拂つた罰金だといふのだ。俺は俺自身についていま靜かに、毫も辛辣味を帯びずに話してゐるのだ。……で、この仕事はもうこれで終つた！

全生涯を通じて、俺はたえず俺の地位の奪はれるのを見てきた。それは恐らく俺が自分の地位を求むべき場合にそれをしなかつたからだ。俺はすべての病的人間の例に洩れず、疑懼に充ち内氣で、激し易かつた。のみならず、多分自意識の過剰な爲に、あるひは俺の個性が、全體として、不幸な型である爲に、俺の思想や感情とこれ等の思想感情の表現との間に、一種説明し難き、不合理な、全然超ゆべからざる障壁があつた。そして俺がこの障壁物を強ひて打破しようとした時には、必ず俺の身振りや顔の表情やその他俺全體にわたつて、苦痛な、無理な様子が現れた。俺は不自然に、伴り勝ちに見えた許りでなく、實際さうなつて行つた。俺はこれを意識した、そして急いで俺自身のうちに逃げて歸つた。すると俺のうちに怖るべき動亂が